# 石田遺跡

# 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第122集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



# 石田遺跡

# 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第122集

平成16年 財団法人 山形県埋蔵文化財センター





3次調査区全景(上から)



3次調査区全景(西から)



3次調査区全景(東から)



SB 17・18・19 完掘状況(上から)

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、石田遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査は、日本道路公団の東北中央道相馬・尾花沢線(上山~東根間)の建設工事に伴いおこなったものです。調査は、東北中央道相馬・尾花沢線の建設工事に合わせて行われ、平成10年、11年、12年の三次を重ねました。

石田遺跡は山形県の県庁所在地であります山形市にあります。山形市は古くから政治経済の要衝として発展し、戦国時代の武将最上義光は、ここを拠点として、出羽国に号令を発しました。遺跡の所在地は市街地の西南、南山形地区にあたります。ここは豊かな水田や畑地が広がる地域であります。

遺跡からは、奈良時代、平安時代の掘立柱建物跡、囲み溝などの遺構が見つかり、さらには柱として使用されていた木材が出土いたしました。これらは古代の役所に関係する遺跡の在り方と共通しているところが見られ、山形盆地の古代の政治の様相を理解する上で重要な遺跡であることがわかりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられてきた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げま す。

平成 16 年 4 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター 理事長 木 村 宰

## 例 言

- 1 本書は東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事にかかる「石田遺跡」の第2・3次発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺跡 名 石田遺跡 遺跡番号82

所 在 地 山形県山形市大字谷柏字石田

調 査 主 体 山形県埋蔵文化財センター

受 託 期 間 平成11年4月1日~平成12年3月31日

現地調査 平成11年5月11日~平成11年8月6日(第2次)

調查担当 調查第四課長 名和 達朗

調 査 研 究 員 岡部 博 (調査主任)

調 査 員 豊野 潤子

受 託 期 間 平成12年4月1日~平成13年3月31日

現地調査 平成12年4月18日~平成13年8月25日 (第3次)

調查担当 調查第四課長 名和 達朗

調 査 研 究 員 山口 博之 (調査主任)

調 査 員 吉田江美子

整理期間 平成13年4月1日~平成16年3月31日

整理担当 調查第三課長 佐藤 正俊

調查第三課長 阿部 明彦

調査研究員 山口 博之

調 査 員 吉田江美子

4 発掘調査並びに本書を作製するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県教育庁文化財課(当時)、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、山形県土木部高速道路整備推進室、山形県山形建設事務所高速道路用地対策課、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、最上川中流土地改良区等関係機関にご協力をいただいた。また報告書の作製にあたり、以下の方々に指導・助言を得た。記して感謝する次第である。

田嶋明人、北野博司、松井敏也、三上喜孝、吉田歓、斉木秀雄、飯村均、八重樫忠郎、藤澤良祐、中 野晴久、斎藤弘(敬称略)

- 5 本書の作製執筆は、山口博之、吉田江美子が担当した。編集は水戸部秀樹、須賀井新人が担当し、全体については、阿部明彦が監修した。
- 6 委託業務は次の通りである

出土木質遺物の樹種 (東北芸術工科大学)、漆塗膜の科学的分析 (漆器文化研究所)、花粉化石 (パレオラボ)、有機遺物の同定 (東北芸術工科大学)

7 出土遺物、調査記録等は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK・土坑

SB・建物跡

ST・住居跡

SD・溝跡

SL・炉跡

SP・ピット

EL・カマド跡

EP・遺構内柱穴

EK・遺構内土坑

RP・登録土器

RQ・登録石製品

S・礫

EU・埋設土器

SX・性格不明遺構

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 調査区は3次調査区の北側が2次調査区、さらに3次調査区に隣接した東側を山形市教育委員会が、変電所用地に関連して調査している。山形市教育委員会のご協力を得て、遺構配置図を使用させて頂いている。山形市教育委員会2002「石田遺跡上谷柏遺跡発掘調査報告書」『山形県山形市埋蔵文化財調査報告書』第14集
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - (2) グリッドの南北軸は、N-29°50'-Wを測る。
  - (3) 遺構実測図は1/20、1/40、1/80、1/200縮図、その他で採録し、各挿図にスケールを付した。
  - (4) 遺物実測図・拓影図は 1/2、1/3、その他で採録し、各々スケールを付した。遺物図版については 任意としたが、重要なものについてはスケールを入れている。なお、実測図断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を表している。
  - (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
  - (6) 土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図を挟んで右が表面、左が裏面として図を作製した。
  - (7) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土 色帖」に拠った。
  - (8) 図版中に() で番号を記したものは、挿図中の遺物番号に一致する。
  - (9) 1次調査の遺物については、すでに山形県埋蔵文化財センター調査報告書第68集『東北中央道相馬・ 尾花沢線関係 予備調査報告書(2)』にて報告済みである。
  - (10) 黒色土器については断面図中にスクリーントーンで表示した。
  - (11) 第2次調査、第3次調査の2次にわたる調査をまとめて報告することになる。各調査については、できるだけそれぞれの次数に分けて報告する。

## 目 次

		1	調金の経済	<b>年</b>		
			1	調査に至る約	<sub>圣過··········1</sub>	
			2	調査の方法と	: 経過 1	
		II	遺跡の立地と環境2			
		${\rm I\hspace{1em}I\hspace{1em}I}$	調査の概要			
			1	調査区と層序	<del>5</del> ······9	
			2 3	遺構と遺物の	0分布10	
		IV	検出された	た遺構		
			1 *	縄文時代の遺	<b>遺構13</b>	
			2 3	奈良・平安時	寺代の遺構…13	
		V	出土した	遺物		
	1 縄文時代の遺物76					
	2 弥生時代の遺物77					
	3 奈良・平安時代の遺物…77					
VI まとめ120						
		付編	<b>,</b> 「石田遺	<b>动出土木質</b>	遺物の樹種」「石田遺跡出土古代漆塗膜の科学	
			的分析」	「石田遺跡の	花粉化石」「石田遺跡出土有機物遺物の同定」	
		報告	青沙绿 …	•••••		
			hy.	ते 145		
			X	加版		
第1図	遺跡周辺地形分類図	•••••	2	第14図	第3次SB7建物跡遺物出土状況·····23	
第2図	遺跡位置図	•••••	3	第15図	第3次SB8建物跡遺物出土状況·····24	
第3図	調査区概要図	•••••	4	第16図	第 3 次 S B 9 建物跡遺物出土状況 (1) ······26	
第4図	第2次調查遺構配置図	•••••	5	第17図	第 3 次 S B 9 建物跡遺物出土状況 (2) ······27	
第5図	遺構配置全体図	•••••	7	第18図	第 3 次 S B10建物跡······28	
第6図	基本層序図	•••••	9	第19図	第 3 次 S B11建物跡遺物出土状況 (1) ······30	
第7図	第3次調查遺構配置図	•••••	1	1 第20図	第 3 次 S B11建物跡遺物出土状況 (2)	
第8図	第3次SB1建物跡遺物出土状況…	•••••	17	7 第21図	第 3 次 S B12建物跡遺物出土状況······32	
第9図	第3次SB2建物跡	•••••	18	8 第22図	第 3 次 S B13建物跡遺物出土状況 (1) · · · · · · · 34	
第10図	第3次SB3建物跡遺物出土状況…	•••••	19	9 第23図	第 3 次 S B13建物跡遺物出土状況 (2)	
第11図	第3次SB4建物跡遺物出土状況…	•••••	20	9 第24図	第 3 次 S B14建物跡遺物出土状況······36	

第25図 第 3 次 S B 15建物跡遺物出土状況······37

第26図 第 3 次 S B 16建物跡遺物出土状況·····38

第12図 第3次SB5建物跡遺物出土状況……21

第13図 第3次SB6建物跡遺物出土状況……22

第27図	第 3 次 S B 17建物跡遺物出土状況(1) ······39
第28図	第 3 次 S B 17建物跡遺物出土状況 (2) ······41
第29図	第 3 次 S B 17建物跡遺物出土状況 ( 3 ) · · · · · · · 42
第30図	第 3 次 S B18建物跡遺物出土状況······43
第31図	第 3 次 S B19建物跡遺物出土状況(1) · · · · · 44
第32図	第 3 次 S B 19建物跡遺物出土状況(2) · · · · · 45
第33図	第3次SB20建物跡遺物出土状況·····46
第34図	第3次SB21建物跡遺物出土状況·····47
第35図	第 3 次 S B 22建物跡遺物出土状況······48
第36図	第 3 次 S B 23建物跡遺物出土状況(1) · · · · · 49
第37図	第 3 次 S B 23建物跡遺物出土状況(2) · · · · · 50
第38図	第 3 次 S B 24建物跡 (1)51
第39図	第 3 次 S B 24建物跡 (2)52
第40図	第 3 次 S B 25建物跡遺物出土状況(1) · · · · · 53
第41図	第 3 次 S B 25建物跡遺物出土状況(2) · · · · · 54
第42図	第3次SB26建物跡遺物出土状況·····55
第43図	第3次SD219溝跡遺物出土状況 ·····56
第44図	第 3 次 S D130 · S D650溝跡遺物出土状況·····57
第45図	第3次SD 486・SD522 (1)溝跡遺物出土状況 …59
第46図	第 3 次 S D 522溝跡遺物出土状況 (2)61
第47図	第 3 次 S D 588溝跡遺物出土状況 ·····63
第48図	第 3 次 S D 597 · 691 · 692 S D 704 · 723溝跡遺物出土状況 · · · 65
第49図	第 3 次 S D1509~1514 · S D1605 · 1606溝跡67
第50図	第 3 次 S X 298遺物出土状況68
第51図	第 3 次 S D 1700溝跡遺物出土状況·····69
第52図	第3次SD1718溝跡遺物出土状況·····71
第53図	第 3 次 S X1289遺物出土状況 (1)73
第54図	第 3 次 S X1289遺物出土状況 (2) · · · · · · · · · 75
第55図	第 2 次出土遺物 (1)80
第56図	第 2 次出土遺物 ( 2 )81
第57図	第 2 次出土遺物 ( 3 )82
第58図	第 2 次出土遺物 ( 4 )
第59図	第 3 次 S B 5 · 9 · 14 · 15 · 16 · 22 · 23 出土遺物…84
第60図	第 3 次 S B 17出土遺物 (1) ······85
第61図	第 3 次 S B 17 ( 2 )・ S B 25・26 出土遺物86
第62図	第 3 次 S D 522出土遺物 (1)87
第63図	第 3 次 S D 522出土遺物 (2)
第64図	第 3 次 S D 522出土遺物 (3)89

第65図	第 3 次 S D 1700出土遺物 (1) ·····90
第66図	第 3 次 S D1700出土遺物 (2)91
第67図	第 3 次 S X 298 · S D 1508出土遺物 ······92
第68図	第 3 次 S X 1289 (1) · S D 1295 (1) 出土遺物 …93
第69図	第 3 次 S X 1289 (2) · S X 1364出土遺物 ······94
第70図	第 3 次 S X 1289出土遺物 (3)95
第71図	第 3 次 S X 1289 (4)・ S D 1295 (2)・ S X 1558出土遺物…96
第72図	第3次その他のSX遺構出土遺物・・・・・・97
第73図	第3次その他のSD・SP遺構出土遺物98
第74図	第3次その他のSK遺構出土遺物・・・・・・99
第75図	第 3 次遺構外出土遺物 (1)100
第76図	第 3 次遺構外出土遺物 (2)101
第77図	第3次遺構外出土遺物 (3)102
第78図	第 3 次遺構外出土遺物 (4)103
第79図	第3次SB1・3・4・6出土木柱他104
第80図	第3次SB7・8・9出土木柱他105
第81図	第 3 次 S B 11 出土木柱他 (1) ······106
第82図	第 3 次 S B 13 出土木柱他(1) ······107
第83図	第 3 次 S B11 (2) · S B13 (2) · S B20 · 21 · 25 出土木柱他…108
第84図	第 3 次 S B 16 · 17 (1) · 18 · 19 (1) 出土木柱他…109
第85図	第 3 次 S B 17出土木柱他 ( 2 ) · · · · · · · · · · · · 110
第86図	第 3 次 S B 19出土木柱他 ( 2 ) · · · · · · · · · · · 111
第87図	第3次SD588(1)出土木柱他·····112
第88図	第3次SD588(2)·SD597出土木柱他·····113
第89図	第 3 次 S D704・723出土木柱他 ······114
第90図	第3次その他のSD・SP遺構出土木柱他115
第91図	第3次その他のSD・SP・SX遺構出土木柱他 …116

# 写真図版

写真図版1	第2次調査全景	写真図版22	第3次調査遺構完掘状況 (3)
写真図版 2	第 2 次調査状況	写真図版23	第3次調査遺構完掘状況 (4)
写真図版3	第2次調査作業状況(1)	写真図版24	第3次調査遺構完掘状況 (5)
写真図版4	第2次調査作業状況 (2)	写真図版25	第3次調査遺構完掘状況 (6)
写真図版5	第 2 次調查検出状況	写真図版26	第3次調査木柱出土状況
写真図版 6	第2次調查遺物出土状況 (1)	写真図版27	第3次調査出土木柱(1)
写真図版7	第2次調查遺物出土状況 (2)	写真図版28	第3次調査出土木柱(2)
写真図版8	第2次調查遺物出土状況(3)	写真図版29	第3次調査出土木柱(3)
写真図版9	第3次調査全景 (1)・遺構完掘状況 (1)	写真図版30	第3次調査出土木柱(4)
写真図版10	第3次調查遺構完掘状況 (2)	写真図版31	第3次調査出土木柱(5)
写真図版11	第3次調查区全景 (2)	写真図版32	第3次調査出土木柱(6)
写真図版12	第3次調查区全景 (3)	写真図版33	第3次調査出土木柱(7)
写真図版13	第3次調査作業状況	写真図版34	第3次調査出土遺物(1)
写真図版14	第3次調查遺構検出状況(1)	写真図版35	第3次調査出土遺物 (2)
写真図版15	第3次調查遺構検出状況 (2)	写真図版36	第3次調査出土遺物(3)
写真図版16	第3次調查遺構検出状況(3)	写真図版37	第3次調査出土遺物(4)
写真図版17	第3次調查遺物出土状況(1)	写真図版38	第3次調査出土遺物 (5)
写真図版18	第3次調查遺物出土状況(2)	写真図版39	第3次調査出土遺物 (6)
写真図版19	第3次調查遺物出土状況(3)	写真図版40	第3次調査出土遺物 (7)
写真図版20	第3次調查遺物出土状況(4)	写真図版41	第3次調査出土遺物(8)
写真図版21	第3次調查遺物出土状況 (5)	写真図版42	第3次調査木簡出土状況

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山~東根間)の建設工事事業に伴って実施されたものである。

本遺跡は、平成9年11月に、同事業に係って県教育委員会により、路線区内の試掘調査が 行われた。試掘調査では、土坑、柱穴などの遺構が確認され、平安時代のものと考えられる須 恵器・土師器が検出された。

その結果をうけて平成10年4~5月に、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受け、建設事業計画と緊急発掘調査計画などの調整を図るための予備調査(第1次調査)を実施した。試掘調査では、土坑、溝跡、河川跡、柱穴などの遺構が確認され、縄文時代・平安時代のものと考えられる須恵器・土師器が検出された。その結果、調査区にかかる範囲は東西40 m、南北200 mの分布範囲を呈し、面積は8,000 ㎡となることが確認された。

予備調査の結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、建設工事事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。平成12年度に山形市教育委員会が、第3次調査の東側隣接地区において調査を実施している。

## 2 調査の方法と経過

発掘調査は、平成11年度(第2次調査)、平成12年度(第3次調査)の2ヵ年にわたって行われることになった。第2次調査では遺跡内の高速道路予定地の側道部分と本道部分の4,850㎡、第3次調査では本道部分の4,500㎡が調査対象となり実施された。

調査区を覆う座標は、調査区の中央を東西に走る東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設予定 道路内の中央を南北に走るセンター用測量杭をY軸の基準とし、それと直交する線をX軸とし た。これを起点として5 m四方の方眼(グリッド)を設定した。Y軸は北から南に $1 \sim 70$  まで、 X軸は西から東に $A \sim Z$ まで付番して「11-A」のように表記した。

方眼のX軸は、N-38°50′-Eを測る。

以下、石田遺跡第2・3次調査における現地調査工程の概略を記す。

第2次調査は、調査区をA区~D区に分け平成11年5月11日から開始され、8月6日に現 地調査が終了した。A区・B区・C区からは、奈良・平安時代の遺構が検出された。D区から も奈良・平安時代の遺構が検出され、さらにその下には縄文時代の遺構が検出された。

第3次調査は、平成12年4月18日から開始され、8月25日に現地調査を終了した。当初第2次調査の結果から、縄文時代の遺構面の存在が想定されたが、数箇所で深掘を実施したが、縄文時代の遺構面を検出することはできなかった。

いずれの調査でも面整理を繰り返しながら遺構検出・マーキング・遺構登録・遺構精査を行った。遺構の精査に合わせ、遺構平面図・断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土 層注記等記録作業、遺物取り上げ等を行った。

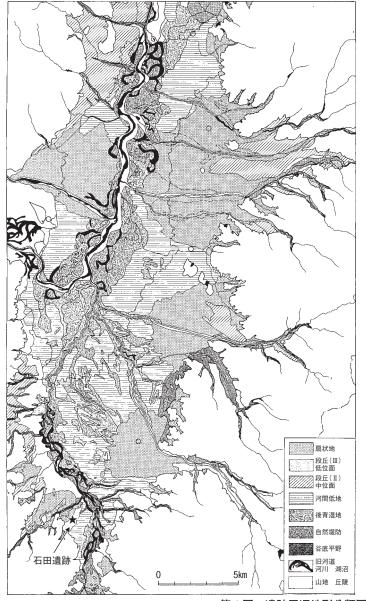
### 遺跡の立地と環境 П

石田遺跡は、山形市街の南西方約4km、山形盆地の南、山形市大字谷柏字石田に所在する。 本沢川左岸の扇状地と自然堤防上の微高地に立地し、縄文時代中期から後期、弥生時代、中世 まで営まれた複合遺跡である。遺跡の範囲は全体として、東西約140 m、南北約150 mに広が り、面積が約12,500 ㎡と推定される。標高はおよそ127 mを測る。地目は水田となっている。

遺跡からは、東に雄大な蔵王山や龍山、北に葉山の穏やかな稜線が見え、山形市の中心街を 見下ろすことができる。本地区を流れる本沢川は、白鷹丘陵から谷間を流下し長谷堂城の東南 麓を通り平野部に扇状地を形成している。その段丘上や旧水路の氾濫によって形成された自然

堤防上の微高地には、多 くの遺跡が集中して分 布している (第1図)。

本遺跡近くの前田遺 跡は縄文時代後期の集 落跡、沢田遺跡からは 弥生時代の土器と石庖 丁が出土した。谷柏遺跡 からは、古墳時代後期の 土師器が出土した。石田 遺跡の南西に、谷柏古墳 群が存在する。丘陵鞍部 にかけて25基の墳丘が 確認されており、終末期 の古墳群として県指定 を受けている。中には同 一墳丘から3基の石棺 が並んで出土した例も あり、副葬品として鉄剣 が出土したものもある。 古代この地域は最上郡 福有郷の一部であった と考えられ、北方の「志 戸田縄遺跡」から福有南 (?) と墨書された須恵 器坏が出土している。



第1図 遺跡周辺地形分類図

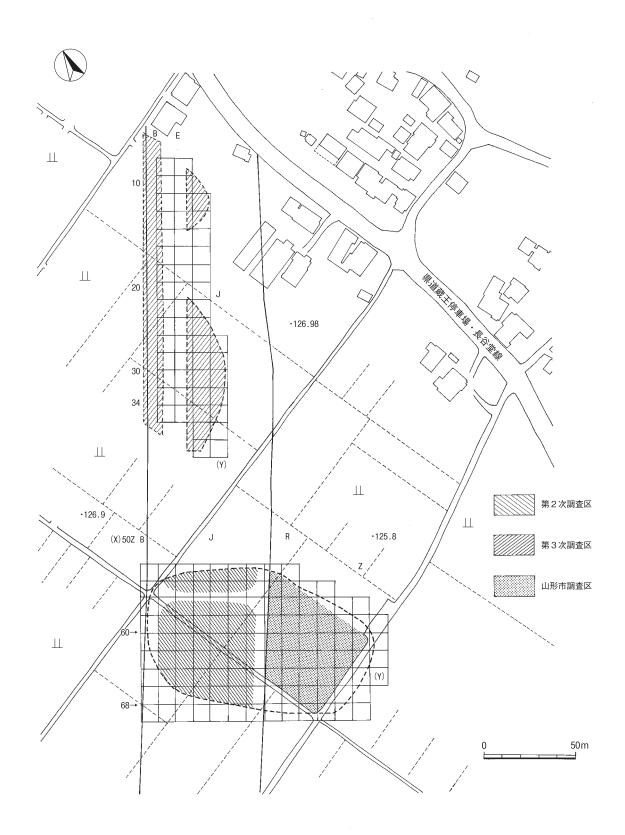


- 1. 石田遺跡(古代~中世)
- 2. 前田遺跡(縄文)
- 3. 沢田遺跡(弥生~平安)
- 4. 谷柏遺跡(古墳~平安)
- 5. 谷柏 J 遺跡(縄文)
- 6. 石田前 Y 遺跡(弥生)
- 7. 石田前遺跡(古墳)
- 8. 毘沙門遺跡(古墳)
- 9. 花川遺跡(弥生)
- 10. 萩原遺跡(古墳~中世)
- 11. 高崎遺跡(奈良·平安)
- 12. 谷柏古墳群(古墳時代終末期)
- 13. 谷柏丁遺跡(古墳~近世)
- 14. 本沢川遺跡(縄文)
- 15. 二位田遺跡(縄文~平安)
- 16. 寺裏遺跡(古墳~平安)
- 17. 川落遺跡(古墳)

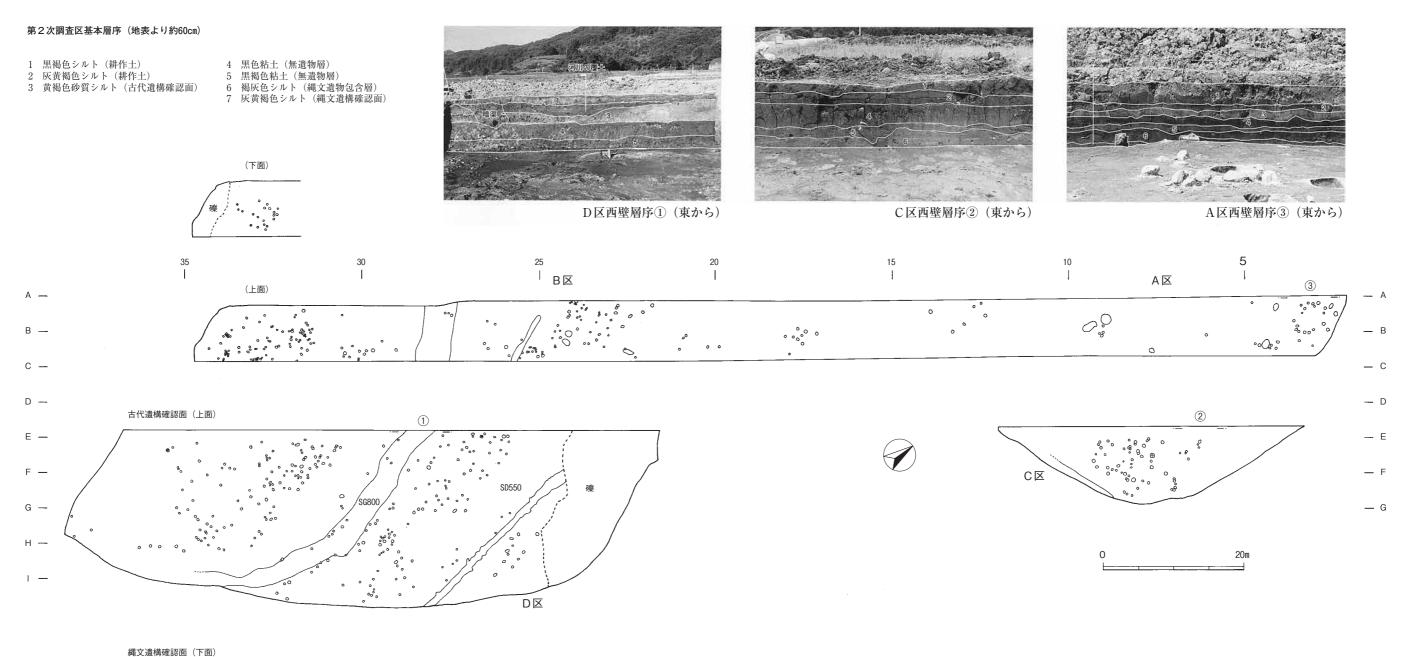
- 18. 百目鬼遺跡(奈良·平安)
- 19. 前明石遺跡(古墳)
- 20. 落合遺跡(古墳~平安)
- 21. 鏡ヶ渕遺跡(奈良・平安)
- 22. 吉原館ノ内遺跡(鎌倉)
- 23. 吉原 I 遺跡(奈良·平安)
- 24. 吉原Ⅲ遺跡(奈良・平安)
- 25. 吉原VI遺跡(平安)
- 26. 吉原Ⅱ遺跡(奈良・平安)
- 27. 片谷地遺跡(奈良·平安)
- 28. 横手区遺跡(縄文、古墳~鎌倉)
- 29. 六壇遺跡(鎌倉)
- 30. 松原遺跡(奈良・平安)
- 31. オサヤズ窯跡(奈良・平安)
- 32. 秋葉山経塚(平安)
- 33. 八ヶ森遺跡(旧石器)
- 34. 天神山遺跡(古墳)

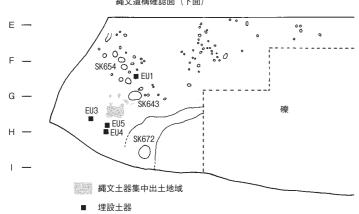
- 35. 長谷堂遺跡(室町)
- 36. 谷地前遺跡(縄文)
- 37. 百々山遺跡(縄文~平安)
- 38. 風穴遺跡(縄文~近世)
- 39. 筏山遺跡(縄文~弥生)
- 40. 漆坊遺跡(奈良·平安)
- 41. 滝乃山寺院跡(奈良·平安)
- 42. 柏倉館山館跡(戦国)
- 43. 菅沢山本陣跡(近世)
- 44. 菅沢古墳群(古墳)
- 45. 館遺跡(縄文)
- 46. 宿遺跡(縄文)
- 47. 塩辛田 A·B遺跡(奈良·平安)
- 48. 曲森山楯跡(戦国)
- 49. 樋渡遺跡(奈良・平安)
- 50. 成沢城跡(室町)
- 51. 泉出城跡(室町)
- 52.53. 山形城三ノ丸跡(近世)

第2図 遺跡位置 (S=1:50.000)



第3図 調査区概要図





第4図 第2次調査遺構配置図



第5図 遺構配置全体図

# Ⅲ 調査の概要

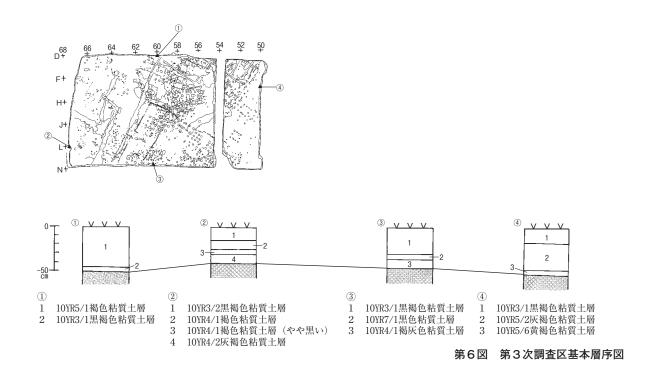
## 1 調査区と層序

石田遺跡は、本沢川の形成した扇状地と、その辺縁をなす自然堤防上に位置している (巻頭カラー写真)。ここに 2 次にわたって調査が行われている (第3図)。 2 次調査では側道部分と本道部分、 3 次調査では本線部分が調査された。

2次調査の基本層序を見てみれば、遺跡の地山を成すのは礫層であった。その上位に、河川 2 次 調 査によって運ばれたと考えられる、礫層や砂層そして黒色土などの堆積があり、これが遺物包含層となり、遺構の基底面を形成していた。遺構面は2面検出され、上層は奈良・平安時代の遺構・遺物、下層はこれよりも60cmほど下位で、縄文時代の中期終末から後期初頭の遺構・遺物が出土した。縄文時代に属する遺物はすべてこの層から出土している(第4図)。

3次調査の調査区は、2次調査の調査区よりも100 mほど南側に位置するためか、堆積層の 3 次 調 査 様相はやや異なっている。遺跡の地山を成すのは砂を多く含む礫層であった。その上位に、河 川によって堆積されたと考えられる、粘土層の堆積があり、場所によってはこれが幾つかに別 れていた。これが遺構面となり、遺構の基底面を形成していた。さらに、部分的には包含層を 形成していた。

 $1\sim 4$  として、3次調査区の基本層序を採集した(第 6 図)。 基本層序の採用にあたって、地層の堆積が明確であった場所を特に選んだ。 $1\sim 4$  の土層断面図によれば、調査面までは、 $50\sim 60$ cm ほどの堆積が見受けられる。



9

## 遺構と遺物の分布 (第3・4・5・7図)

石田遺跡の2次調査と3次調査とで、検出された遺構の種類は、掘立柱建物跡・埋設土器・ 土坑・柱穴・性格不明遺構坑・その他の遺構・溝跡・河川跡などである。時期的には、縄文時 代から弥生時代、奈良・平安時代、中世、一部近世に及ぶ。このうち、弥生時代と中世・近世 の遺構は明確ではなく、遺物も少ない。

次に簡単に各調査年次の内容について述べる。

第1次調査の内容については、すでに報告済みである。

第2次調査で検出された遺構は柱穴をはじめ、縄文時代前期の埋設土器、奈良・平安時代の 溝跡1基、このほかに柱穴多数が確認された(第4図)。

第3次調査で検出された遺構は、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 26 棟、溝跡 92 条、土坑、 117 基、性格不明遺構数基が確認された。遺物は検出されているものの、遺構としては弥生時 代に属する遺構は不明であった。同じく中世に属する遺構も不明であった。弥生時代と中世に 属する遺物は少量出土している (第5図)。

縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は発掘区の北側、第2次調査区に集中している。この時期縄文時代の遺構群 は、第2次調査区の南側に設定された第3次調査区にも存在することが予想された。このため 第3次調査区では、いくつかの地点で深掘を実施したが、下層の縄文時代遺構を検出すること はできなかった。

縄文時代の遺構は、60cm ほどの深さをもって、奈良・平安時代の遺構の下部に遺存していた。 ここからは、埋設土器が検出された。周囲からは縄文時代中期終末から後期初頭の遺物が検出 され、この時期に人々が居住していることがわかった。ただしこれは、第2次調査区でのみ見 られる現象であり、第3次調査区にまでこの包含層は広がっていなかった。部分的に地形の高 まりを利用して居住していたものと考えられる。

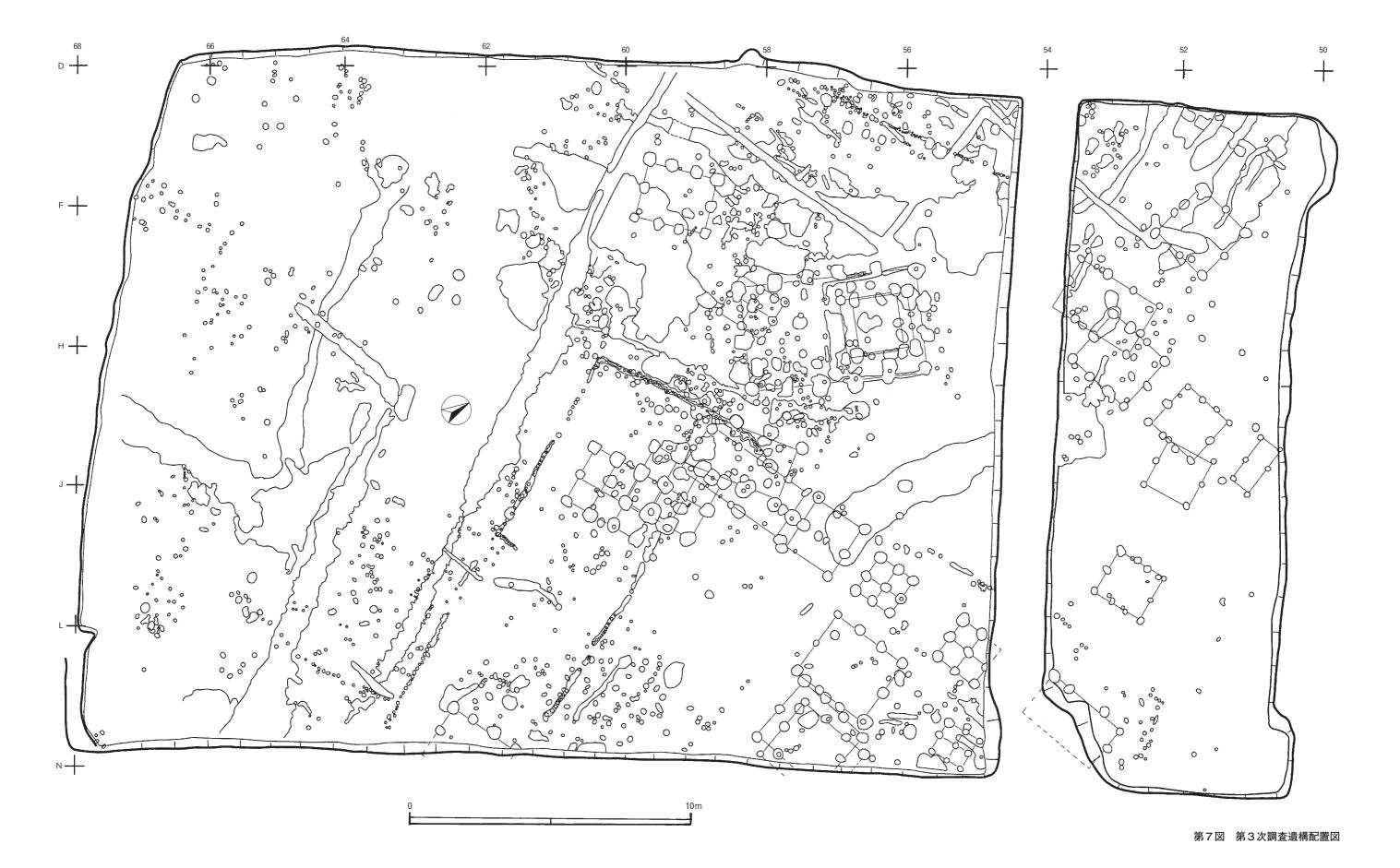
弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、弥生時代後期後半の天王山式に併行する土器が数点出土している。 この時期の遺物は、整理作業の過程において見いだされたものであり、調査中に遺構に伴って 見いだされたものではなかった。

奈良・平安時

検出された遺構・遺物としてもっとも多いのは、奈良・平安時代の遺構・遺物である。2次 代の遺構・遺物 調査区と3次調査区の全体から出土し、量ももっとも多い。注目すべきは、第3次調査区で検 出された、掘立柱建物跡群とそれを囲繞するように検出された柵列である(第5図)。これは、 ほぼ軸を同じくして営まれる、倉庫群としての建物跡と、木柵をもつ柵列とからなる。柵列は、 詳細については後述するが、ほぼ等間隔に木柱が立ち並び、一部には木柱の遺存も見ることが できた。掘立柱建物跡は整然と柵列内部に立ち並んでいる状況を見ることができた。また注目 すべきことに、倉庫群として営まれたであろう建物跡には、柱材が遺存していた。柱材の遺存 は多数の建物に及び、奈良・平安時代における建築材料の素材の利用の仕方を知ることができ る好資料となった。

中世の遺物 中世の遺物は、14世紀代の遺物が多いが、この時期の遺物は、整理作業の過程において見 いだされたものであり、調査中に遺構に伴って見いだされたものではなかった。



# IV 検出された遺構

石田遺跡から検出された遺構について、次に述べることとする。石田遺跡からは、縄文時代 中期後半から後期初頭、奈良・平安時代の各時期の遺構が検出された。各遺構について次に述 べる。

## 1 縄文時代の遺構(第4図、図版5~8)

2次調査区の南区に位置する、 $E \sim I - 25 \sim 38$  グリッドの下層で検出された。遺構としては、埋設土器遺構である。埋設土器は5 個体検出された(図版10)。このうちの4 個体、E U  $1 \cdot 3 \sim 5$  が明瞭である(第4 図)。こうした遺構は、山形市熊ノ前遺跡でも検出され、縄文時代 縄文時代の墓壙の墓壙として考えらえている。また、近接して円型の縄文土器の集中地点も検出されたが、破片が多く廃棄場所であろうと考えられる。いずれも、縄文時代の中期末から後期初頭の時期であろうと考えられる。

## 2 奈良・平安時代の遺構 (第8~54図、図版9・10・14~16)

奈良・平安時代の遺構については、大量に柱材が残されていたため、柱材の樹種について分析を行うことができた。その結果は付編として巻末に掲載した。

172点の樹種を分析することができ、その中には、広葉樹 6 種類、針葉樹 2 種類、合計 8 種類の樹種を同定することができた。得られた樹種は「クリ」「コナラ節」「クヌギ節」「ハルニレ」「ハンノキ」「トネリコ」「スギ」「マツ」である。それぞれの個体数は、「クリ」 49 点、「コナラ節」 110点、「クヌギ節」 1点、「ハルニレ」 2点、「ハンノキ」 1点、「トネリコ」 1点、「スギ」 3点、「マツ」 4点となっている。

利用されているのはコナラ節が最大であった。また、クリは耐水性に優れており丈夫である ため、建築部材として石田遺跡では多用されている。柱材、礎板、木柵と全てに使用されていた。

### ・掘立柱建物跡

第3次SB1建物跡(第8図) 調査区の北側に位置する、 $J \sim K - 52 \sim 53$  グリッドで検出 SB1建物跡 された。平面形は長方形を呈する、3 間×2間の掘立柱建物跡である。1 間の間尺は約1.3 m、約1.8 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約3.8 m、短軸は約3.5 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約25cm であり浅い。出土遺物としては柱材が出土している。おそらく建て替えが行われたものであろうと思われる。

明である。柱の痕跡を残している柱穴がある。

- SB3建物跡 第3次SB3建物跡(第10図) 調査区の北側に位置する、I —50~51グリッドで検出された。 全体プランの平面形は長方形を呈する、2間×1間の掘立柱建物跡である。 1間の間尺は約1.5 m、約2.0 m、約2.5 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約3.8 m、 短軸は約1.5 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約20cmのものと約50cmのものがある。 出土遺物としては、柱材が出土している。
- SB4建物跡 第3次SB4建物跡 (第11図) 調査区の北側に位置する、 $H \sim I 51 \sim 52$  グリッドで検出された。平面形は長方形を呈する4間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は約1.8 m、約1.5 m、約1.2 mである。全体プランの長軸は約4.2 m、短軸は約4.0 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約20cmであり浅い。出土遺物としては、柱材が出土している。
- S B 5 建物跡 第 3 次 S B 5 建物跡 (第 12 図) 調査区の南区に位置する、G ~ H 52 ~ 53 グリッドで検出された。平面形は長方形を呈する 3 間×2 間の掘立柱建物跡である。 1 間の間尺は約 2.1 m、約 1.8 mである。全体プランの長軸は約 5.1 m、短軸は約 4.1 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約 40cm であり深い。出土遺物としては、土師器底部が出土している。
- SB6建物跡 第3次SB6建物跡 (第13図) 調査区の北側に位置する、G~H—52~53グリッドで検出された。平面形は長方形を呈する、3間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は約2.2 m、約2.5 m、約1.8 m、約2.0 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約6.8 m、短軸は約4.5 m、検出面からの柱の掘り込みは深いもので約40cmである。出土遺物としては、柱材が出土している。
- SB7建物跡 第3次SB7建物跡 (第14図) 調査区の北側に位置する、E~F—51~52グリッドで検出された。全体プランの平面形は正方形を呈する、2間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は約2.4 m、約3.0 m、約1.5 m、約2.3 mがあり、それぞれが組み合わされている。全体プランの軸は約4.5 mである。検出面からの柱の掘り込みの深さは約60cmであり深い。出土遺物としては、柱材が出土している。
- S B 8 建物跡 第 3 次 S B 8 建物跡 (第 15 図) 調査区の南区に位置する、L ~ M 52 ~ 53 グリッドで検出された。平面形は長方形を呈するものと考えられるが、水路にかかるため不明である。全体プランの平面形は恐らく長方形を呈する、3 間×2 間の掘立柱建物跡であると考えられる。1 間の間尺は約 1.8 m、約 3.0 m、であり、それぞれが組み合わされている。検出面からの柱の掘り込みの深さは約 30cm であり、浅い。出土遺物としては、柱材が出土している。
- \$ B 9 建物跡 第 3次 \$ B 9 建物跡 (第 16・17 図) 調査区の西側に位置する、E~F—58~59 グリッドで検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、3 間×2 間の掘立柱建物跡である。1 間の間尺は約 2.8 m、約 1.8 m、約 1.5 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約 5.4 m、短軸は約 4.2 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約 30cm で浅い。出土遺物としては、須恵器甕、坏がある。 礎板と考えられる板が、柱穴の底面に残されていた(第 17 図)
- SB10建物跡 第3次SB10建物跡 (第18図) 調査区の東側に位置する、M-54~55グリッドで検出された。平面形は正方形を呈する、2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。1間の間尺は約1.1m、であり、非常に小さい建物である。全体プランの長軸は約2.5m、検出面からの柱の掘り

込みの深さは約30cmで浅い。出土遺物はない。

第3次SB11建物跡(第19図・20図) 調査区の東側に位置する、K~L — 54~55 グリッ SB11建物跡 ドで検出された。正方形を呈する、2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。1間の間尺は1.8 m、全体は約3.5 m四方、検出面からの柱の掘り込みの深さは約60cmであり深い。出土遺物 としては、柱材が出土している。各辺の頂点には庇を支えるような位置に柱穴が存在する。

第3次SB 12 建物跡(第 21 図) 調査区の東側に位置する、 $J \sim K - 55 \sim 56$  グリッドで検 SB 12 建物跡 出された。全体プランの平面形は正方形を呈する、2 間×2 間の総柱の掘立柱建物跡である。 1 間の間尺は 1.5 mであり、SB 10 同様小ぶりな建物である。全体プランの軸は約 5.0 m。検 出面からの柱の掘り込みの深さは約 50cm であり深い。出土遺物はない。

第3次SB 13 建物跡 (第 22・23 図) 調査区の東側に位置する、K~M—56~57 グリッド SB 13 建物跡 で検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、3 間×2 間の掘立柱建物跡である。 1 間の間尺は約 2.0 m、約 2.3 m、である。全体プランの長軸は約 6.0 m、短軸は約 5.0 m、検出 面からの柱の掘り込みの深さは約 30~ 40cm であり深い。出土遺物としては、柱材が出土している。

第3次SB14建物跡 (第24図) 調査区の東側に位置する、L~M — 56~58 グリッドで検 SB14建物跡 出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、3 間×2 間の掘立柱建物跡である。1 間の 間尺は約2.1 m、約1.8 m、約2.6 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約6.0 m、短軸は約5.2 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約25~約55cmであり深い。 出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。一部を水路によって切られている。SB15と建て替えの関係が窺える。

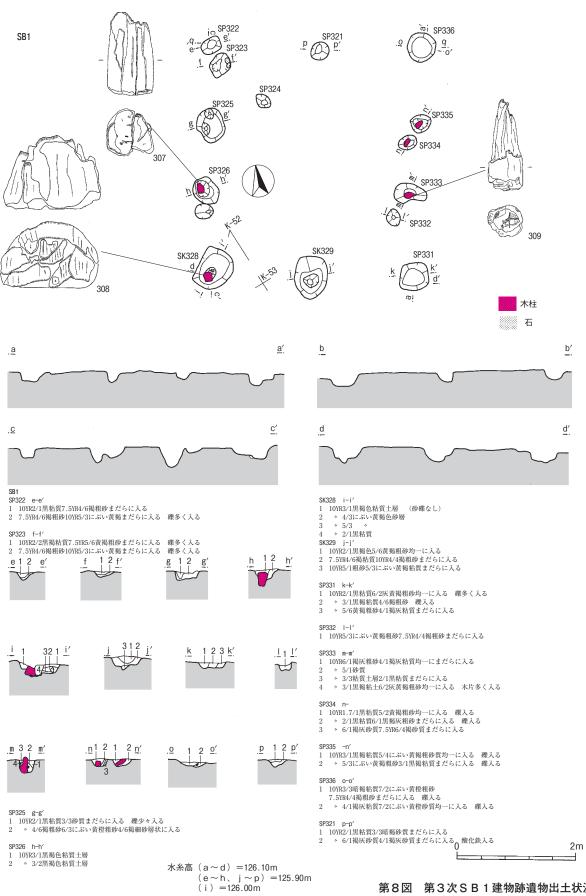
第3次SB 15 建物跡 (第 25 図) 調査区の東側に位置する、L~M — 56~58 グリッドで検 SB 15 建物跡 出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、3 間×2 間の掘立柱建物跡である。1 間の 間尺は約 2.1 m、約 1.8 m、約 2.6 mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約 5.7 m、短軸は約 5.2 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約 25~30cm でありやや 浅い。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。一部を水路によって切られている。SB 14 と建て替えの関係が窺えるが、規模はやや異なっている。

第3次SB 16 建物跡(第 26 図) 調査区の西側に位置する、 $F\sim G-57\sim 58$  グリッドで検 SB 16 建物跡 出された。全体プランの平面形はほぼ正方形を呈する、2 間×2 間の総柱の掘立柱建物跡である。1 間の間尺は約 1.8 m、約 1.5 mである。全体プランの長軸は約 3.5 m、短軸は約 3.7 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約  $20\sim 40$  cm でありやや深い。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。

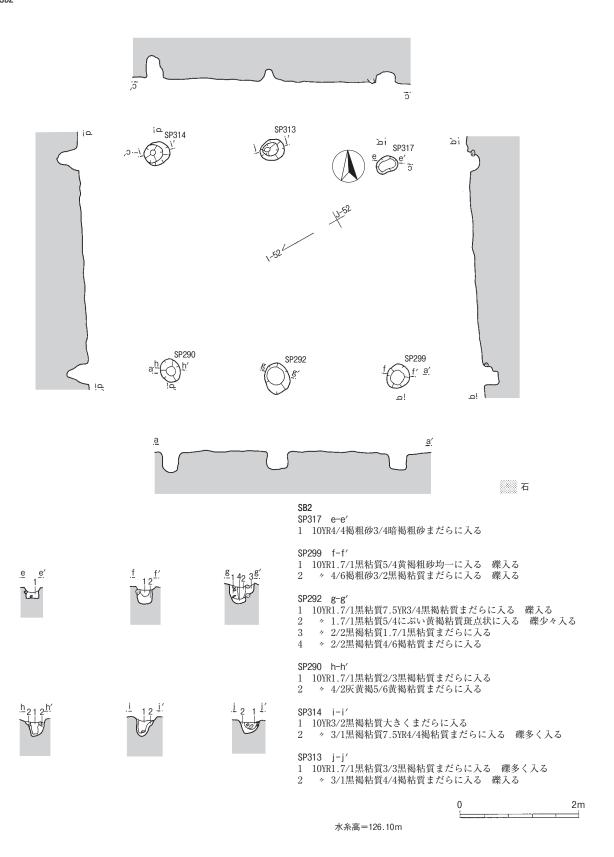
第3次SB17建物跡(第27~29図) 調査区の中央に位置する、F~H — 55~58グリッ SB17建物跡 ドで検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、やや不明確ながらも、5間×3間の 掘立柱建物跡である。1間の間尺は約2.5 m、約2.0 mであり、それぞれが組み合わされている。 西側の中央部がやや狭い。全体プランの長軸は約13.3 m、短軸は約7.3 m、検出面からの柱の 掘り込みの深さは約40~70cmであり深い。出土遺物としては、柱穴の掘り方底面から礎板、掘り方に伴って、須恵器甕・坏・蓋、土師器甕などが出土している。礎板(第29図)は、くびれが存在し加工材であることがわかる。何らかの建物の部材を転用している可能性がある。

この建物は、他の建物が軸を南北に揃えるのと異なって、西に約37°ほど振れている。また、SB18・19掘立柱建物跡と建て替えの関係を見せている。この建物は、石田遺跡で確認された建物のうち最大の規模を持つ建物である。

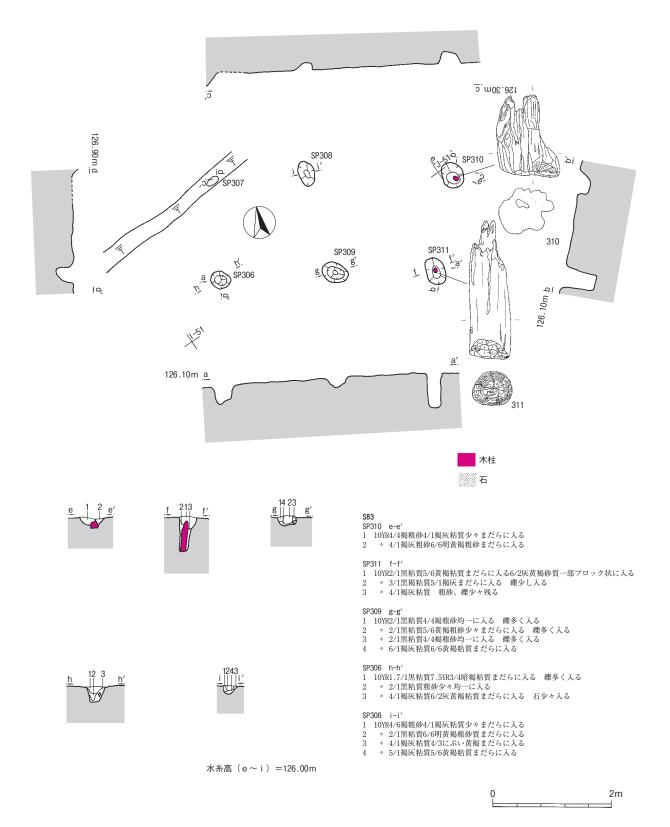
- SB18 建物跡 第3次SB18 建物跡 (第30 図) 調査区のほぼ中央部に位置する、 $F \sim H 55 \sim 57$  グリッドで検出された。平面形は正方形を呈する、1 間×1 間の掘立柱建物跡である。1 間の間尺は約4.2 mである。検出面からの柱の掘り込みの深さは約50~60cm であり深い。周囲には幅30cm、深さ10cm ほどの溝がコの字状に巡っている。一部木材は検出されたが、主要な柱材は抜き取られていて存在しなかった。SB19 掘立柱建物跡と建て替えの関係にある。SB19 に柱材が遺存することを重視すれば、 $SB18 \rightarrow SB19$  の建て替え順序であろうと考えられる。
- S B 19 建物跡 第 3 次 S B 19 建物跡 (第 31・32 図) 調査区のほぼ中央部に位置する、F~H 55 ~ 57 グ リッドで検出された。平面形は正方形を呈する、1 間×1 間の掘立柱建物跡である。1 間の間 尺は約 4.2 mである。検出面からの柱の掘り込みの深さは約 50 ~ 60 cm であり深い。規模は S B 18 とほぼ同様である。周囲には巾 30 cm、深さ 10 cm ほどの溝がコの字状に巡っているも のと考えられるが、南側で痕跡的に検出されたのみである。柱材は直径 30 cm になろうかという巨大なものである。S B 18 掘立柱建物跡と建て替えの関係にある。
- SB20 建物跡 第3次SB20 建物跡 (第33 図) 調査区の中央部に位置する、 $I \sim J 57 \sim 58$  グリッドで検出された。平面形は正方形を呈する、2 間×2 間の総柱の掘立柱建物跡であると考えており 1 間の間尺は約 2.0 mである。全体プランは正方形約 4.0 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約  $30 \sim 50$  cm であり深い。出土遺物としては、柱材がある。同様の遺構としてSB 22 掘立柱建物跡がある。複数回の建て替えがあるものと考えられるが十分明らかにすることはできなかった。
- SB21 建物跡 第3次SB21 建物跡 (第34図) 調査区の中央部に位置する、I~K-56~57 グリッドで 検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、2間×2間の掘立柱建物跡であろうと考 えられる。1間の間尺は約2.0 m、約2.5 mである。全体プランの長軸は約4.5 m、短軸は約4.0 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約30~約50cmであり深い。出土遺物としては、柱 材が出土している。おそらく建て替えが行われたものであろうと思われる。
- SB22建物跡 第3次SB22建物跡 (第35図) 調査区の中央部に位置する、 $I \sim J 58 \sim 59$  グリッドで検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、一部柱穴が確認できなかったが、2間×2間の掘立柱建物跡であろうと考えられる。1間の間尺は約2.0 m、約2.5 mである。全体プランの長軸は約4.5 m、短軸は約4.0 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約30~約50cmであり深い。出土遺物としては、柱材・須恵器坏が出土している。おそらく建て替えが行われたものであろうと思われる。
- SB23建物跡 第3次SB23建物跡 (第36・37図) 調査区の中央部に位置する、L~M—56~58グリッドで検出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、3間×2間の掘立柱建物跡である。 1間の間尺は約2.0 m、約1.5 mである。全体プランの長軸は約5.5 m、短軸は約4.0 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約60cmであり深い。出土遺物としては須恵器坏がある。
- SB24 建物跡 第3次SB24 建物跡 (第38・39 図) 調査区の中央部に位置する、I~J—58~59 グリッドで検出された。平面形は長方形を呈する、4間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は



第8図 第3次SB1建物跡遺物出土状況

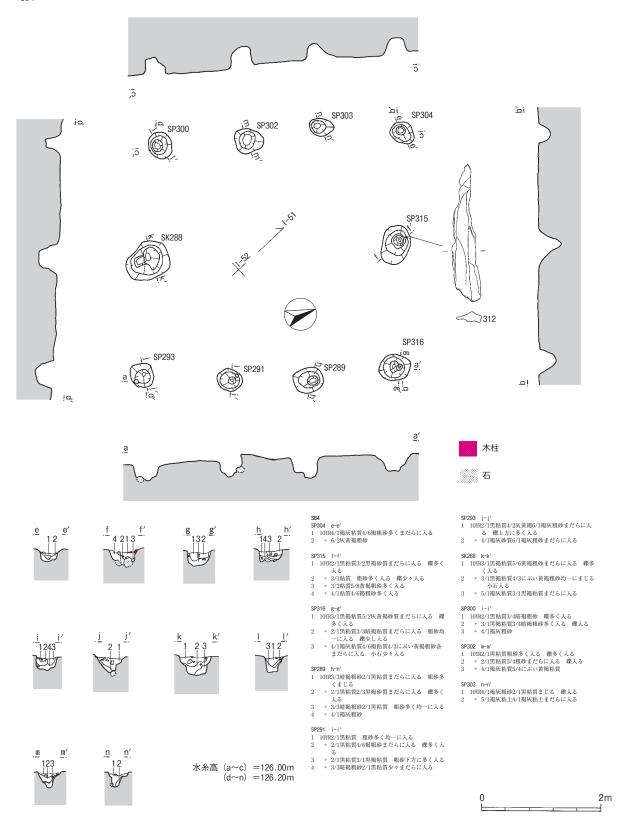


第9図 第3次SB2建物跡

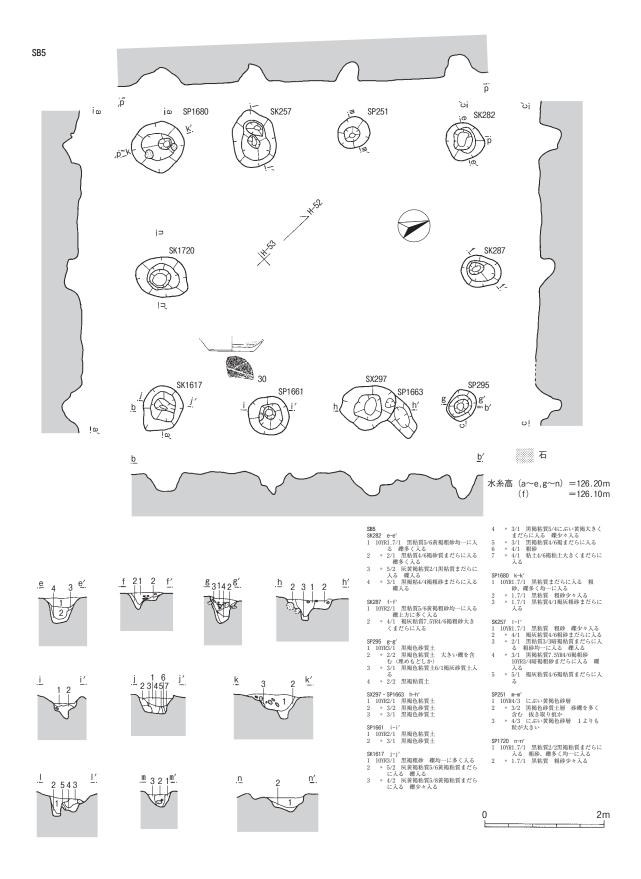


第10図 第3次SB3建物跡遺物出土状況

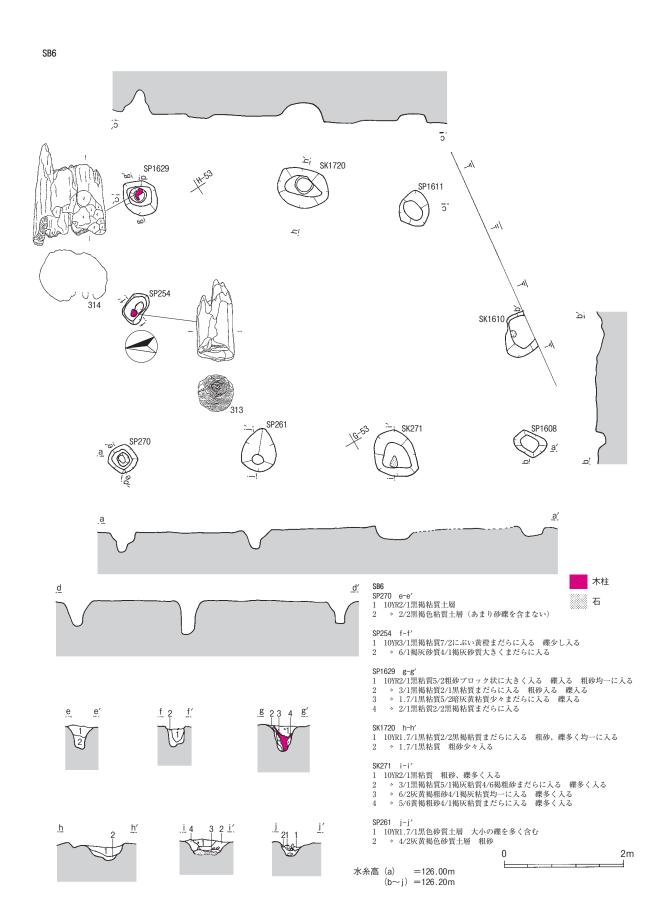
SB4



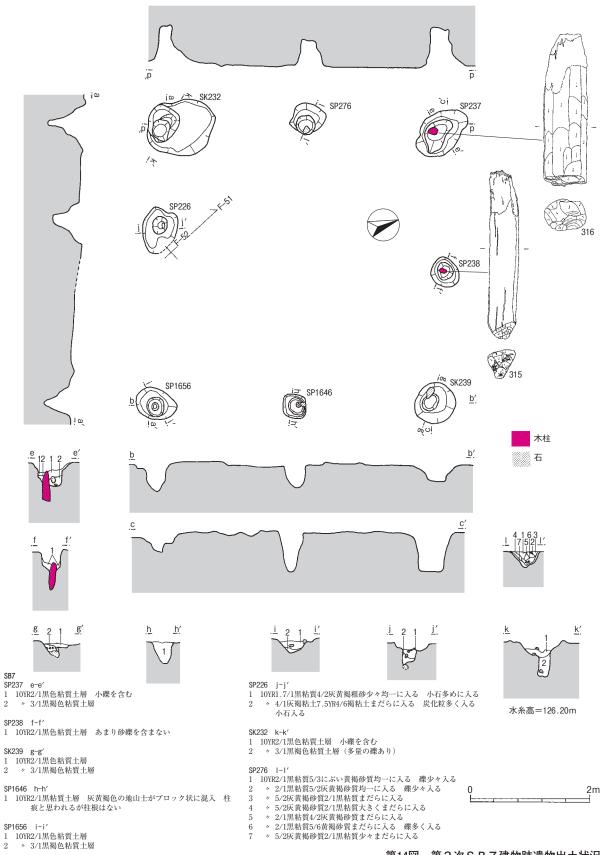
第11図 第3次SB4建物跡遺物出土状況



第12図 第3次SB5建物跡遺物出土状況

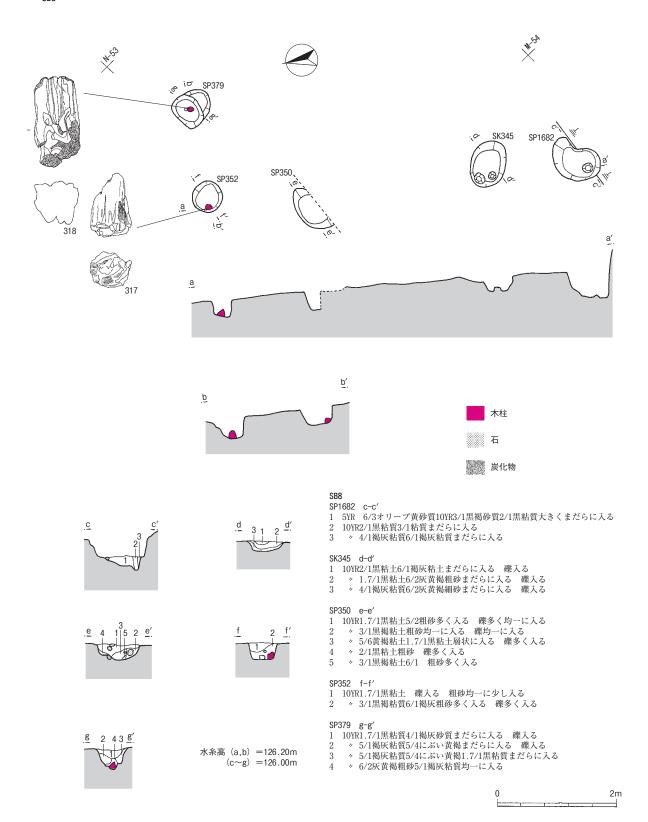


第13図 第3次SB6建物跡遺跡出土状況



第14図 第3次SB7建物跡遺物出土状況

SB8



第15図 第3次SB8建物跡遺物出土状況

約 2.0 m、約 2.2 mである。全体プランの長軸は約 6.0 m、短軸は約 4.4 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約 40 ~約 60 cm であり深い。出土遺物はない。おそらく S B 23 掘立柱建物跡と建て替えが行われたと思われる。

第3次SB 25 建物跡(第 40・41 図) 調査区の中央部に位置する、 $H \sim J - 57 \sim 59$  グリッ SB 25 建物跡 ドで検出された。平面形は長方形を呈する、4 間×2 間の掘立柱建物跡であろうと思われる。 1 間の間尺は約 2.1 m、約 2.5 mであり、一部には 3 mほどのものもある。本来は 2 間×2 間の建物である可能性がある。全体プランの長軸は約 5.2 m、短軸は約 4.5 m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約 20  $\sim$ 約 50cm であり深い。出土遺物は柱材、須恵器蓋・坏、土師器甕が出土している。

第3次SB 26 建物跡 (第 42 図) 調査区の東側に位置する、L~M — 61 ~ 62 グリッドで検 SB 26 建物跡 出された。全体プランの平面形は長方形を呈する、4 間×2 間の掘立柱建物跡である。一部を 水路によって調査できなかった。1 間の間尺は約 2.0 m、約 1.5 m、約 2.4 mであり、3 間×2 間の建物である可能性がある。全体プランの長軸は約 5.2 m、短軸は約 4.5 m、検出面から の柱の掘り込みの深さは約 40cm であり深い。出土遺物は須恵器坏が出土している。

#### ・柵列 (第5図)

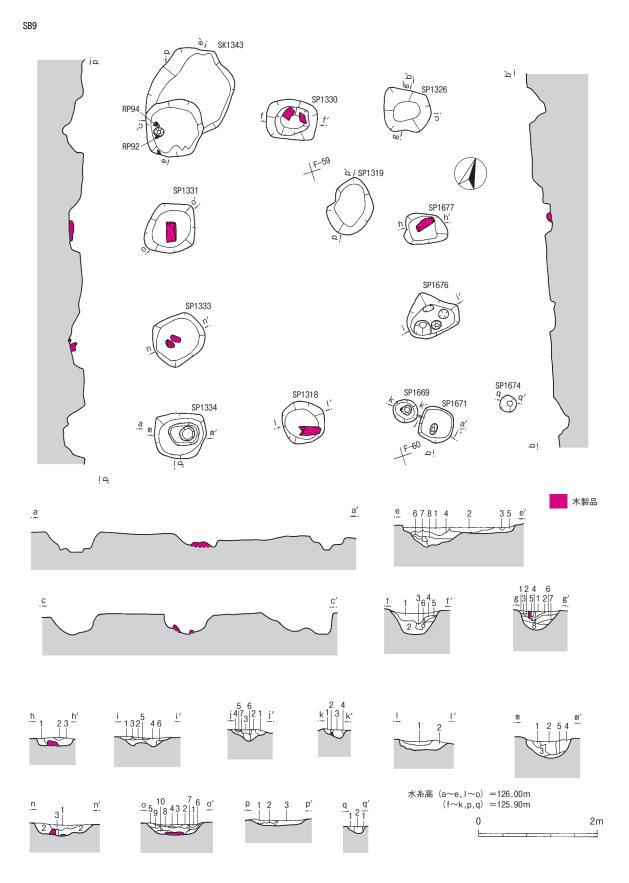
総合的に考えて、本遺跡では最低3カ所の囲繞施設の存在が確認されることになる。規模がある程度確認されるのは、一つの囲み施設だけであるが、囲繞施設の遺構の共通性からすれば、3つとも同形同大であると考えておきたい。なお、SA1・2を中心とする囲繞施設は、SA5を中心とする囲繞施設とほぼ軸を同じにするため、同時期の可能性が高い。SA6を中心とする囲繞施設はこれよりも前後するものと考えられる。SA6を中心とする施設が新しいと捕らえておきたい。

SA1・2・3柵列SA1は南辺の一部と西辺の一部であるSD 588、南辺の一部であるSSA1・2・3D 597、北辺の一部であるSD 1509~1514 からなる。柵列

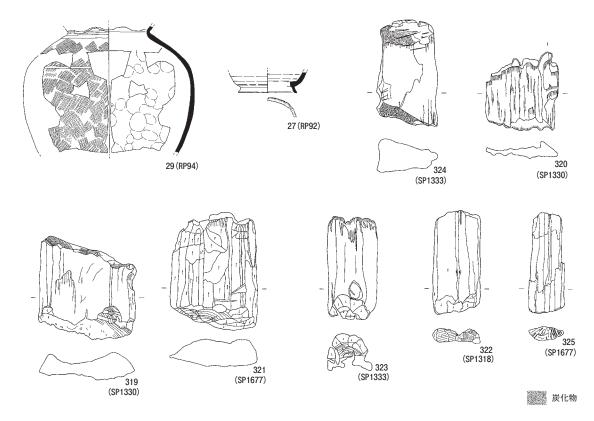
南辺の中央部付近である、J-61 グリッドには、この柵列が一部断続する部分が見られ、これは、出入り口であろうと考えられる。出入り口の西側には短く柵列が折れ、内側に柵列が展開している。SA2 は出入り口を隔てて西側に展開している柵列である、SA1 の出入り口の左右には、SB24 と SB26 が並立している。さらに奥には、SA3 あるいは、SA4 といった塀が存在し、目隠し塀として機能しているとも見るとこができる。SB24 には建て替えの関係が窺えるため、すくなくともこの構成には 2 時期あることが分かる。SB24 に伴う塀が SA3、さらに SB23 に伴うのが SA4 と見ておきたい。なお、SB23 に並立する関係にあたる、掘立柱建物跡が東側に検出されるかと予想されたが、検出することはできなかった。

囲繞施設の規模は、西側部分を参考とすれば、ほぼ 50 mの方形を呈する施設であろうと考えておきたい。なお、西側の辺は SD 588 の部分では明確であるが、それより北側では断続的にしか検出されていない。わずかに SD  $1509 \sim 1514$  において柵列の痕跡を確認できるのみである。さらには水路部分で破壊されているためこの部分の連続性を窺うこともできない。

北から東へ折れるコーナーとしては、L-52 グリッド付近を想定した。これは、ここから東側へと向かうピット群を検出したためであるが、この中には柱材などの遺存はなかった。従っ



第16図 第3次SB9建物跡遺物出土状況(1)



#### SK1343 e-e

- 10VR1 .7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質ブロック状に入る 粗砂均一に入る 炭化粒少々入る \*\* 1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る 粗砂均一に入る \*\* 2 に同じ \*\*

- 2.1-のし1.7/1黒粘質5/1樹灰砂質6/2灰黄褐砂質大きくまだらに入る4/1褐灰粘土 細砂均一に入る5/1褐灰砂質6/2灰黄褐砂質均一に入る
- 6/2灰黄褐砂質4/1褐灰砂質3/1黒褐粘質まだらに入る
   7/2にぶい黄橙砂質5/1褐灰砂質3/1黒褐粘質まだらに入る

- \$P1330 f-f' 1 10783/黒褐粘質7/2にぶい黄橙砂質まだらに少々入る 粗砂均一に入る 2 ~ 7/2にぶい黄橙砂質5/1褐灰粘質まだらに入る 3 ~ 3/1黒褐粘土7/2にぶい黄橙砂質一部均一に入る 4 ~ 4/1褐灰粘質2/1黒粘質延点状に入る 5 ~ 7/2にぶい黄橙砂質4/1褐灰粘質まだらに入る 6 ~ 1.7/1黒粘質 細砂均一にまじる4/1粘土大きくブロック状に入る

#### SP1326 g-g'

- 10184/1編灰粘質6/2灰黄褐砂質まだらに(一部ブロック状に)入る » 1.7/1黒粘質4/2灰黄褐砂質少々まだらに入る » 1.7/1黒粘土3/1黒褐粘土まだらに入る
- 4/1褐灰粘土
- 4/1後次枯土
   3/1黒褐粘質5/1褐灰粘質3/1黒褐粘土ブロック状に入る
   3/1黒褐粘質5/1褐灰粘質ブロック状に大きく入る 1.7/1黒粘質まだらに入る
   3/3暗褐粘質5/1褐灰粘質3/1黒褐まだらに入る
- 〃 5/1褐灰砂7/2にぶい黄橙3/1黒褐粘質まだらに入る

- 粒少々入る

#### SP1676 i-i'

- SP1676 i-i'
  10YR1.77|黒粘質4/1褐灰砂質少々まだらに入る 酸化鉄入る
  2 ~ 1.77|黒粘質4/1褐灰砂質まだらに入る 酸化鉄入る
  3 ~ 4/1褐灰砂質1.77|黒粘質斑点状に入る 酸化鉄入る
  4 ~ 5/1褐灰砂質4/1褐灰粘質まだらに入る 酸化鉄入る 粗砂均一に入る 1.77|黒粘質斑点状に入る 6/2灰黄褐砂地4/1褐灰粘質まだらに入る 1.77|黒粘質斑点状に入る 4/20では、2000年10月1日
- 酸化鉄入る 6 % 5/1褐灰砂質1.7/1黒粘質斑点状に入る 酸化鉄入る

#### SP1671 i-i

- \$Pi671 j-j'
  1 10TR4/1褐灰粘質6/2灰黄褐少々まだらに入る1.7/1黒粘質斑点状に少々入る
  2 6/2灰黄褐砂質5/1褐灰砂質まだらに入る1.7/1黒粘質斑点状に微量入る
  3 4/1褐灰粘質2/1黒粘質まだらに入る
  4 4/1褐灰粘質2/1黒粘質30-に入る
  5 4.1.7/1黒粘質4/1褐灰粘質6/2灰黄褐少々まだらに入る
  7 6/2灰黄褐砂質5/1褐灰粘質5/5に入る1.7/1黒粘質25/5

#### SP1669 k-k'

- \*\* 1 10YR5/9K 黄褐砂質4/1褐灰砂質まだらに入る 酸化鉄入る 2 ~ 4/1褐灰砂質5/4にぶい黄褐砂質まだらに入る 酸化鉄入る 3 ~ 1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る
- 〃 3/1里褐粘質6/2灰黄褐砂質均一に入る

- SP1318 I-I' 1 101R3/1黒褐粘質1.7/1黒粘質帯状、斑点状に入る 粗砂均一に入る 2 ~ 4/1褐灰粘質3/1黒褐粘質まだらに入る 1.7/1黒粘質斑点状に入る

- SP1334 m-m′ 1 10YR5/1褐灰粘質4/1褐灰粘質斑点状に入る
- 10167/189×伯貝47/489×伯貝塩点水に入る ② 2/1黒粘質5/1褐灰粘質少々まだらに入る 炭化物、粒少々入る 9 6/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘質大きくまだらに入る 炭化粒少し入る 9 6/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘質斑点状に入る
- 6/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘質基点がた/1.7/1黒粘土2/2黒褐粘土まだらに入る

- SP13331 n-n′ 1 10YR1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る 粗砂均一に入る 炭化粒入る 土器粒少々
- ^ 4/1褐灰粘質3/1黒褐粘質6/2黒褐粘質まだらに入る1.7/1黒粘質斑点状に入る ◆ 2/1黒粘質3/1黒褐粘質まだらに入る 木片粒、石粒入る

#### SP1331 n=n\*

- 1031 0-0 10YR1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質少々まだらに入る 酸化鉄入る 。 6/2灰黄褐砂質 酸化鉄入る 。 1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る 酸化鉄入る 炭化粒少々入る

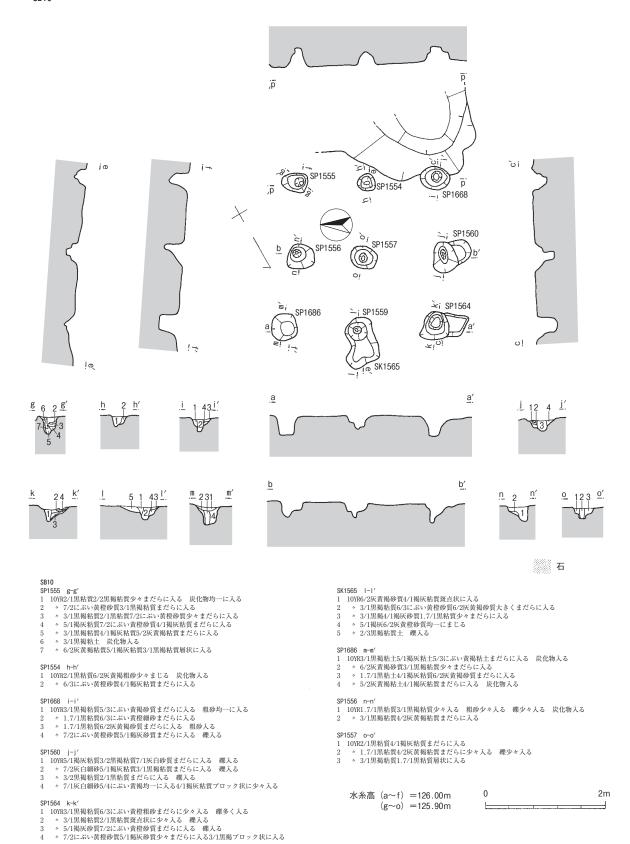
- 1.7/1黒粘質6/2次資格砂質まだらに入る 酸化鉄人る 灰化粒少々人。
  7/2にぶい黄橙砂質21里粘質またがに入る。
   3/1里褐粘質2/1里粘質まだらに入る 酸化鉄入る
   6/1褐灰砂質2/1黒粘質よさくまだらに入る。
   4/3によい黄橙砂質3/1黒粉粘質均一にまじる 酸化鉄入る
   3/1黒褐粘質4/1線5枚質1.7/1黒粘質5/2灰黄褐砂質まだらに入る。
   3/1黒褐粘質4/2灰黄褐砂質3-に入る。
   4/1褐灰粘質4/2灰黄褐砂質まだらに入る。
   1.7/1黒粘質斑点状に入る

- SP1319 p-p' 1 10NRI.7/用結質3/3暗褐砂質少々まだらに入る 酸化鉄入る 2 × 3/1用総粘質1.7/用熱粒質一部プロック状に入る 酸化鉄入る 3 × 4/2灰黄褐砂質3/1黒褐粘質まだらに入る 砂均一に入る 酸化鉄入る

- SP1674 q-q′ 1 10YR6/2灰黄褐砂質4/1褐灰砂質少々まだらに入る1.7/1黒粘質少々斑点状に入る
- , 1.7/1黒粘質4/1褐灰砂質まだらに入る

第17図 第3次SB9建物跡遺物出土状況(2)

SB10



第18図 第3次SB10建物跡

て想定に留まらざるを得ない。しかしながら、この辺を北辺として想定したときには、山形市 調査区において検出された掘立柱建物跡列が、この想定北辺ラインに沿っているため、ここで は妥当性があるものと考えておきたい。

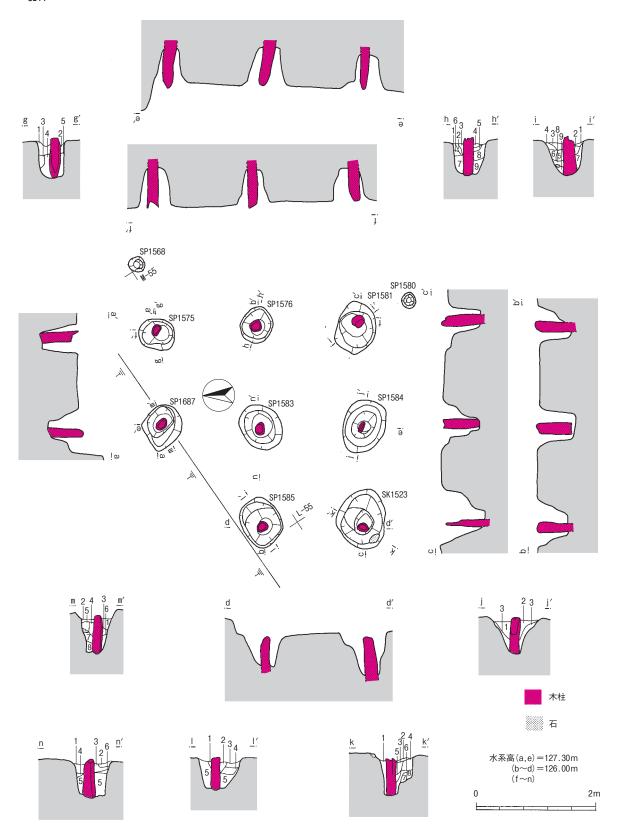
この想定ラインのすぐ北側の山形市調査区には、小川と見られる溝跡が見られ、この小川は 遺跡の東側を現在流れている河川に流れ込み、河川交通の一要素を構成していた可能性がある。 東辺については、これまた山形市調査区の中になるものであろうと想定できるが、明確な遺構 を検出することはできなかった。東辺を想定するあたりは、土地の傾斜が強く、すでに掘削さ れていたものと考えられる。

東辺のラインに沿うようにして、溝跡が存在するが、これは、SD 522 溝跡と連結するものと思われる。まとめれば、約50mの方形の区画が存在し、木柵列で囲繞されており、その中には掘立柱建物跡が、方形のラインに沿うような配置で並んでいた、ということになろう。

木柵列の高さと密接度であるが、これについては SD 588 遺構の考察で後考するが、木柵列の高さはあまり高くなく、間隔も  $20\sim30\mathrm{cm}$  であり、まばらな木柵列であろう。

出入り口の前面に展開する溝跡からは墨書土器がまとまって出土し注目される。

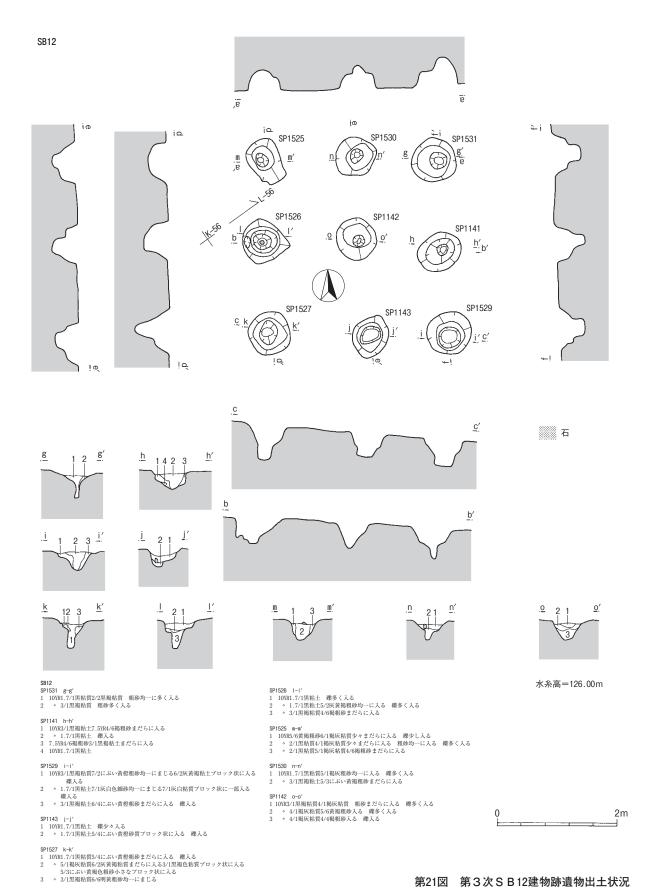
**SA5・6柵列** SA5はSD 219・1718 からなり、SA6はSD 1605・1718 を含んでいる。 SA5・6柵列 両者とも、囲繞施設の一部であることは間違いなく、いずれも木柵列をもつものであることも、 SA1・2を中心とした囲繞施設と共通するものである。



第19図 第3次SB11建物跡遺物出土状況(1)



第20図 第3次SB11建物跡遺物出土状況(2)



第21図 第3次SB12建物跡遺物出土状況

# ・溝跡

検出された溝跡については、その全てを図示することができなかった。また、図の縮尺の関係で、連続する溝跡が複数頁にまたがることもあるので注意されたい。また、第 5 図で示した 柵列は次のように溝跡との関係をもつ。 SA1 は SD 588・597・SD 1509  $\sim$  1514、SA2 は SD 704・723、SA4 は SD 650、SA5 は SD 219・1718、SA6 は SD 1605・1718 を含むものである。

第3次SD 219 溝跡 (第43 図) SA 5 柵列を構成する遺構である。調査区の西北に位置する、 SD 219 溝跡 D~E  $-52 \sim 53$  グリッドで検出された。幅は約 30cm、長さは検出部分で約  $50 \sim 150$  mである。 深さは約  $20 \sim 30$ cm、断面の形状は箱型となる。底面には連続した凹凸があり、一部には腐朽した木材が遺存していたため、柱材の痕跡であると考えられる。 SA 6 と連続するものと考えられ、水路で一部が破壊されているが、西側を区画する方形の囲繞施設となるものと考えられよう。

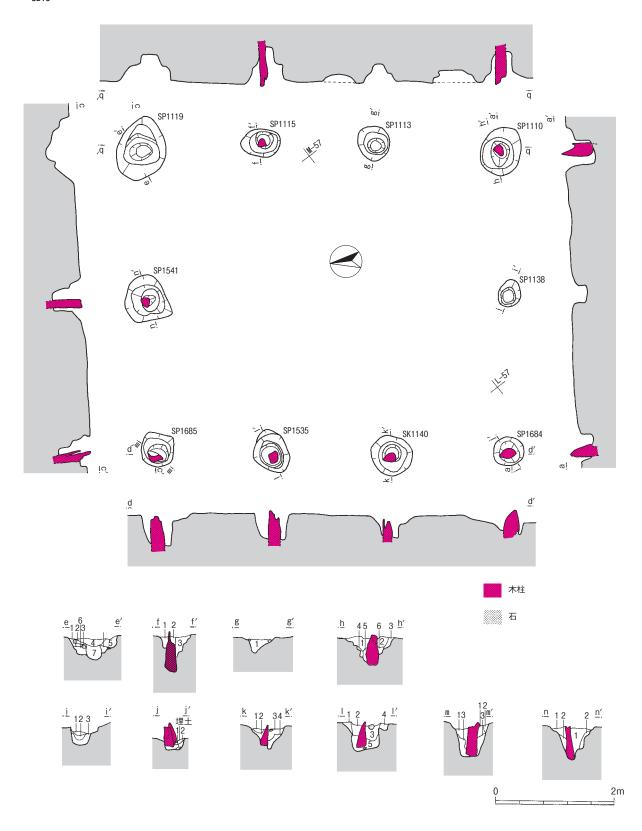
第 3 次 S D 130 溝跡(第 44 図) S D 522 と平行する溝跡である。調査区の南側に位置する S D 130 溝跡  $G\sim M-63\sim 65$  グリッドで検出された。幅は約  $70\sim 200$  cm、長さは検出部分で約 30 mである。深さは約 20 cm で浅い、断面の形状は箱型となる。底面の一部には遺物を含む礫群がある。更に東側に連続するものと考えられる。

第3次SD 650 溝跡 (第44図) SA4 柵列を構成する遺構である。調査区の東側に位置する、 SD 650 溝跡  $K\sim M-59\sim 60$  グリッドで検出された。幅は  $30 {\rm cm}$ 、長さは検出部分で約  $15 {\rm m}$ である。深 さは約  $20 {\rm cm}$ 、底面には連続した凹凸があり、一部には腐朽した木材が遺存していたため、柱 材の痕跡であると考えられる。区画する方形の囲繞施設の内部に設けられている柵列となるも のと考えられよう。

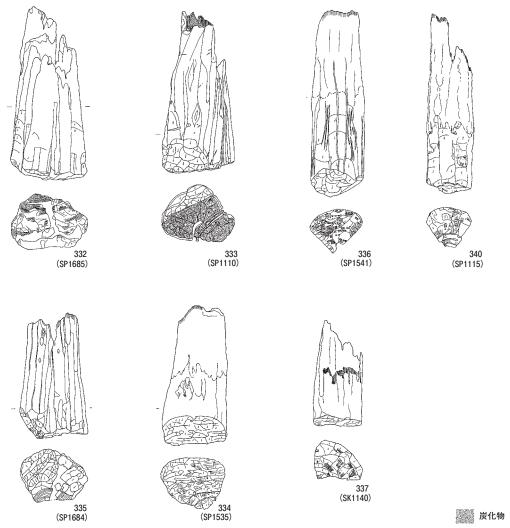
第3次SD 486 溝跡(第45 図) SD 522 に連続する溝跡である。調査区の南側に位置する SD 486 溝跡  $D \sim E - 59 \sim 60$  グリッドで検出された。幅は約 $50 \sim 70 \text{cm}$ 、長さは検出部分で約7 mである。 深さは約20 cm で浅い、断面の形状は箱型となる。遺物を含む。

第3次SD 522 溝跡(第45・46 図) SA1・2 柵列に平行する溝跡である。調査区の南区 SD 522 溝跡 に位置する、 $E\sim M-60\sim64$  グリッドで検出された。幅は $40\sim250$ cm、長さは検出部分で 約45 mである。深さは約20cm、断面の形状は箱型となる。墨書土器(丈、廾万)を含む。 墨書土器は $SA1\cdot2$ 柵列の南側出入り口と考えられる部分付近で大量に出土している。この ほかの遺物としては、須恵器甕・坏・蓋、土師器甕、砥石などがある。

第3次SD 588 溝跡 (第47図) SA 1 柵列を構成する遺構である。調査区の中央に位置する、 SD 588 溝跡  $H \sim I - 57 \sim 61$  グリッドで検出された。幅は約 30cm、長さはL字に折れている部分を総合すると約 30 mである。深さは約 20cm、底面には連続した凹凸があり、一部には腐朽した木材が遺存していたため、柱材の痕跡であると考えられる。全体の外郭を区画する方形の囲繞施設の柵列となるものと考えられよう。遺存していた木柱は、末端が尖ったものと平坦なものがある。布掘はあるものの明瞭な掘り方は見られないために、基本的には打ち込みの柱材となっているものと考えられる。また打ち込みの深さは、深いもので 25cm 程度であるため、旧表土の高さは不明であるが、打ち込みの深さからして、それほど高い木材列を構成してはいなかったものであろう。



第22図 第3次SB13建物跡遺物出土状況(1)



# SP1119 e-e'

- 〃 5/6黄褐粗砂5/1褐灰粘質
- 1.7/1黒粘土5/4にぶい黄褐砂質まだらに入る 礫入る3/3粗砂7.5YR4/6褐粗砂均一にまじる

# SP1115 f-f'

- 1 10YR1.7/1黒粘質5/1褐灰粘質まだらに入る 礫入る
- 〃 1.7/1黒粘土4/2灰黄褐粘土まだらに入る 炭化物入る 〃 1.7/1黒粘土5/2灰黄粘土5/6黄褐砂質まだらに入る

# SP1113 g-g'

1 10YR1.7/1黒粘土5/3にぶい黄褐粗砂まだらに入る 礫入る

# SP1110 h-h'

- 10YR1.7/1黒粘土5/4にぶい黄褐粗砂均一に入る 礫入る
- 〃 1に同じ
- 〃 6/4にぶい黄橙3/1黒褐粘土まだらに入る

- 〃 3/1黒褐粘土4/1褐灰粘土まだらに入る 礫多く入る

1 10YR1.7/1黒粘土5/6黄褐細砂入る 礫入る

- 〃 1.7/1黒粘土3/3暗褐粘土まだらに入る 礫入る
- 〃 5/6黄褐砂質1.7/1黒粘土まだらに入る 礫入る

- SP1684 j-j' 1 10YR1.7/1黒粘土5/2灰黄褐粘質まだらに入る 2 〃 5/4にぶい黄橙粗砂4/1褐灰粘土均一に入る

# SK1140 k-k'

- 1 10YR1.7/1黒粘質4/4砂質まだらに入る
- 〃 1.7/1黒粘質4/2灰黄褐砂質まだらに入る 礫入る
- 〃 1.7/1黒粘土5/2灰黄褐粘質少々まだらに入る 礫入る 3
- 〃 1.7/1黒粘質5/1褐灰粘質まだらに入る 粗砂、礫入る

# SP1535 I-I'

- 10YR5/3にぶい黄褐粗砂1.7/1黒粘質まだらに入る 1
- 〃 1.7/1黒粘質4/2灰黄褐粗砂均一に入る 礫入る
- 3 〃 2に同じ
- 〃 4/2灰黄褐粗砂3/1黒褐粘質まだらに入る
- 〃 3/1黒褐粘質6/2灰黄褐粗砂まだらに入る

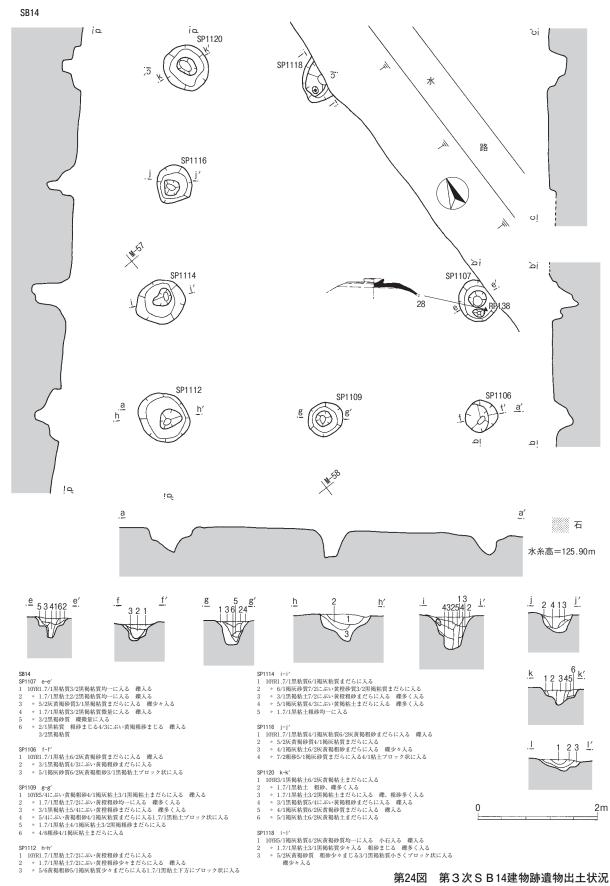
# SP1685 m-m'

- 1 10YR1.7/1黒粘土5/3にぶい黄褐粗砂均一にまじる 礫入る
- 〃 4/2灰黄褐粘土5/2灰黄褐粗砂4/1褐灰粘質まだらに入る
  - 〃 4/1褐灰粘土6/2灰黄褐粗砂一部ブロック状に入る

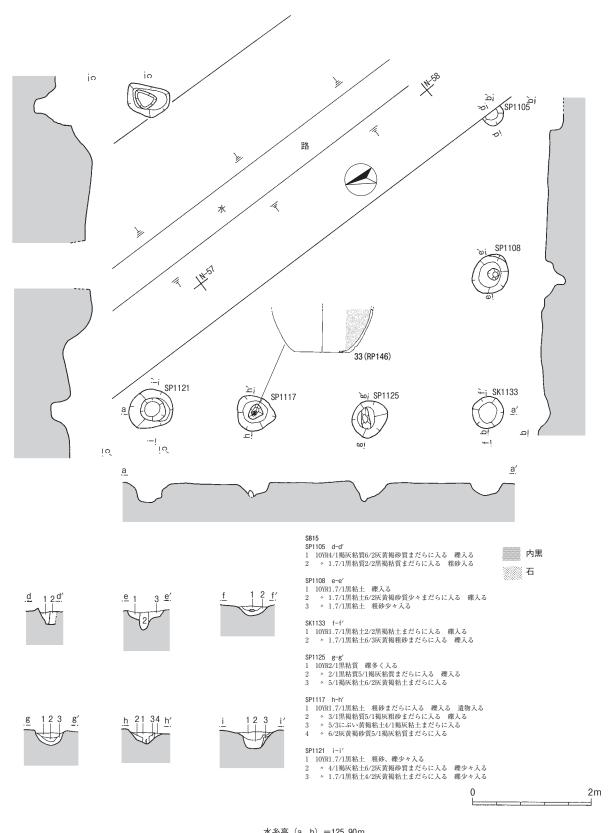
# SP1541 n-n'

- 1 10YR1.7/1黒粘土 粗砂均一に少々まじる 礫少々まじる
- 〃 1.7/1黒粘土7/2にぶい黄橙粗砂まだらに入る 礫入る

# 第23図 第3次SB13建物跡遺物出土状況(2)



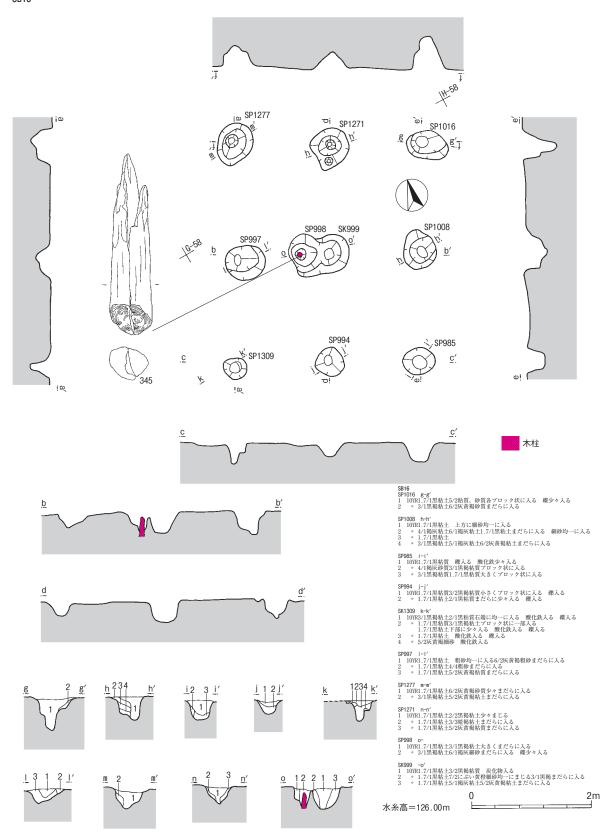
第24図 第3次SB14建物跡遺物出土状況



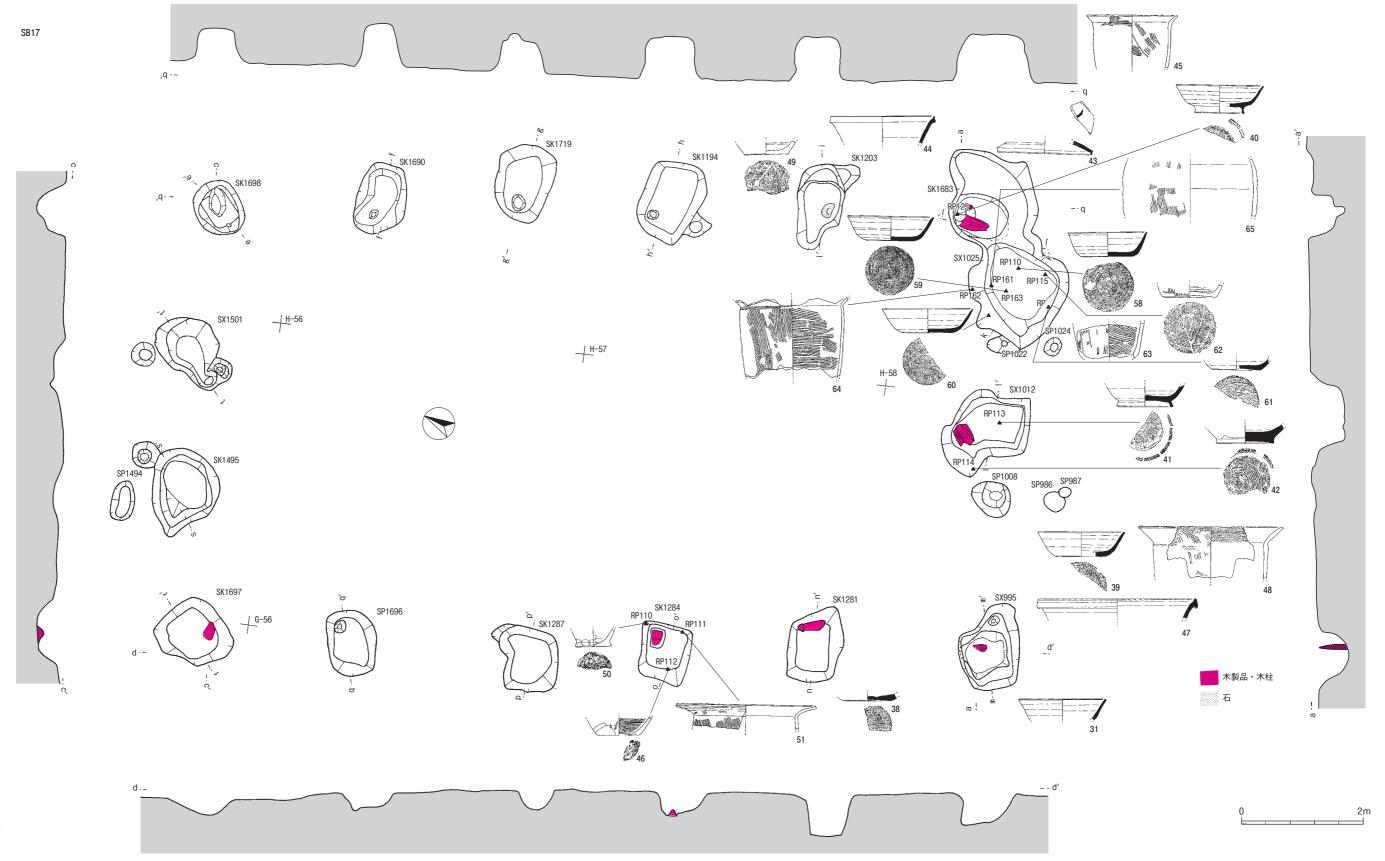
水糸高 (a、b) =125.90m (c) =126.70m (d~i) =125.80m

第25図 第3次SB15建物跡遺物出土状況





第26図 第3次SB16建物跡遺物出土状況



第27図 第3次SB17建物跡遺物出土状況(1)



第29回 第3次SB17建物跡遺物出土状況(2)

- SK1698 e-e' 1 10YR1.7/1黒粘質 礫入る
- 10/HA.//1無格質 様々る ・ 1.7/1黒粉質、5/HA/4褐粘質少々まだらに入る 6/2灰黄褐砂質大きくブロック状に入る 碟入る ・ 1.7/1黒粘質 粗砂均一に少し入る 碟多めに入る ・ 1.7/1黒松質 3/1黒褐松質まだらに入る 碟入る ・ 5/1褐灰粘土3/1黒褐粘土層状に入る 碟入る

- 6 , 1.7/1黒粘質5/1褐灰粘質まだらに入る 礫多めに入る

## SK1690 f-f'

- (1690 千f' 10YR1.7/1黒粘質2/2黒褐粘質まだらに入る 礫入る (北7/1黒粘質4/1褐灰粘質まだらに入る 礫入る (1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質大きくまだらに入る (1.7/1黒粘質6/2/黒褐粘質まだらに入る 礫入る (3/1黒褐粘質6/2粘質まだらに入る 礫入る (3/1黒褐粘質5/1黒褐粘質まだらに入る 礫入る (3/1黒褐粘土4/2灰黄褐粘土まだらに入る)

- I/I/I 8-8 I/I/II 8-8 I/I/III 1/III 1/IIII 1/III 1/III 1/III 1/III 1/III 1/III 1/III 1/III 1/IIII 1/III 1/IIII 1/IIII 1/IIII 1/IIII 1/III 1/I

- 6/2細砂4/1褐灰粘土まだらに入る 礫酸量に入る。
   6/1機灰粘土7/2にぶい質橙粘土まだらに入る3/1粘土が少々まだらに入る3/1黒褐粘質6/2灰黄褐細砂均一にまじる。
   3/1黒褐粘質8/2黒褐粘土まだらに入る

# SK1194 h-h'

- 10VR6/2灰黄褐粘土5/1褐灰粘土まだらに入る(抽山)

- 10786/2次 黄褐牡土5/1褐灰粘土まだらに入る (地山)

  1.7/1黒粘質7/2にぶい黄橙砂質プロック状に入る 炭化物入る

  4/1褐灰粘土6/1褐灰粘黄まだらに入る

  3/1黒褐粘質5/1褐灰粘土大きくまだらに入る 少々碟入る 少々炭化物入る

  1.7/1黒粘土4/3にぶい黄褐粘土まだらに入る3/1黒褐一部プロック状に入る6/1褐灰砂質少々 ブロック状に入る
- 6 / 1.7/1黒粘質2.5Y6/2灰黄砂質まだらに入る 礫入る 木材入る

# SK1203 i-i

- SK1203 i-i'
  107R1.771 社報官5/2灰黄褐粗砂まだらに入る 礫入る 炭化物入る
  2 ~ 1.771黒粘土7/2にぶい黄橙粗砂まだらに入る 炭化物入る 碟少々入る
  3 ~ 1.771黒粘土3/2黒褐粘土6/2灰黄褐砂質まだらに入る
  4 ~ 4/1褐灰粘土5/1褐灰粘土7/2にぶい黄橙砂質ぞれぞれまだらに入る
  1.771黒粘土一部ブロック状に入る 碟少々入る
  5 ~ 1.771黒粘土3/1黒褐粘土まだらに入る 碟少々入る

# SK1683 j-j

- 1 10VR1 7/1里粘質3/1粘土ブロック状に入る6/2灰黄褐粘質斑点状に少々入る
- 10/RI、7/1黒粘質3/1桁上プロック状に入る6/2氷寅褐粘質建点状に少々入る
  ・1.7/1黒粘土6/2灰黄褐砂質まだらに入る。炭化物少々入る。柴少々入る
  ・1.7/1黒粘土6/2灰黄褐砂質まだらに入る。粗砂少々入る 木柱、遺物入る
  ・1.7/1黒粘土5/2灰黄褐粘土斑点状に少々入る。蝶少々入る
  ・6/2灰黄褐砂質1.7/1黒粘土帯状に入る2.5/4/1万灰粘土大きくブロック状に入る
  ・3/1黒褐粘質7/2にぶい黄橙粗砂まだらに入る。蝶入る

- 7 / 3/1粘質7/2にぶい黄橙砂質少々まだらに入る 8 2.5YR 6/2灰黄粗砂10YR1.7/1黒粘土まだらに入る 9 10YR1.7/1黒粘質2.5YR5/1黄灰砂質 木材少々入る 碟入る

- 3AIUI2 1-II 1 10TR6/2灰黄褐細砂3/1黒褐粘質まだらに入る 2 ~ 6/2灰黄褐砂質2/黒褐粘質1,7/1黒粘質 だらに入る 炭化粒少々入る 3 ~ 1,7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質少々まだらに入る 炭化粒少々入る 4 ~ 5/1褐灰砂質4/2次黄褐粘土3/1黒褐粘土まだらに入る

- SAIZEU n-n' 1 10TR3/1黒褐粘土7/2にぶい黄橙砂質まだらに入る 粗砂均一に入る 炭化粒少々入る 2 ~ 1.7/1黒粘土 炭化粒少々入る 礫少々入る 3 ~ 1.7/1黒粘土4/2床黄褐粘土まだらに入る 礫入る 木材入る 4 ~ 1.7/1黒粘土5/3にぶい黄褐砂質ブロック状に少々入る

- 1 10YR1.7/1黒粘土6/2灰黄褐砂質斑点状に入る 礫入る

- 1 10YR1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る 礫入る

- る 8 \* 1.7/1黒粘土4/1褐灰粘土ブロック状に入る 小石入る 酸化鉄入る

- OATOS/
   r-r'

   1
   10/R1.7/1黒粘質7.5YR3/4暗褐粘質まだらに入る6/1褐灰粘土ブロック状に入る

   2
   々 4/1褐灰粘質6/2反音線砂質±ボミレコッ
- ・ 4/1褐灰粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る ・ 6/2灰黄褐粗砂3/1黒褐粘質まだらに入る ・ 4/1褐灰粘土3/1黒褐粘土まだらに入る

- 1.7/1黒粘土 確少々入る3/1黒褐粘土7/2にぶい黄橙粗砂まだらに入る1.7/1黒粘土5/1褐灰砂質まだらに入る 確少々入る

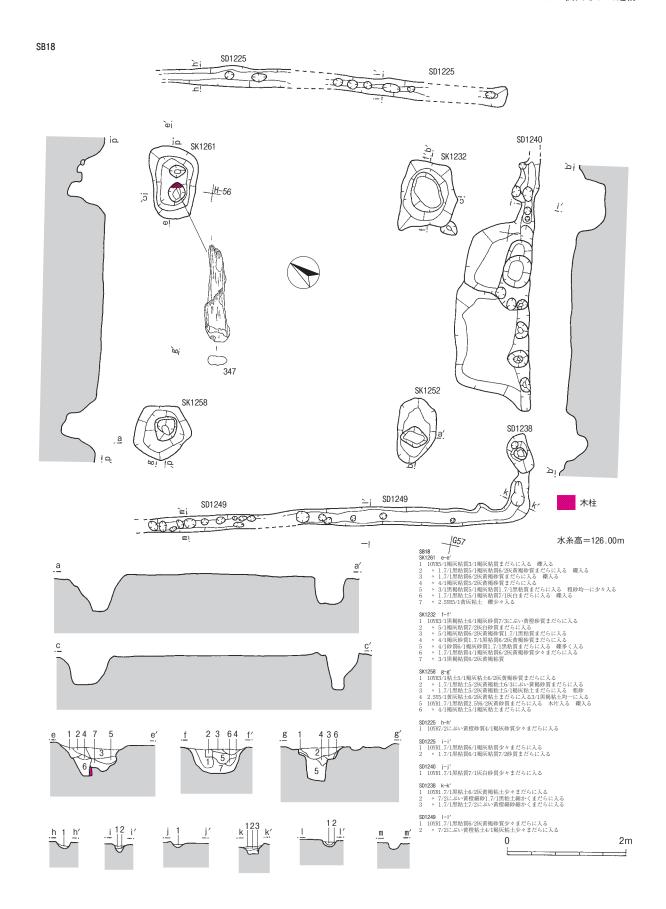
- 1 10YR1.7/1黒粘質3/3暗褐粘質まだらに入る
- 1.7/1黒粘質7.5F83/4暗褐粘質6/1褐灰砂質まだらに入る
   1.7/1黒粘土3/1黒褐粘質3/3暗褐粘質6/2灰黄褐粘質まだらに入る
   1.7/1黒粘土4/3にぶい黄褐粘質まだらに入る
- 1.7/1黒粘土2.5Y7/1灰白砂質まだらに入る3/1黒褐粘土4/1褐灰粘土5/1褐灰粘土まだらに入る

# SATOUT L-T 1 10YR1.7/1黒粘土3/1黒褐粘土4/2灰黄褐粘土7/2にぶい黄橙粘土まだらに入る 2 \*\* 5/1褐灰細砂2.5Y6/2灰黄細砂キだらによる

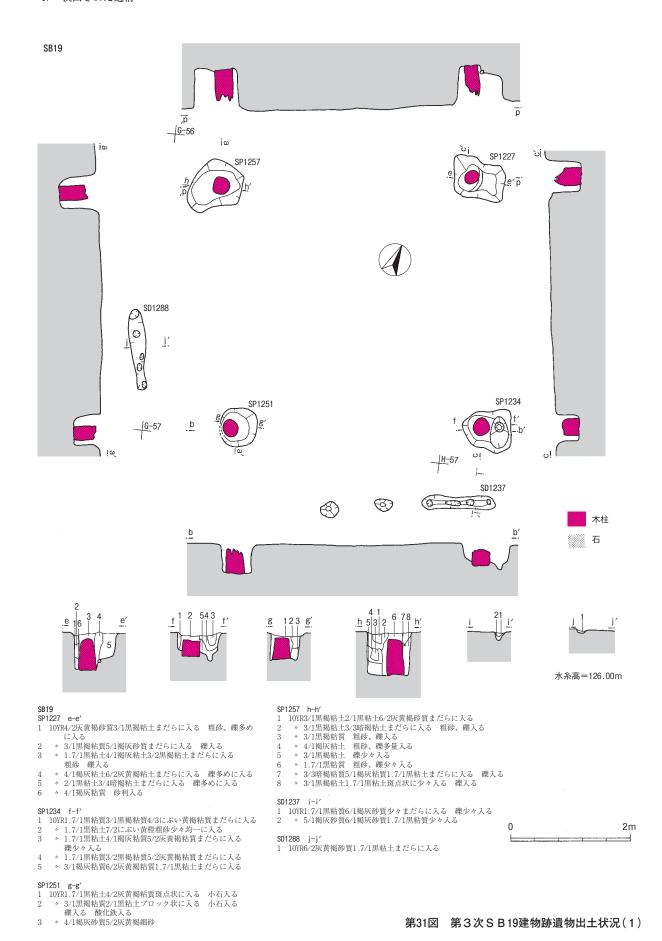
- ゅ 4/1褐灰粘土6/2灰黄褐粘土まだらに入る
- 3/3暗褐粘土3/1黒褐粘土6/1褐灰粘土まだらに入る
   1.7/1黒粘土2/2黒褐粘土まだらに入る
- \* 1 7/1里粘十5/1褐灰6/2灰黄褐細砂まだらに入る

# 第29回 第3次SB17建物跡遺物出土状況(3)

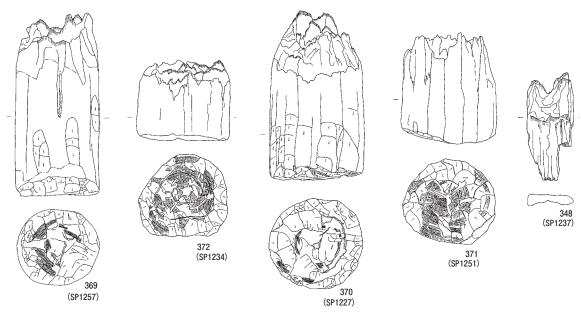
2m



第30図 第3次SB18建物跡遺物出土状況



# 第31図 第3次SB19建物跡遺物出土状況(1)



第32図 第3次SB19建物跡遺物出土状況(2)

第 3 次 S D 597 溝跡 (第 48 図) S A 1 柵列を構成する遺構である。調査区の中央に位置す S D 597 溝跡 る、 $H \sim J - 60 \sim 61$  グリッドで検出された。幅は約  $30 \, \mathrm{cm}$ 、長さは検出部分で約  $15 \, \mathrm{m}$ である。深さは約  $20 \, \mathrm{cm}$ 、底面には連続した凹凸があり、一部には腐朽した木材が遺存していた。方形の囲繞施設の南辺をなすものである。

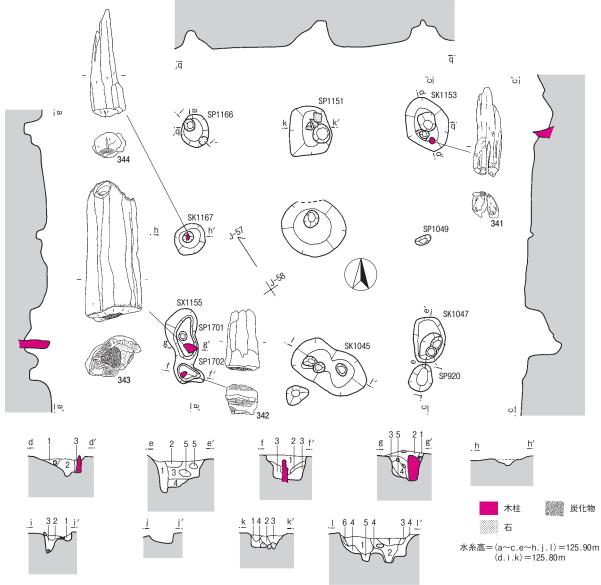
第3次SD 1509  $\sim$  1514 溝跡(第49図) SA 1 柵列の西辺を構成する遺構である。調査区 SD 1509  $\sim$  の北側に位置する J  $\sim$  K  $\sim$  55 グリッドで検出された。幅は約 30cm、長さは検出部分で 1514 溝跡 約5 mである。深さは約 20cm、底面には連続した凹凸がる。

第3次SD 1605 溝跡(第49 図) SA 6 柵列の北辺を構成する遺構である。調査区の西側に SD 1605 溝跡 位置する、 $F\sim G-53$  グリッドで検出された。幅は  $30 \, \mathrm{cm}$ 、長さは検出部分で約 $5 \, \mathrm{m}$ である。 深さは約 $20 \, \mathrm{cm}$ 、底面には連続した凹凸がある。

第3次SD 1700 溝跡(第50 図) SA 1 柵列の西辺に平行する溝跡である。調査区の中央に SD 1700 溝跡 位置する、 $G\sim H-57\sim 60$  グリッドで検出された。幅は  $70 \,\mathrm{cm}$  でありところどころに土坑が 取り付く。長さは検出部分で約  $20 \,\mathrm{m}$  である。深さは約  $15\sim 30 \,\mathrm{cm}$  である。出土遺物としては、 須恵器甕・坏・蓋、土師器甕などがある。須恵器坏には墨書がある。

**第3次SD 1718 溝跡(第51 図)** SA 5・6 柵列の東辺を構成する遺構である。調査区の西 SD 1718 溝跡 側に位置する、D~E—54~56 グリッドで検出された。幅は 30cm、長さは検出部分で約 15 mである。深さは約 20cm、底面には連続した凹凸がある。直線的に延びる連続する遺構は SA 5 柵列であり、これと鋭角に交わる遺構が SA 6 柵列である。規模、掘り方とも、SA 1 柵列と同様である。

第3次S X 1289 遺構(第52・53 図) 調査区の北側に位置する、 $E \sim F - 54 \sim 56$  グリッド S X 1289 遺構で検出された。平面形は不整形を呈する遺構である。幅は約 $30 \sim 300$ cm、長さは検出部分で約15 mである。深さは約 $30 \sim 40$ cm、底面には凹凸がある。出土遺物としては、須恵器甕・



- SK1153 d-d' 1 10YR4/1褐灰粘土5/1褐灰粘土まだらに入る 礫入る 2 〃 5/1褐灰粘土7/2にぶい黄褐粗砂少々まだらに入る 3 〃 3/1黒褐粘土 粗砂少々入る

# SK1047 e-e

- SKIU47 e-e\*

   1 10/R1.7/1黒粘質3/1黒褐砂質プロック状に入る 酸化鉄入る 小石入る

   2 / 3/1黒褐砂質6/2灰黄褐細砂1.7/1黒粘質速点状に入る 礫
- 入る 小石入る 酸化鉄入る 4/1黒褐粘質粗砂まじる3/1黒褐粘土プロック状に入る 離犬る 小石入る 酸化鉄入る 5/1褐灰砂質3/1黒褐粘土プロック状に入る 小石入る
- 酸化鉄入る 5 / 1.7/1黒粘土粗砂微量にまじる

- SPI702 f-f'
  1 10YR2/1黒粘質 粗砂まじる1.7/1黒粘質均一に入る1.7/1黒粘 土斑点状に入る2/1黒粘土プロック状に入る5/2砂質プロック状に入る 礫入る 小石入る
  2 《 4/2粘質2/1黒粘質 粗砂まじる1.7/1黒粘土斑点状に入る4/3にぶい黄褐粗砂少々入る 酸化鉄入る
  3 《 4/1楊灰粘土 (上方) 3/1黒褐粘土 (下方) 酸化鉄入る

- 4/1褐灰粘土4/3にぶい黄褐粘土まだらに入る

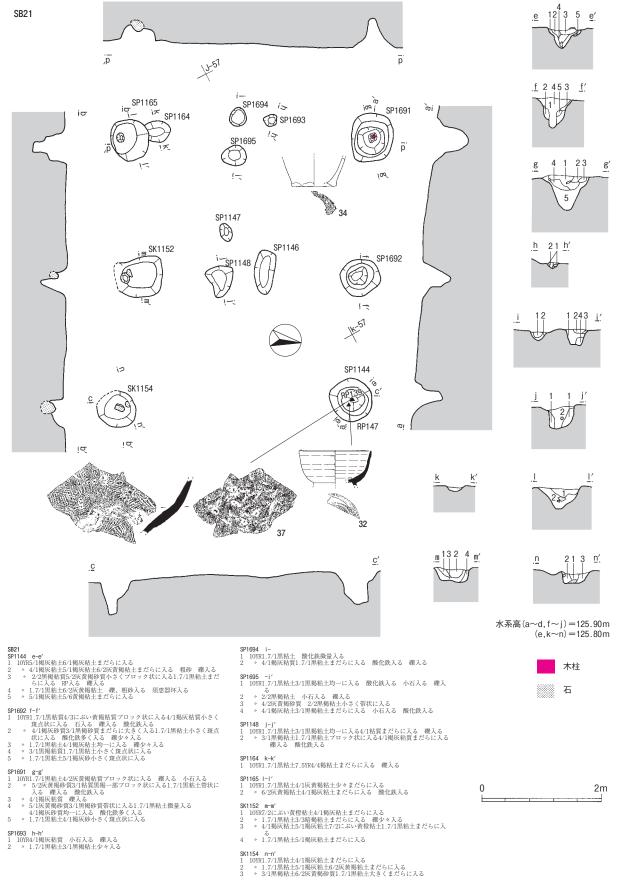
- SP1166 i-i′ 1 10YR3/1黒褐粘土5/1褐灰粘土まだらに入る 礫入る 粗砂入る 2 ~ 1.7/1黒粘質3/1褐灰粘質まだらに入る 礫入る 3 ~ 3/2黒褐粘土2/1黒粘土まだらに入る

- SP1151 k-k' 1 10/R2/1黒粘土3/1黒褐粘土6/2灰黄褐粗砂まだらに入る 2 ッ 5/1褐灰粘土6/2灰黄褐粘土まだらに入る 礫入る 3 ッ 1.7/1黒粘質5/1褐灰粘土まだらに入る 礫入る 4 ッ 4/1褐灰粘土7.5/R4/6褐粘土まだらに入る 礫入る

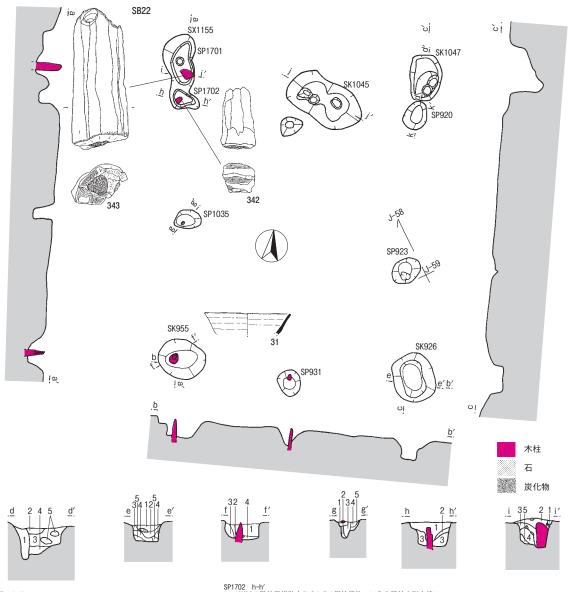
- 化鉄入る <sup>ク</sup> 3/1黒褐粘質1.7/1黒粘土プロック状に入る 小石入る 酸



第33図 第3次SB20建物跡遺物出土状況



第34図 第3次SB21建物跡遺物出土状況



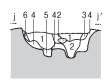
- \$822 \$K1047 d-d' 1 10FR1.7/1黒粘質3/1黒褐砂質プロック状に入る 酸化鉄入る 小石入る 2 % 3/1黒褐砂質6/2灰黄褐細砂1.7/1黒粘質斑点状に入る 礫入る 小石入る 酸化鉄入る 3 % 4/1黒褐粘質粗砂まじる3/1黒褐粘土プロック状に入る 礫入 本 小石入る 酸化鉄入る 4 % 5/1褐灰砂質3/1黒褐粘土プロック状に入る 小石入る 酸化 鉄入る 5 % 1.7/1黒粘土粗砂微量にまじる

- \$K926 e-e' 1 10YR1.7/1黒粘質5/3にぶい黄褐細砂まだらに入る 礫入る 小石
- 入る 3/1黒褐砂質 粗砂まじる4/2灰黄褐粘土プロック状に一部入 \* 3/1黒物野貝 100~~ 3/1黒物野貝 100~ 3/1黒格土選点状に少々入る 1.7/1黒粘土選点状に少々入る \* 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る 3/1黒機粘土2/1黒粘土プロック状に入る5/1褐灰粘質まだらに 入る 酸化鉄入る 小石入る 酸化鉄入る \* 3/1黒機粘土2/1黒粘土均一に入る 酸化鉄入る

- \$K955 f-f'
  1 107R1 7/1黒粘質5/2灰黄褐粘土プロック状に入る3/1黒褐粘土帯状に入る 小石入る 礫入る 酸化鉄入る
  2 % 3/1黒褐粘土4/1褐灰粘土プロック状に入る1.7/1黒粘質粗砂まじる プロック状に大きく入る 小石入る 礫入る 酸化鉄 3/1無物粘土4/1物)水粘土プロックボに入る1.7/1無粘質粗砂まじるプロックボに大きく入る 小石入る 確入る 酸化鉄 入る 3/1黒樹粘土5/2灰黄褐粘土プロックボに入る1.7/1黒粘質粗砂まじる まだらに入る 礫入る 酸化鉄入る 5/2灰黄褐粘土上方に入る4/1物灰粘土下方に入る 酸化鉄入る る

- \$P1702 h-h'
  1 10782/1黒粘質粗砂まじる1.7/1黒粘質均一に入る黒粘土斑点状に 人る2/1黒粘土プロック状に入る5/2砂質プロック状に入る 礫入る 小石入る
  2 。 4/2粘質2/1黒粘質粗砂まじる一部入る1.7/1黒粘土斑点状に入 る4/3にぶい黄褐亜砂タ々入る 酸化鉄入る 3 。 4/1楊灰粘土(上方)3/1黒褐粘土(下方) 酸化鉄入る

- 1701 i-i' 10YR1.7/1黒粘質6/2灰黄褐砂質まだらに入る 礫入る 。1.7/1黒粘質6/2灰黄細砂細かくまだらに入る 一部プロ ック状に入る 礫入3 。1.7/1粘質2/2黒褐粘質6/3にぶい黄橙細かくまだらに入る 粗
- 砂均一に入る 礫入る \*\* 1.7/1黒粘質3/1黒褐粘質5/1褐灰粘土まだらに入る 礫入る \*\* 4/1褐灰粘土4/3にぶい黄褐粘土まだらに入る

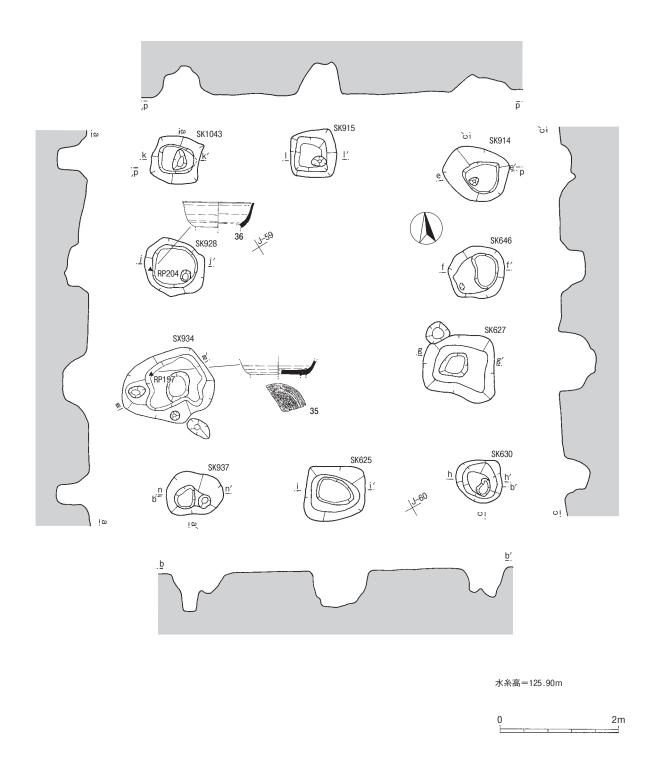




水系高=125.90m

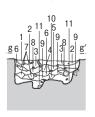
2m

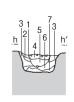
第35図 第3次SB22建物跡遺物出土状況

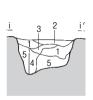


第36図 第3次SB23建物跡遺物出土状況(1)





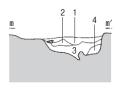














水系高=125.90m

# 石

# SB23 SK914

- 1 10YR1.7/1黒粘質 粗砂まじる5/3にぶい黄褐帯状に入る 小石入る 礫入る 酸化鉄
- 入る か 5/1幾灰粘質3/1黒褐粘質まだらに入る4/1幾灰粘土ブロック状に入る 小石入る
- 碟入る 酸化鉄入る3 /1黒褐粘土1.7/1黒粘土ブロック状に入る4/1褐灰砂質 右上方に均一に入る 酸化鉄入る 碟入る

## SK646 f-f'

- 小石少々入る

- 標入る

  4 ~ 1.7/1黒粘質3/1黒褐粘土プロック状に入る 喋入る

  5 ~ 1.7/1黒粘質3/1黒褐粘性大きくプロック状に入る 酸化鉄入る

  6 ~ 1.7/1黒粘質 粗砂まじる2/1黒粘質が一に少々まじる 碟入る

  7 ~ 3/1黒褐粘土6/2次青褐細砂3/1黒褐粘土クスはに一部入る 酸化鉄入る

  8 ~ 5/3にぶい黄褐細砂3/1黒褐粘土プロック状に一部入る 酸化鉄入る

  9 ~ 1.7/1黒粘土5/2次青褐下部に少々入る 碟少々入る

  10 ~ 3/1黒粘土1/2k青岩質まだらに入る5/2次黄褐粘土まだらに入る 酸化鉄入る

  11 ~ 4/1褐灰粘土 酸化鉄入る

- SK630 h-h'
  1 107R1 .7/1黒粘質 粗砂まじる 小石入る 碟入る
  2 。 1.7/1黒粘土 碟まじる 小石入る
  3 。 1.7/1黒粘土 碟まじる 小石入る
  3 。 1.7/1黒粘土 碟まじる2/1黒砂質少々入る
  4 。 5/2販資制砂質1.7/1黒粘土 碟まじる 小石入る
  5 。 1.7/1黒粘土2/1黒粘土 碟まじる ブロック状に一部入る
  6 。 5/1褐灰砂質 粗砂まじる1.7/1黒粘土プロック状に入る 上方に酸化鉄入る 碟入る

- 1 10YR1.7/1黒粘質3/1黒褐粘質ブロック状に入る5/2灰黄褐砂質ブロック状に入る 10個1.7/1黒粘質3/1黒褐粘質プロック状に入る5/2快資褐砂質プロック状に入る 離入る か石入る 酸化鉄入る ・ 2/1黒粘質1.7/1黒粘質均一に入る4/1褐灰粘土プロック状に入る5/2灰質褐粘質小 さくプロック状に入る 嫌入る 酸化鉄入る ・ 3/1黒粘土1.7/1黒粘質まだらに入る 礫まる 酸化鉄入る ・ 1.7/1黒粘土3/1黒褐粘土プロック状に入る5/1褐灰砂質プロック状に一部入る 礫入る 酸化鉄入る ・ 4/1褐灰砂質/2灰度褐粘土プロック状に入る3/1黒褐粘土プロック状に入る 1.7/1黒粘土小さくプロック状に入る 酸化鉄入る 礫入る

- \$K928 j-j′ 1 10/R1.7/1黒粘土5/2灰黄褐砂質ブロック状に入る 碟入る 2 2.575/2暗灰黄細砂3/1黒褐粘質ブロック状に入る1.7/1黒粘土斑点状に入る 酸化鉄
- 3 10YR4/1黒褐砂質1.7/1黒粘土帯状に入る5/2灰黄褐細砂ブロック状に入る 酸化鉄入

- 2/2黒褐粘土ブロック状に入る 酸化鉄入る 5 / 3/1黒褐粘質2/1黒粘土まだらに入る 酸化鉄入る

- 1 10YR4/1褐灰粘質2/1黒粘土帯状に入る1.7/1黒砂質 粗砂まじる ブロック状に入る
- 酸化鉄入る 2 \* 2/1黒粘質4/2灰黄褐粘質ブロック状に入る5/4にぶい黄褐細砂ブロック状に入る
- 2 /1 温粘質4/2次質検育はプロック状に入る5/4にぶい資物細砂プロック状に入る 1.7/1里粘管変まらに入る 粗砂まじる 礫入る 酸化鉄入る
   3 /2 黒褐粘質1.7/1里粘質 粗砂まじる5/2灰黄褐細砂右端に一部入る 礫入る 3/1黒褐砂質 粗砂まじる2/1黒粗土プロック状に入る3/1黒褐粘土プロック状に 入る1.7/1黒粘土変は大に入る 酸化鉄を入る
   5 /1褐灰細砂1.7/1黒粘土小さく斑点状に入る 酸化鉄入る

# SK915 I-I'

- 1 10YR4/2灰黄褐砂質
   粗砂まじる

   2 ヶ 1.7/1黒粘質5/2灰黄褐砂質
   粗砂まじる
   ブロック状に入る
   酸化鉄入る
   小石
- 入る

  <sup>\*</sup> 2/1黒粘質3/1黒褐粘質まだらに入る1.7/1黒粘質ブロック状に入る 酸化鉄入る
- 小石入る 4 2.5Y4/1黄灰砂質3/1黒褐粘質均一に入る5/2灰黄褐砂質ブロック状に入る 酸化鉄入
- る 小石入る 5 10YR2/1黒粘土 酸化鉄入る2.5Y4/1黄灰砂質ブロック状に入る

- SX934 m-m′ 1 10YR1.7/1黒粘質5/1褐灰粘質まだらに入る 礫両端に入る

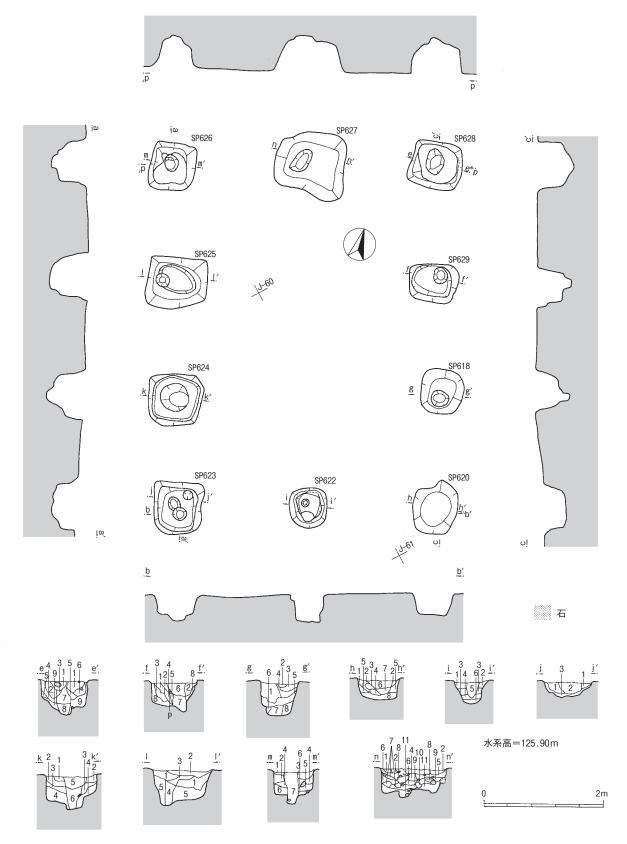
# SK937 n-n

- 58937 n-m 1 10/R1.7/1黒粘土4/1褐灰砂質まだらに入る 小石入る 2 。 4/1褐灰粘質4/2灰黄褐砂質均一に入る1.7/1黒粘土小さいブロック状に入る 酸
- 化鉄入る 礫入る

2m

第37図 第3次SB23建物跡遺物出土状況(2)





第38図 第3次SB24建物跡(1)

# SB24 SP628 e-e'

# 10YR1.7/1黒粘質2/1黒粘質均一に入る 碟入る \*\* 1.7/1黒粘土 礫少々まじる3/1黒粘土プロック状に入る4/1褐灰粘質帯状に入る

1.7/1黒粘土4/1褐灰粘質ブロック状に入る 碟入る

1.7/1黒粘土2/1黒粘土均一に入る 礫入る3/1黒褐砂質5/2灰黄褐粘質ブロック状に入る1.7/1黒粘質斑点状に入る 酸化鉄

3/1 活物呼雨/2が貫物相頁/ロックバに入る1.//1 活拍頁取点がに入る
 3/2黒褐砂質1.7/黒粘土まだらに入る 酸化鉄入る 礫入る
 1.7/1黒粘土3/黒褐粘土プロック状に入る 酸化鉄入る 礫入る
 1.7/1黒粘土 小石入る 礫入る 飲化鉄入る
 5/2灰黄褐細砂4/1褐灰粘土帯状に入る 酸化鉄入る

029 1-1 10YR4/1褐灰粘質3/1黒褐粘土ブロック状に小さく入る 礫入る 酸化鉄入る

 ↑ 1.7/1黒粘質 礫入る 小石入る PP入る
 ↑ 1.7/1黒粘土4/1褐灰粘質ブロック状に一部入る 酸化鉄入る 礫入る
 ↑ 1.7/1黒粘土4/1褐灰粘質 粗砂まじる まだらに入る 小石入る 礫入る 酸化 鉄入る

ハハペニ1.7/1黒粘土4/1褐灰粘土ブロック状に一部入る 小石入る1.7/1黒粘質4/1褐灰粘土ブロック状に入る 小石入る 礫入る 酸化鉄少々入る RP人る
7 / 1.7/1無粘土 礫まじる4/1樹灰粘土小さくブロック状に入る 礫入る 小石入る

酸化鉄入る

8 / 5/2灰黄褐砂質4/1褐灰粘土ブロック状に大きく入る1.7/1黒粘土少々入る

1018 6.7/1黒粘土 粗砂少々均一に入る 礫少々入る

• 1.7/1黒粘土6/3にぶい黄橙砂質4.1褐灰粘土まだらに入る

• 1.7/1黒粘土5/3暗褐粘質まだらに入る 礫少々入る

• 1.7/1黒粘土6/3にぶい黄橙粗砂まだらに入る 礫少々入る

1.7/1点由1.6/31におい貝位配砂まだらに入る (株ツヤ/ 5/1掲収拾1.6/20両積制砂質まだらに入る)
 5/3にぶい資制粘質2/1黒褐粘質まだらに入る (オース/1黒粘土3/4暗褐粘土まだらに入る)
 5/2収責褐砂質2/1黒褐粘質まだらに入る

1 10VR5/2灰 黄褐細砂4/1褐灰粘質ブロック状に入る 酸化鉄入る

01m2の東西側の41mの大田・フ・フ・ベースの ERLが入る。 第2/1黒楊粘質組砂まじる4/1褐灰粘土ブロック状に入る4/2灰質褐細砂ブロック状 に入る1.7/1黒粘土からくブロック状に入る 酸化鉄入る 碟入る 4/1褐灰粘土1.7/1黒粘土ブロック状に一部入る 酸化鉄入る

# SP622 i-i

方に大きく入る

3/1黒褐粘土5/褐灰粘土均一に入る1.7/1黒粘土3/1黒褐砂質下方に大きく入る 蝶入る 小石入る 酸化鉄入る 1.7/1黒粘土3/1黒褐砂頁 r3/1黒褐粘土 酸化鉄入る

 SP623 j-j'

 1 101R1.7/1黒粘質5/2灰黄褐細砂ブロック状に入る
 酸化鉄入る

1 ロバル: バルボ (ロメリンのアストライン (取び入る)
 2 \* 1.77(黒粘質4/1褐灰枯土ブロック状に入る5/2灰黄褐粘質ブロック状に入る 酸化鉄入る 碟入る 。
 5/1褐灰粘質4/1褐灰砂質ブロック状に大きく入る 酸化鉄入る

SP624 k-k'
1 107R1.7/1黒粘土5/1褐灰砂質まだらに入る 碟入る
2 ~ 5/1褐灰枯土3/1黒褐粘土まだらに入る
3 ~ 1.7/1黒粘質5/2灰黄褐朴質まだらに入る
4 ~ 6/2灰黄褐枯土5/1灰黄褐枯土まだらに入る
5 ~ 1.7/1黒粘土5/2灰黄褐枯土まだらに入る
6 ~ 1.7/1黒粘土4/4褐粘土少々まだらに入る

 SP625 I-I'
 1
 10YR1.7/1黒粘質
 3/1黒褐粘質ブロック状に入る5/2灰黄褐砂質ブロック状に入る

 SP626 m-m′
 n-m′

 1 10YR4/1褐灰砂質1.7/1黒粘質まだらに入る 碟入る

 2 ッ 5/2灰黄褐砂質1.7/1黒粘質プロック状に一部入る

 3 ッ 2/1黒粘質 碟まじる4/1褐灰粘質帯状に入る3/1黒褐粘土ブロック状に入る 小石入る 碟入る

 4 ッ 1.7/1黒粘土4/1褐灰粘質ボヴェレス。

鉄入る 小石入る 礫入る

\$P627 n-n'
1 10YR5/1褐灰枯質1.7/1黒粘質小さく斑点状に入る 酸化鉄入る 碟入る
2 ~ 5/2床黄褐粘質3/1黒褐粘質まだらに入る 酸化鉄入る 碟入る
3 ~ 2/1黒粘質1.7/1黒粘質均一に入る5/2灰黄褐砂質プロック状に入る 小石入る 碟入る 1.7/1黒粘質3/1黒褐粘土ブロック状に入る 碟入る

 1.7/1黒粘質4/2灰黄褐粘質大きくブロック状に入る 酸化鉄入る 小石入る 碟 5

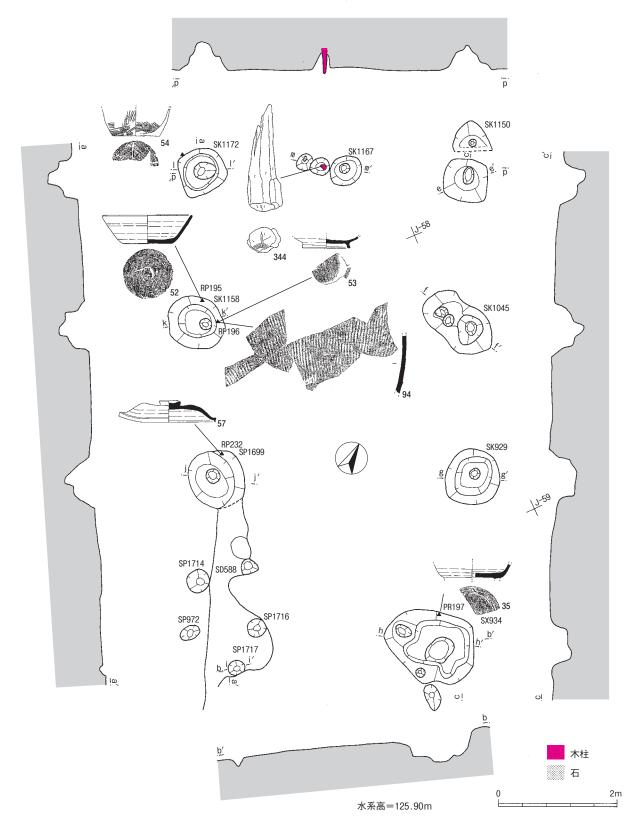
人る 6 \* 1.7/1黒粘質 粗砂まじる2/1黒粘質均一に少々まじる 礫入る

6 ~ 1.7/1点·柏田 相野まじる2/1点·柏田 4.9 (1.9 〜 3.1 (1.8 〜 4.1 ⊸ 4.1 〜 4.1 ⊸ 4.

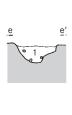
# 第39図 第3次SB24建物跡(2)

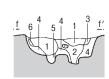
坏、土師器甕、横瓶などがある。一部には須恵器坏に墨書を施した墨書土器も出土している。 **第 53 図に提示した遺構は、F−53 グリッド付近で検出された。これは、SX 1289 遺構の底** 面に営まれたものであり、分析が行われている。これによれば、「樹皮もしくは草本植物から なる編み物状の製品」ということである。この遺構からは、湧水が見られたため、一つの可能 性としては、井戸の底部で泥などの不純物を濾過する敷物などの可能性があろう。この周囲か らは、須恵器甕・坏、横瓶、円面硯、土師器甕・坏などが集中して出土している。

S X 298 遺構 第3次S X 298 遺構 (第54 図) 調査区の北側に位置する、H~I — 53 グリッドで検出された。 平面形は不整形を呈する。全体プランの平面形は、H~J―53 ~56 グリッドまで連続する、 SD1508の一部をなすのもであろうと考えられる。

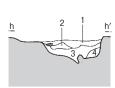


第40回 第3次SB25建物跡遺物出土状況(1)



















水系高(e~h, j~m)=125.90m (i)=126.00m

## SK1150 e-e

10YR1.7/1黒粘土4/2灰黄褐粘土ブロック状に入る 礫入る 酸化鉄入る

- 1 10YR1.7/1黒粘質5/1褐灰粘質ブロック状に入る3/2黒褐粘質ブロック状に入る 小

- 4/1褐灰粘土2/1黒粘土小さく斑点状に入る 小石入る 酸化鉄入る3/1黒褐粘質1.7/1黒粘土ブロック状に入る 小石入る 酸化鉄入る

- SK929 g-g' 2.51522赔灰黄細砂3/1黒褐粘質プロック状に大きく入る1.7/1黒粘質帯状に入る 酸
- 2.155/2町) 大瀬州砂3/1黒褐粘質プロック状に大きく入る1.7/1黒粘質帯状に入る 酸化鉄入る
   10TR1.7/1黒粘質 酸化鉄少々入る 礫入る
   3/1黒褐砂質 粗砂まじる1.7/1黒粘質プロック状に入る4/1褐灰粘土プロック状に入る 3/1黒褐粉質 担砂まじる1.7/1黒粘質プロック状に入る4/1褐灰粘土プロック状に入る 4 4/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘質プロック状に入る1.7/1黒粘質帯状に入る 3/1黒褐粘質1.7/1黒粘土まだらに入る6/3にぶい黄橙ブロック状に入る 深入る 4/1褐灰細砂4/2灰黄褐砂質上部に均一に入る3/1黒褐粘土プロック状に入る 酸化よる
- 化鉄入る 7 / 4/1褐灰砂質4/1褐灰粘質ブロック状に入る1.7/1黒粘土斑点状に小さく入る 酸
- 化鉄人る \*\* 4/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘質ブロック状に入る1.7/1黒粘土斑点状に入る 酸化鉄 入る

# S01717 i-i'

- 301/17 |-1 107R1.7/1黒粘質 礫入る 2 / 5/2灰黄褐粘質1.7/1黒粘質まだらに入る 酸化鉄入る 2 / 1黒粘質 礫入る 2/1黒粘質 礫入る

# SK1158 k-k'

- 3 / 3/1黒褐色粘質シルトと2/2黒褐色シルトがまだらにまじる 2 / 3/1黒褐色粘質シルトに2.573/2砂質シルトがまじる 3 / 3/1黒褐色砂質シルト

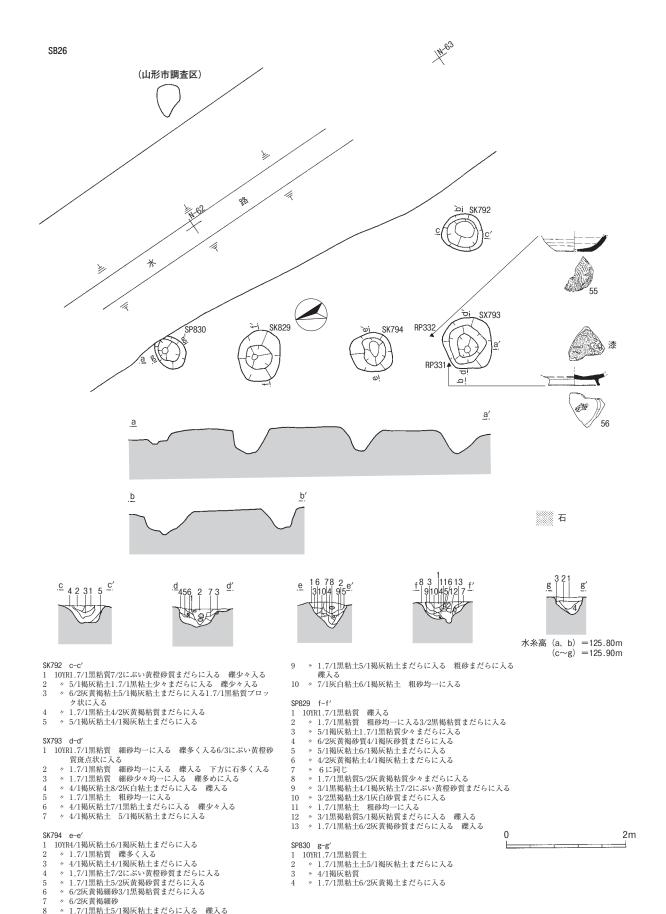
- SK1172 |-|' 1 10YR1.7/1黒粘質6/3にぶい黄橙ブロック状に入る 礫入る 小石入る 炭化物少々
- 入る 2 \* 2/1黒粘質5/1褐灰粘土ブロック状に入る1.7/1黒粘土ブロック状に入る 礫入る
- 酸化鉄入る 。 3/1黒褐粘質 粗砂まじる2/1黒粘質まだらに入る 小石入る 礫入る 酸化鉄

- 0 ~ 3/1個の細胞シ1出和工人さくプロックがに入 7 ~ 3/1黒褐粘土 酸化鉄入る 8 ~ 4/1個反砂質 酸化鉄入る 9 ~ 4/1個反粘質 10 ~ 1.7/1黒粘土 粗砂少々まじる 酸化鉄入る

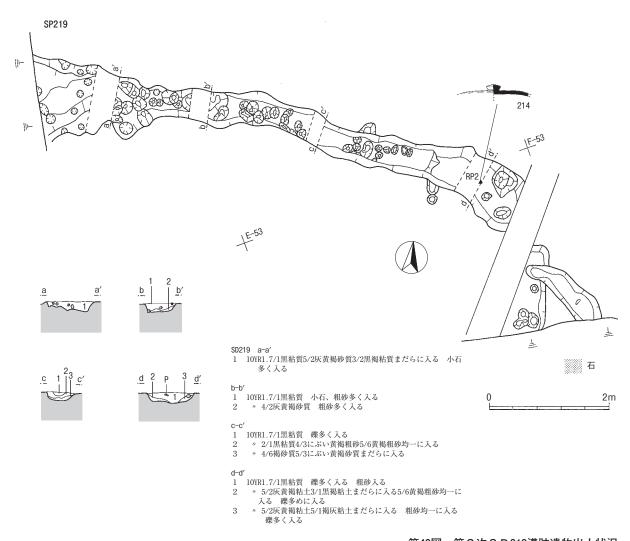
- SK1167 m-m′ 1 10VR5/2灰黄褐粘質3/1黒褐粘土まだらに入る 2 〃 1.7/1黒粘土3/1黒褐粘土まだらに入る

2m

第41図 第3次SB25建物跡遺物出土状況(2)

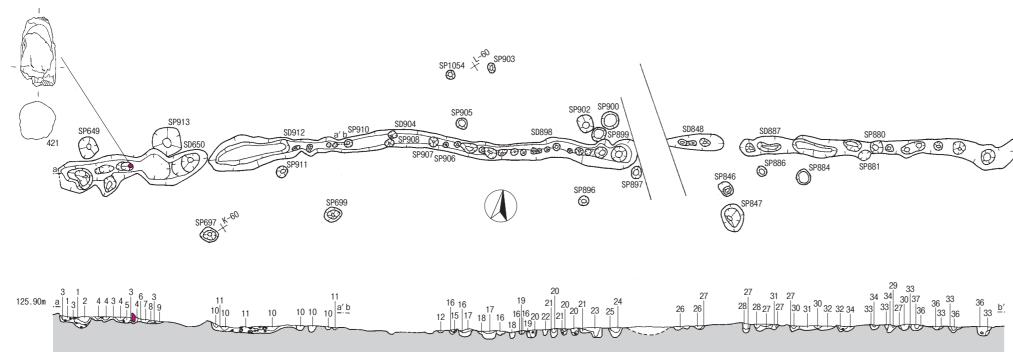


第42図 第3次SB26建物跡遺物出土状況



第43図 第3次SD219溝跡遺物出土状況

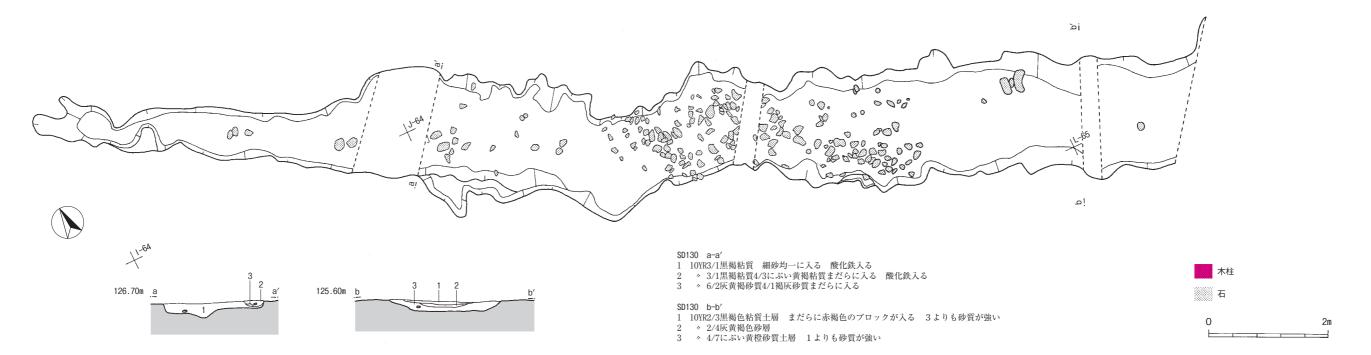




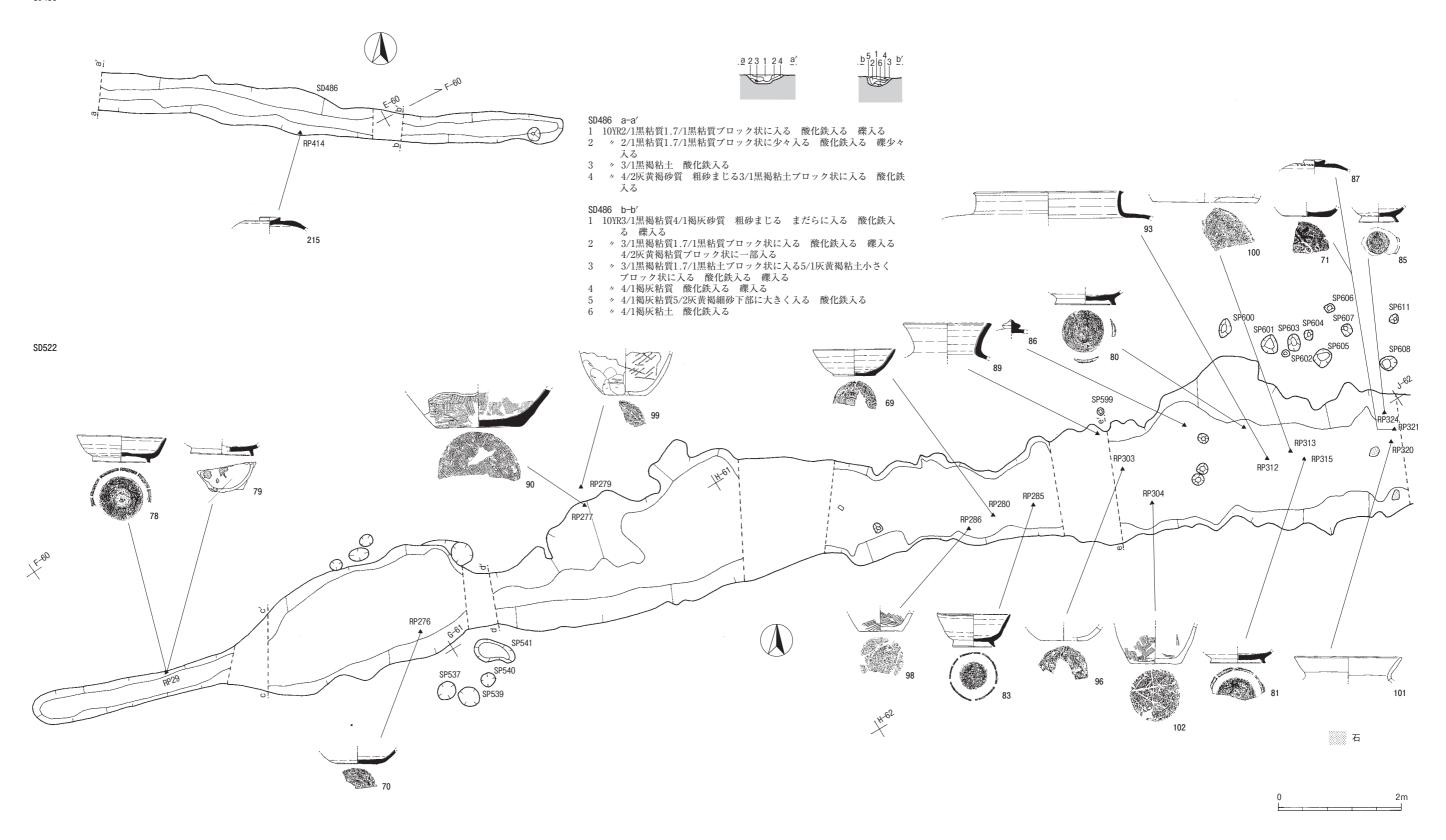
S D 650 a-a' b-b' 1 10YR2/1黒粘土4/1褐灰砂質均一に入る 礫少々入る4/1褐灰粘土均一に入る 2 〃 1.7/1黒褐質粗砂まじる 〃 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る っパンパ 典物細砂 阪に鉄入る
 1.7/1黒粘質2/1黒粘土小さくブロック状に入る 礫入る
 2/1黒粘質 粗砂まじる5/2灰黄褐細砂下方に入る 酸化鉄入る 礫入る
 1.7/1黒粘質 小石入る 礫入る
 3/1黒褐粘質 粗砂まじる5/2灰黄褐少々入る 小石入る 礫入る 〃 4/2灰黄褐砂質 粗砂まじる 酸化鉄入る 10 11 12 13 / 1.7/1黒粘土 礫入る 酸化鉄入る \*\* 1.771無和工 味入る 嵌上鉄入る 3.72黒褐粘土 粗砂まじる \*\* 3.71黒褐砂質粗砂まじる 酸化鉄入る 礫入る \*\* 1.771黒粘質 礫少々入る 酸化鉄少々入る \*\* 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る 14 15 16 17 〃 1.7/1黒粘質 礫少々まじる3/1黒褐粘土ブロック状に入る 酸化鉄入る 礫 18 19 20 〃 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る 22 \* 3/2所頃間和19 版化鉄入る 22 \* 1.7/1黒粘土 5/2灰黄褐細砂小さく斑点状に入る 23 \* 2/1黒粘土 酸化鉄入る 24 \* 5に同じ 小石多く入る 25 \* 3/1黒褐粘土5/2灰黄褐細砂ブロック状に一部入る 酸化鉄入る 〃 1.7/1黒粘質6/2灰黄褐細砂上部にブロック状に入る5/2灰黄褐細砂下部に少々 入る 酸化鉄入る <sup>1</sup> 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る 27 28 29 30 〃 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る 34 35 36 37 v 1.7/1黒粘質2/1黒粘質均一に入る 礫入る 3/1黒褐粘質 小石入る 礫入る1.7/1黒粘土 礫まじる 小石入る

〃 4/1褐灰粘土 礫少々入る

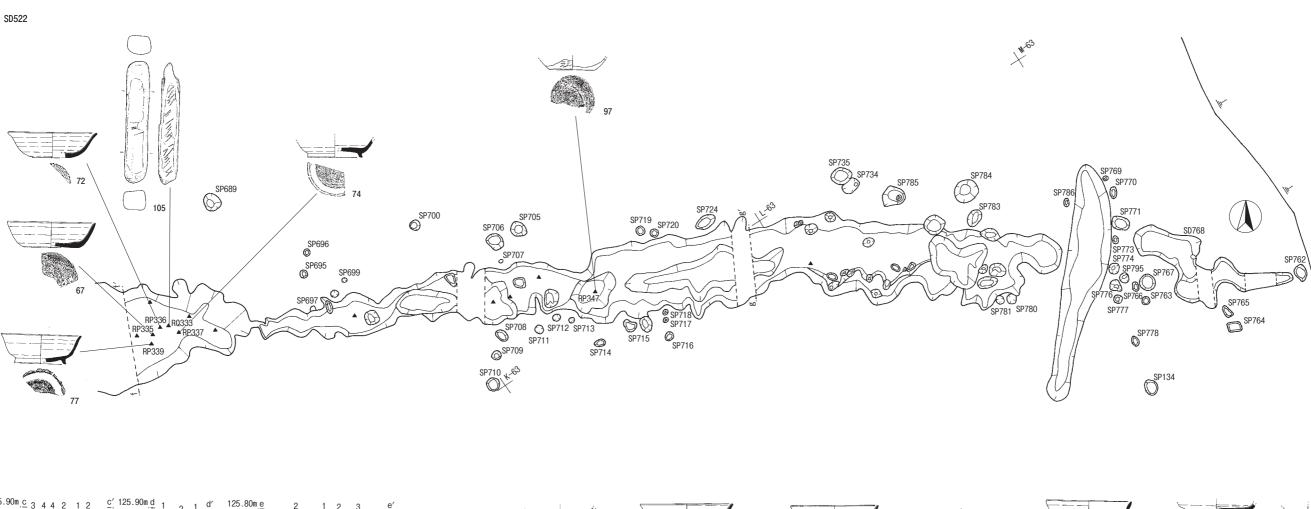
SD130

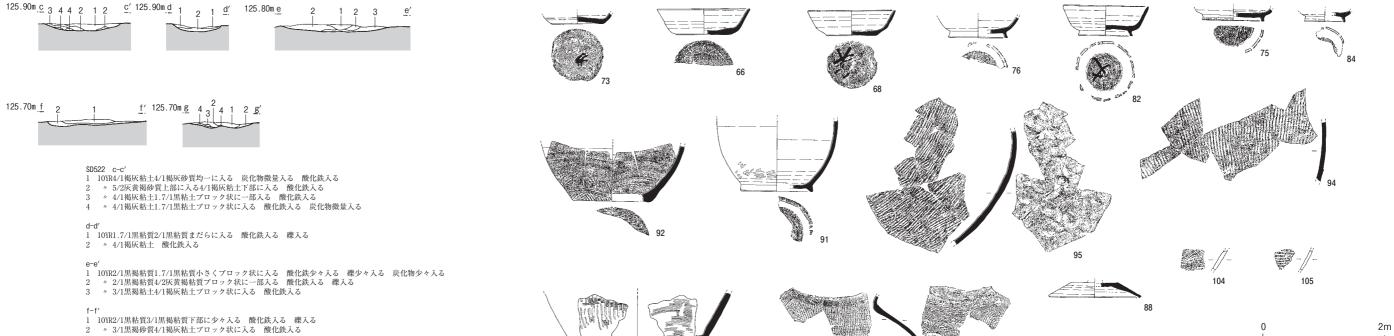


第44図 第3次SD130·SD650溝跡遺物出土状況



第45図 第3次SD486・SD522(1)溝跡遺物出土状況





 8-8′

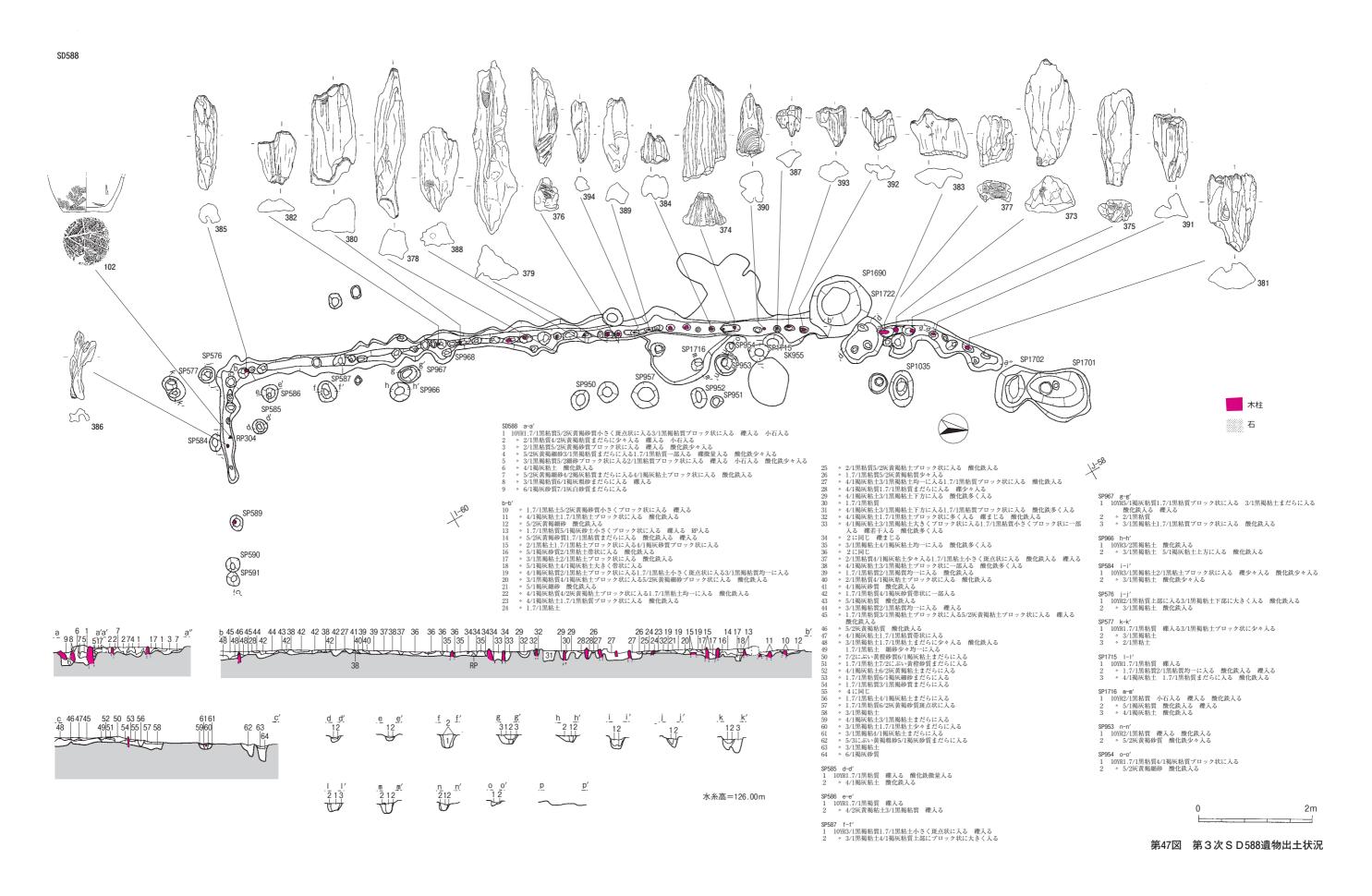
 1 10YR1.7/1黒粘質2/1黒粘質均一に入る 酸化鉄入る 礫入る 炭化物入る

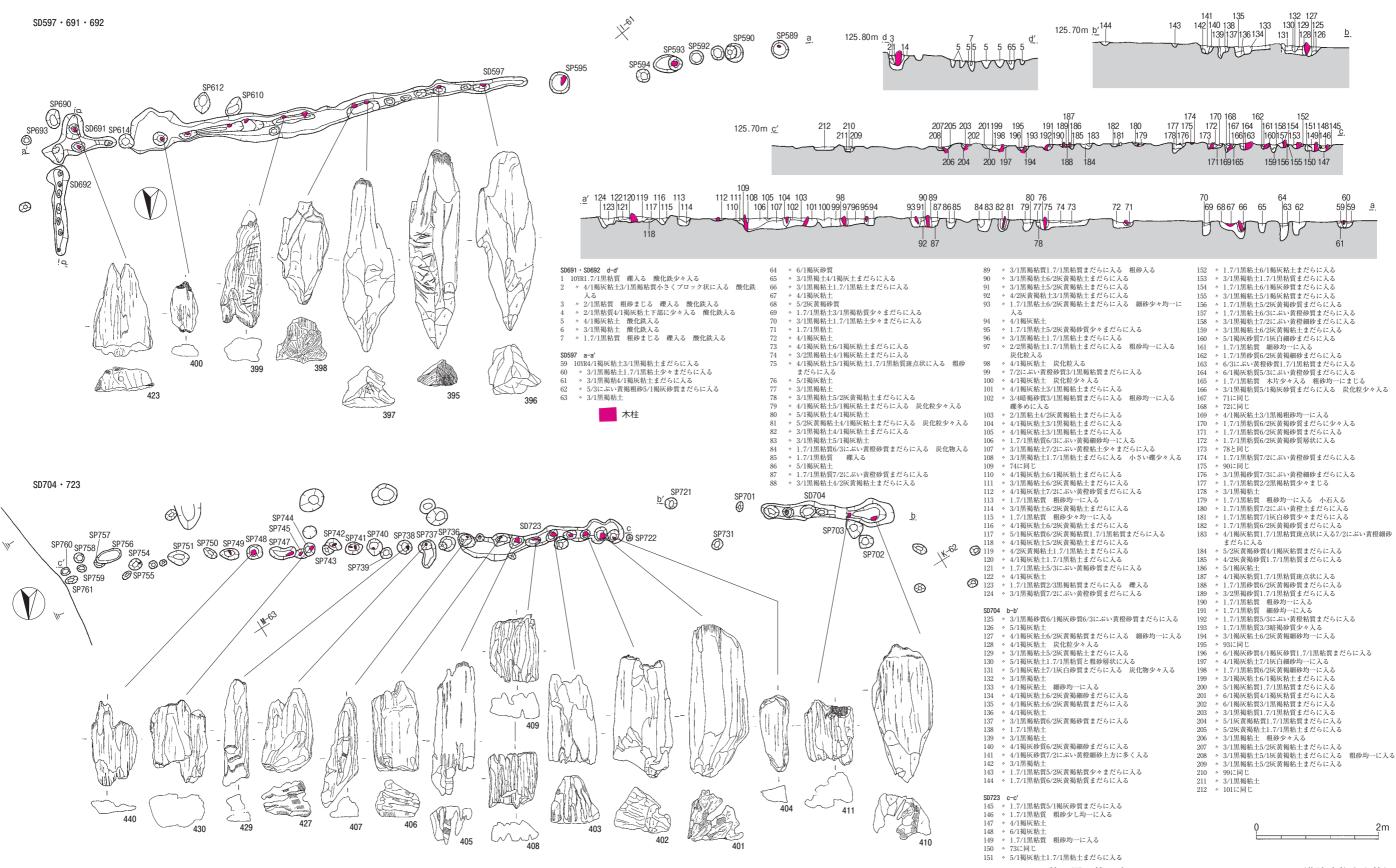
 2 ク 2/1黒粘質3/1褐灰粘質ブロック状に入る 酸化鉄入る 礫入る

 3 ク 4/1褐灰粘土 酸化鉄入る

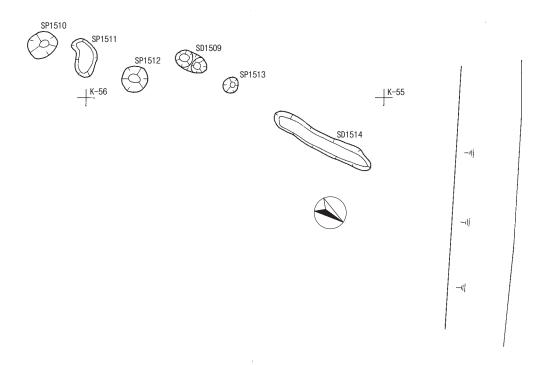
 4 ク 5/2灰黄褐細砂 酸化鉄入る

第46図 第3次SD522溝跡遺物出土状況(2)

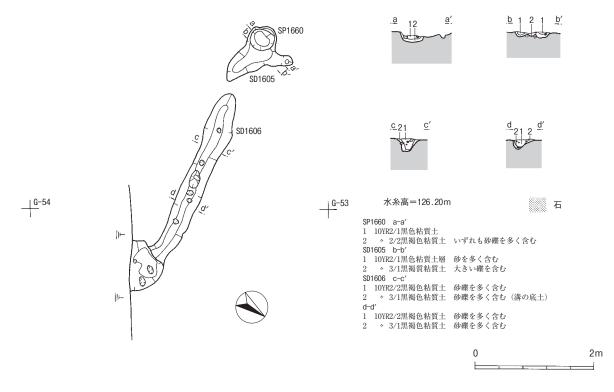




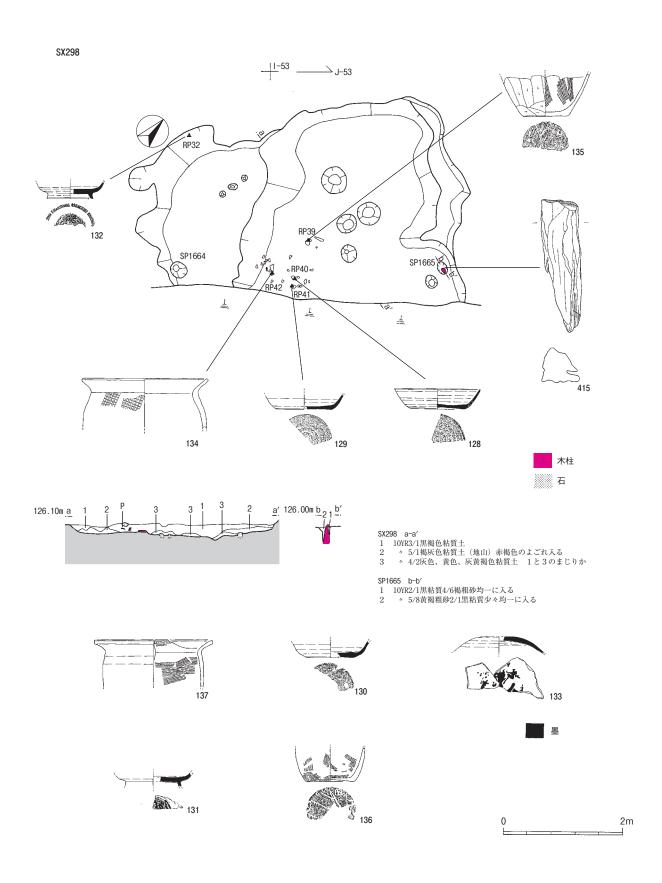
第48図 第3次SD597·691·692·SD704·723溝跡遺物出土状況



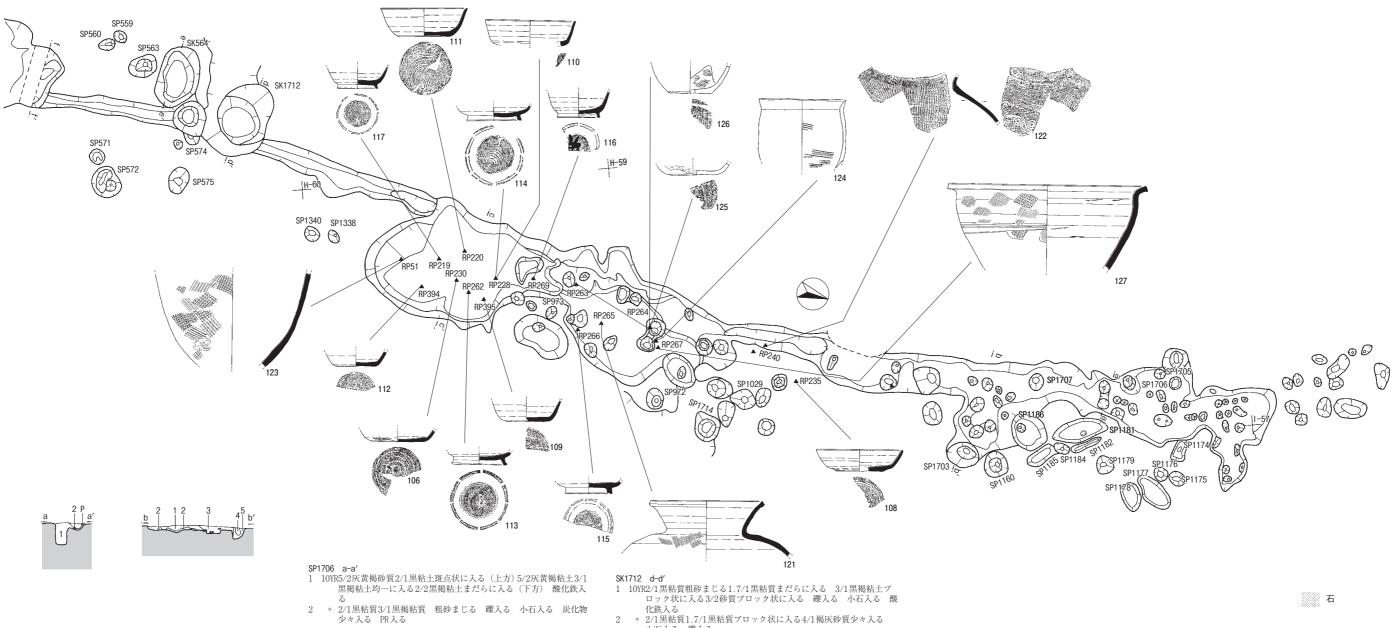
SD1605 · 1606



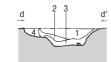
第49図 第3次SD1509~1514·SD1605·1606溝跡

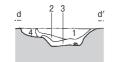


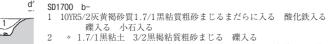
第50図 第3次SX298遺物出土状況











・ 5/2灰黄褐細砂1.7/1黒粘土ブロック状に入る2/1黒粘質上部に帯状に入る 酸化鉄入る 礫入る 小石入る

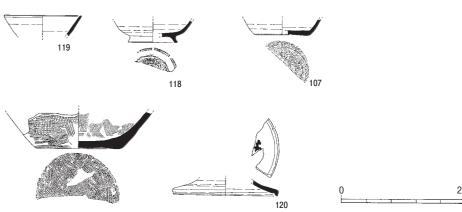
SD1700 c-c'

- 1 10YR4/1褐灰粘質5/1褐灰粘質まだらに入る 2 \* 1.7/1黒粘質2/2黒褐粘質まだらに入る 細砂、礫均一に入る 3 \* 1.7/1黒粘質3/2黒褐粘質まだらに入る
- 4 〃 1.7/1 〃 5/2灰黄褐粘質まだらに入る 礫少々入る 須恵器入
- 5 / 4/1褐灰粘土5/2灰黄褐粘土1.7/1黒粘土まだらに入る 礫少々入
- 6 / 4/1褐灰粘土4/6褐粘土まだらに入る 7 / 3/1黒褐粘質5/1褐灰粘質まだらに入る
- 8 / 3/1 / 粘土6/4にぶい黄橙砂質まだらに入る

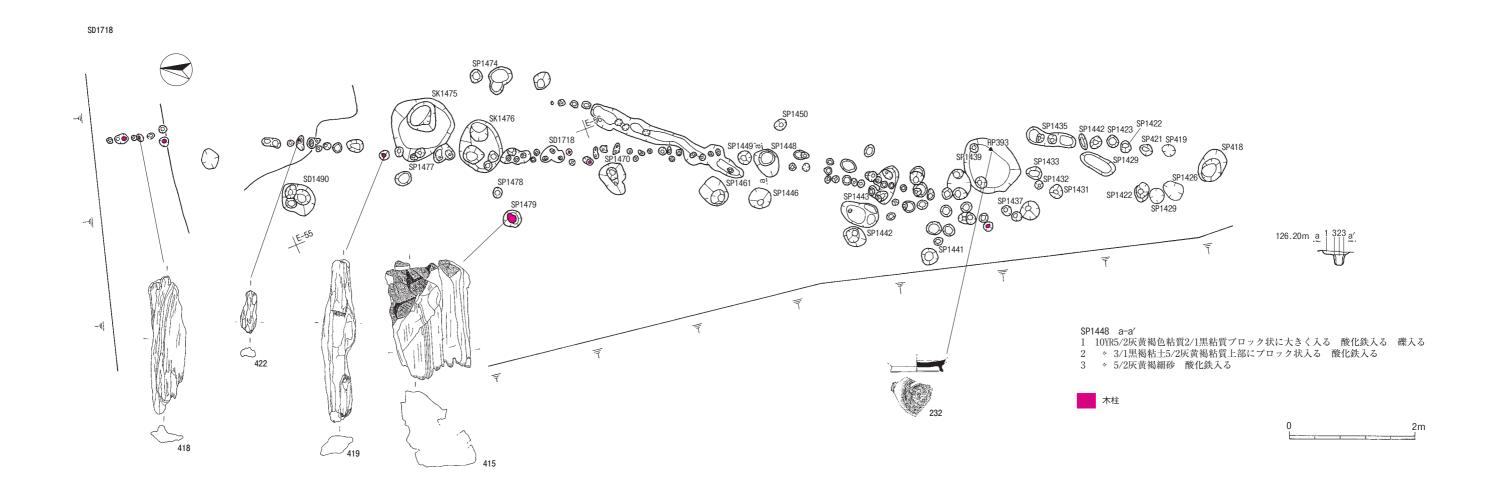
- 7-11人の 株人の 2/1黒粘質4/1褐灰粘土ブロック状に少々入る 4 % 4/1褐灰粘質1.7/1黒粘質まだらに入る4/1褐灰粘土ブロック状に 入る 礫入る 酸化鉄入る

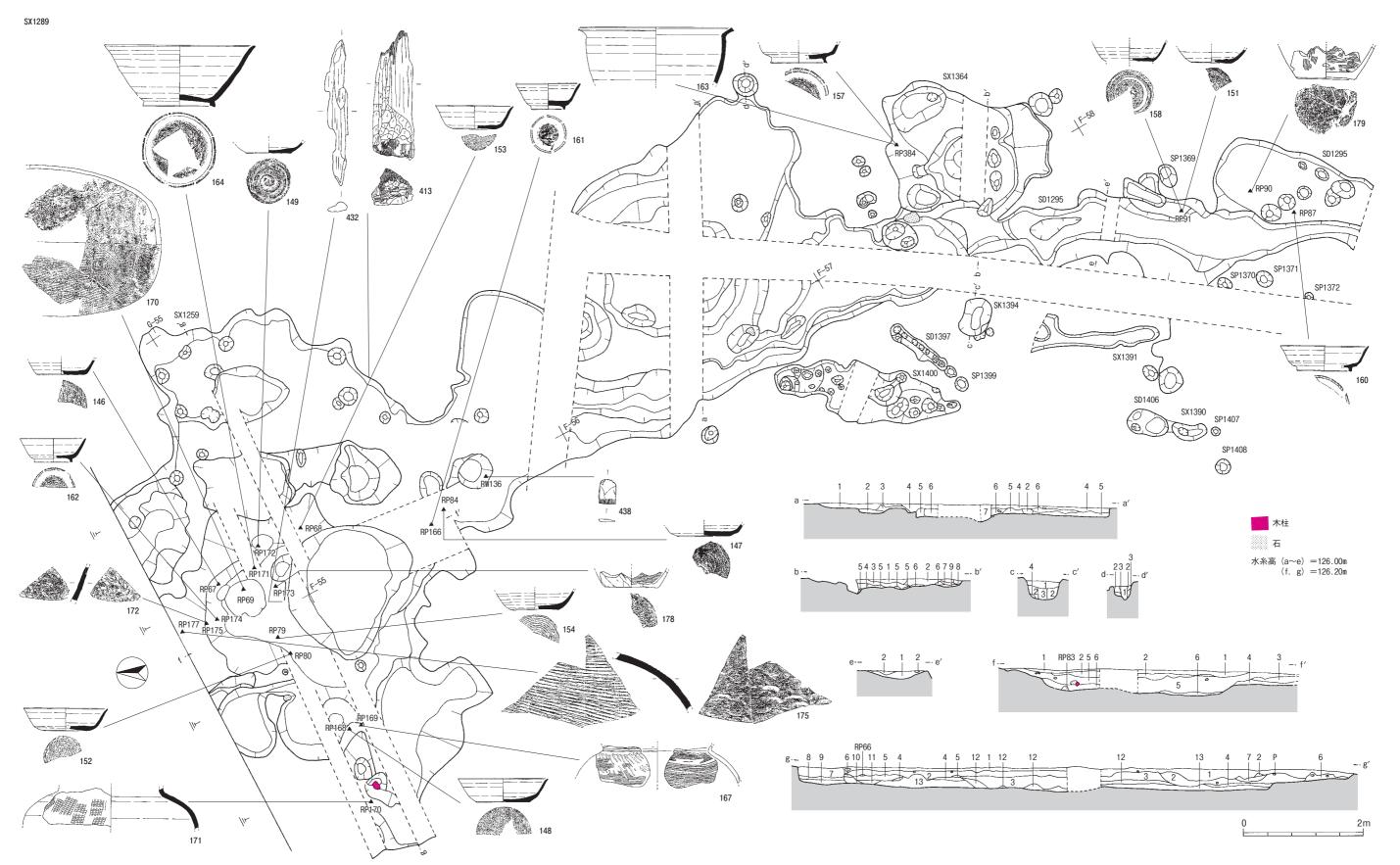
- SK564 e-e'1 10YR3/1褐灰砂質1.7/1黒粘質小さくブロック状に入る 4/2灰黄褐ブロック状に入る 礫入る 酸化鉄入る
- 2 \* 4/1 楊灰粘土3/1 黒褐砂質ブロック状に入る 碟入る 酸化鉄入る 3 \* 3/1 黒褐粘土4/2灰黄褐粘土少々入る 酸化鉄入る

- 1 10YR2/1黒粘質1.7/1黒粘質小さく斑点状に入る 礫入る 酸化鉄入る
- 2/1黒粘質3/1黒褐粘土大きく帯状に入る 5/3にぶい黄褐上方に
- プロック状に入る 礫入る PP入る 酸化鉄入る 3 \* 1.7/1黒粘質3/2黒褐粘土プロック状に入る 礫少々入る 酸化鉄
- 入る 4 % 3/1黒褐粘土 酸化鉄入る 礫微量入る

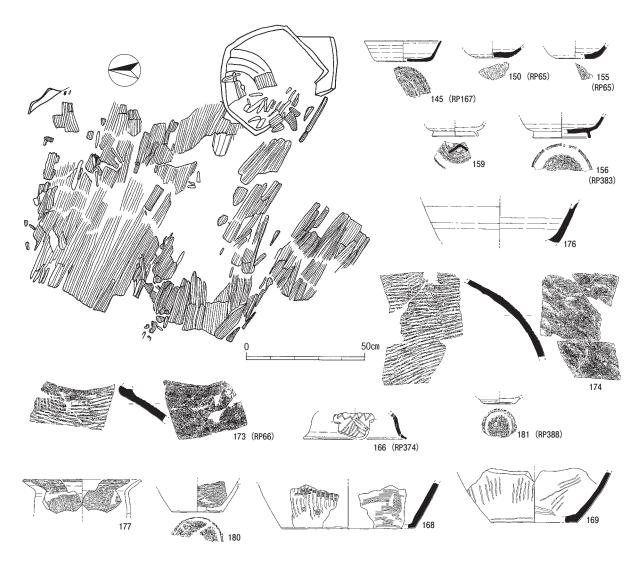


第51図 第3次SD1700溝跡遺物出土状況





第53図 第3次SX1289遺物出土状況(1)



- SX1289 a-a′ 1 10YR2/1黒粘質5/2灰黄褐粘土下部に均一に入る5/1褐灰細砂ブロック状に一部入る 酸化
- 化鉄入る
- 1.5%へる 2/1黒粘質1.7/1黒粘質小さくブロック状に入る4/1褐灰砂質ブロック状に一部入る 酸化鉄入る 。 3/1黒褐粘質1.7/1黒粘質ブロック状に入る4/1褐灰砂質ブロック状に一部入る 酸化
- 鉄入る

  \* 1.7/1黒粘土5/2灰黄褐細砂ブロック状に入る 酸化鉄入る

  \* 2/1黒粘土5/2灰黄褐粘土ブロック状に入る1.7/1黒砂質まだらに入る 酸化鉄入る 碟入る

- SX1364 b-b′ 1 10YR2/1黒粘質1.7/1黒粘質ブロック状に入る2/1黒粘土均一に入る 酸化鉄入る 礫少々
- 入る 2 ~ 2/1黒粘質1.7/1黒粘質均一に入る5/2灰黄褐粘質ブロック状に入る 酸化鉄入る 礫

- タ々入る

  2/1黒粘土3/1黒褐粘土プロック状に入る 酸化鉄少々入る 標少々入る

  2/1黒粘土3/1黒褐粘土プロック状に入る 酸化鉄少々入る 標少々入る

  1.7/1黒粘土 標まじる 酸化鉄少々入る

  4/1褐灰粘土 酸化鉄入る

  3/1黒褐粘土4/1褐灰粘土プロック状に一部入る1.7/1黒粘土小さく斑点状に入る 酸 化鉄入る
- 化鉄入る ペ 3/2黒褐粘質2/1黒粘質大きくブロック状に入る 酸化鉄入る 碟入る 1.7/1黒粘質 建まじる 2/1黒粘土3/1黒褐粘土均一に入る 酸化鉄入る
- SK1394 c-c
- SK1394 c-c′ 1 10YR1.7/1黒粘土4/1褐灰粘土ブロック状に一部入る 酸化鉄入る 礫少々入る 2 ~ 1.7/1黒粘土4/1褐灰紺砂まだらに少々入る 酸化鉄入る 3 ~ 1.7/1黒粘土 酸化鉄入る 4 ~ 4/1褐灰細砂 酸化鉄入る

- SX1289 d-d'

   1 10YR1.7/1黒粘土 酸化鉄入る 礫少々入る

   2 \*\*2/1黒粘土 礫まじる1.7/1黒粘土プロック状に入る 酸化鉄入る 礫入る

- 4/1褐灰細砂 酸化鉄入る4/1褐灰砂質 粗砂まじる 酸化鉄入る

- SD1295 e-e' 1 10YR3/1黒褐粘土4/1褐灰粘土均一に入る1.7/1黒粘質帯状に一部入る 酸化鉄入る 礫
  - 〃 1.7/1黒粘質2/1黒粘質均一に入る 酸化鉄少々入る 礫入る

### SX1259 f-f'

- 5A1.29 「- 「 1 101R3/2黒褐砂質 粗砂多くまざる5/1褐灰砂質均一に入る 炭化物タ々入る 礫入る 酸化鉄入る 2 ~ 3 (1黒褐粘質 粗砂タ々まじる1.7/1黒粘土まだらに大きく入る 3 2.5Y5/2略灰黄砂質3/1黒褐粘質まだらに入る 1.7/1黒粘土小さく斑点状に入る 酸化鉄

- 入る 4 10YR2/1黒粘質4/2灰黄褐粘質ブロック状に少々入る1.7/1黒粘土ブロック状に入る 酸化
- 鉄入る

  1.7/1黒粘土4/2灰黄褐粘質まだらに少々入る 礫入る

  3/1黒褐粘質4/2灰黄褐粘質まだらに入る 礫入る R P 入る

- | SX1259 g-g' | 1 | 10YR3/2黒褐砂質1.7/1黒粘質まだらに入る | 碟入る | 酸化鉄入る | 2 | ※ 3/2黒褐砂質1.7/1黒粘質まだらに入る | 碟入る | 酸化鉄入る | 3 | ※ 1.7/1黒粘土 | 蝶ごく微量まじる | 酸化鉄少々入る | 3 | /1黒褐粘質2/1黒粘貫まだらに入る | 炭化物少々入る | 酸化鉄少々入る | 2 | /1黒粘質5/2灰黄褐砂質大きくまだらに入る | 炭化物少々入る | 蝶八あ | 酸化鉄入 | ※ 2/1黒粘質5/2灰黄褐砂質大きくまだらに入る | 炭化物少々入る | 蝶八あ | 酸化鉄入 | ※ | 2/1黒粘質5/2灰黄褐砂質大きくまだらに入る | 炭化物少々入る | 蝶八あ | | | | |

- 5/1褐灰砂質3/1黒粘質まだらに入る1.7/1黒粘土小さく入る○ 5/1褐灰砂質4/2灰黄褐砂質均一に入る2/1黒粘質プロック状に入る 礫少々入る 酸 化鉄入る

- 化鉄入る

  2.71里粘土4/1灰褐砂質少々入る 酸化鉄少々入る

  4.74陽火枯質1,7/1里粘土まだらに入る

  3.71里褐砂質1,7/1里粘質小さく斑点状に入る4/2灰黄褐砂質均一に入る 酸化鉄入る

  3.71里褐粉質1,7/1里粘質プロック状に入る7,5YB5/3黄褐土プロック状に入る 砂質、酸化鉄少々入る

  1.7/1里粘土4/2灰黄褐粘質まだらに少々入る3/1里褐土飲量入る 酸化鉄入る

  4.7福灰砂質2/1里粘質小さい斑点状に入る 酸化鉄多く入る

## 第54図 第3次SX1289遺物出土状況(2)

# V 出土した遺物

石田遺跡から出土した遺物について、次に述べることとする。石田遺跡からは、縄文時代中期後半から後期初頭、奈良・平安時代の各時期の遺物が出土した。つぎに出土した各遺物について述べていきたい。

## 縄文時代の遺物 (第4・55~58 図、図版34)

主として 2 次調査区の南区に位置する、 $E \sim I - 25 \sim 38$  グリッドの下層で検出された。遺構としては、埋設土器遺構がある。遺物はまとまりが見えたものの、破片が多かった。

縄文時代中 ・縄文時代中期後半の土器(第55~56図) すべて第2次調査によって出土した遺物である。 期後半の土器 器形としては、深鉢型をなすものと、浅鉢型をなすものがある。文様を隆帯によって構成する ものと、沈線によって構成するものがある。

隆帯を持つもの(2、3、4、5、6、7)は、隆帯によって施された屈曲する文様をおそらく体部上半にもつものであり、区画された内部を斜行縄文によって充填している。5が浅鉢であり、これ以外は全て深鉢である。

沈線によって文様を構成するもの(1、8)は、隆帯による施文を持つものと同様に、屈曲する文様をおそらく体部上半にもつものであろうと思われる。区画された内部を斜行縄文によって充填している。8は浅鉢であり、1は深鉢である。

縄文時代後期前半の土器(第56図) すべて第2次調査によって出土した遺物である。器形期前半の土器 としては、深鉢型を呈するものである(15)。口縁部に4単位のくの字状の装飾を持ち、隆帯と沈線で頸部を区画し、沈線から垂直に蛇行した沈線を走らせる文様を持つ、体部は斜行縄文を施している。

縄文のみで施文された土器がある  $(9 \sim 14)$  が、これらは縄文時代中期後半から後期前半のいずれかの時代に属するものであろうと考えられる。時期的な特定をすることはできなかった。

## ・縄文時代中期後半から後期前半の石器 (第57・58図)

**石鏃** 茎の無い石鏃が一点出土している (17)。最大幅 1.5cm、長さ 2.5cm を計る。厚みは 5 mm ほどである。材質は硬質頁岩であろうと考えられる。

石匙 つまみを作り出した石匙が 3 点出土している (18、19、20)。18 は縦型の石匙である。 現存長 3 cm、厚みは 7 mm であり、下半部を欠損している。19 は横型の石匙である。三角形 状を呈しており、最大幅は 4.7 cm、長さは 4.2 cm、厚みは 0.7 cm を測る。

 である。

磨製石斧 磨製によって成型した石斧が一点出土している (21)、破損しており、刃部付近が 磨 製 石 斧 出土しているに過ない。色調は緑色を呈する。長さは 3.5cm、最大幅は 2.5cm、厚みは 2 cm である。

石皿 石皿が一点出土している (22)、破損しており、外縁部の一部が出土しているに過ぎない。 石皿 現存している長さは 6 cm、最大幅は 2.5 cm、厚みは 1.5 cm である。

**凹石** 磔の安定している面に、幾つかの凹みを施した凹石が数点出土している。ここには、4 凹石 点の凹石をあげた (23 ~ 26)。23 は偏平な礫を利用しており、長さは8 cm、最大幅は3 cm、厚みは1.5 cm である。24 は丸みが強い円礫を利用しており、長さは3.5 cm、最大幅は4 cm、厚みは3 cm である。25 は偏平な礫を利用しており、長さは7.5 cm、最大幅は4.0 cm、厚みは1 cm である。26 はやや偏平な礫を利用しており、長さは6 cm、最大幅は3.5 cm、厚みは1.7 cm である。

## 2 弥牛時代の遺物 (第64・73・74 図、図版 40)

混入ではあろうが少量弥生時代の土器が出土している。SD522から、縄文の施された土器片(104)、まばらな縄文が施された土器片(103)が出土している。第3次調査のその他のSD・SPとした遺構からも、弥生式土器が出土している(228、229、236)、弥生式土器は、表面に斜行縄文を施したものと、撚糸圧痕により、幾何学的な文様を構成するものがあり、恐らく天王山式に併行する土器であろうと思われる。個体数はおそらく2ないし3個体であると考えられ少ない。いずれも深鉢型の器形をなすものであろうと思われる。

## 3 奈良・平安時代の遺物 (第59~91 図、図版 27~33・35~42)

奈良・平安時代の遺物は、主として第3次調査区から出土した。出土遺物は、須恵器甕・横瓶・ 坏・円面硯、土師器甕・坏、木簡、木柱、礎板などがある。この中で注目すべきことは、第3 次調査区には柱材を中心として、木材が大量に遺存していたことである。この木材についても 分析をおこなった(巻末付編参照)。

奈良・平安時代の遺物として第2次調査で出土したものは、蓋(第56図—16)があるに過ない。溝などの遺構は第2次調査区にも存在したが、柱穴などは遺構として組むことができなかった。奈良・平安時代の遺物が得られたのは、第3次調査区を中心とした部分であり、奈良・平安時代の中心は、第3次調査区にあったことになる。

遺物の記述は、包含層出土遺物について行う。遺構毎の出土遺物については、なるべくまと まるように記述を行うこととする。なお、遺構毎の出土遺物は、その遺構を構成すると考えら れる、柱穴や土坑などから出土したものを、その遺構の出土遺物と把らえている。

### ・掘立柱建物跡に伴う遺物

第3次SB5建物跡(第59図、第12図) 調査区の南区に位置する3間×2間の掘立柱建物 SB5建物跡

跡である。出土遺物としては、掘り方に伴って土師器底部が出土している (30)。

- SB9建物跡 第3次SB9建物跡 (第59図、第16・17図) 調査区の西側に位置する3間×2間の掘立柱 建物跡である。出土遺物としては掘り方に伴って、須恵器甕 (29)、坏 (27) がある。礎板と 考えられる板が、柱穴の底面に残されていた (319~325)。
- SB14建物跡 第3次SB14建物跡 (第59図、第24図) 調査区の東側に位置する3間×2間の掘立柱建物跡である。SB15と建て替えの関係が窺える。掘り方に伴って、須恵器蓋 (28) が出土している。
- SB15建物跡 第3次SB15建物跡 (第59図、第25図) 調査区の東側に位置する3間×2間の掘立柱建物跡である。SB14と建て替えの関係が窺える。掘り方に伴って、土師器内黒坏 (33) がある。
- SB16建物跡 第3次SB16建物跡 (第59図、第26図) 調査区の西側に位置する2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。掘り方に伴って、須恵器坏 (31) がある。
- SB17建物跡 第3次SB17建物跡 (第60・61 図、第27・28・29 図) 調査区の中央に位置する。石田遺跡で確認された建物のうち最大の規模を持つ建物である。やや不明確ながらも、5間×3間の掘立柱建物跡である。SB18・19掘立柱建物跡と建て替えの関係を見せている。 出土遺物としては、柱穴の掘り方底面から礎板、掘り方に伴って、須恵器甕(44、47)・坏(38

□工度物としては、程代の編りが展開がり旋板、編りがに伴りて、預念都差(44、47)が(36~41、55、58~61)・蓋(43)、長頸瓶(42)、土師器甕(45、46、48、51、61~65)、小型壺(49、50)などが出土している。38は静止糸切の底部切り離しを持つ須恵器坏であり、山形盆地での出土例は非常に少ない。43は須恵器蓋であるが、墨書が施されている。58~60の須恵器坏の底部切り離しは糸切であるが、その後に、底部中央部を残してヘラによる調整を行っている。65は頸部でくびれる土師器甕である。おそらく胴部は丸くなるのものと考えられる。

- SB22建物跡 第3次SB22建物跡 (第59図、第35図) 調査区の中央部に位置する2間×2間の掘立柱 建物跡であろうと考えられる。おそらく建て替えが行われたものであろうと思われる。出土遺 物としては、柱材、須恵器甕 (37)・坏 (32)、土師器甕 (34) がある。
- SB23 建物跡 第3次SB23 建物跡 (第59 図、第36・37 図) 調査区の中央部に位置する3間×2間の掘立柱建物跡である。出土遺物は須恵器坏 (35、36) がある。
- SB25建物跡 第3次SB25建物跡 (第61 図、第40・41 図) 調査区の中央に位置している。出土遺物と しては、掘り方に伴って、須恵器坏 (52、53)・蓋 (57)、土師器甕 (54) がある。須恵器坏の 底部切り離しは、いずれもヘラ切りである。
- SB26建物跡 第3次SB26建物跡 (第61図、第42図) 調査区の東側に位置している。出土遺物としては、掘り方に伴って、須恵器坏 (55、56) がある。このうち、56は高台付の須恵器坏である。内外面に漆の付着痕跡があり、漆塗りの際に使用するパレットとして転用されたものと考えられる。この遺跡で漆塗りの工房が営まれていたことが窺える。

## ・溝跡出土の遺物

S D 522 溝跡 第3次SD 522 溝跡 (第62~64 図、第45・46 図) 調査区の南区に位置する、SA1・2 柵列に平行する溝跡である。墨書土器が多量に存在し、SA1・2 柵列の南側出入り口と考えられる部分付近で出土している。出土遺物としては、須恵器甕 (89、90、92~95)・坏 (66~85)・蓋 (86~88)、土師器内黒杯 (96、97)・甕 (98~102)、砥石 (105)、弥生式土器 (103、

104) などがある。

須恵器坏の底部切り離しは、糸切とヘラ切り離しの両者がある。墨書が両者に共通することからすれば、時間差はないものと考えておきたい。また、高台の付くものと付かないものとがある。墨書は68、71、73、78、80、81、82、に認められる。「 井万 」「 丈 」 などがあるが、「 井万 」 が多い。79 は炭化物の付着した須恵器である。

第3次SD 1700 溝跡(第65・66 図、第50 図) SA1 柵列の西辺に平行する溝跡である。調 SD 1700 溝跡 査区の中央に位置する、出土遺物としては、須恵器甕(121 ~ 123、127)・坏(106 ~ 118)・蓋(120)、 土師器甕(124)、内黒土器(125、126)がある。須恵器坏の底部切り離しは、糸切とヘラ切り離しの両者がある。116 にはおそらく廾万の墨書が残る。

第3次S X 298 遺構 (第67 図、第54 図) 調査区の北側中央に位置している。本来は、S D S X 298 遺構 D1508と一体になるものであろう。出土遺物としては、須恵器甕 (134)・坏 (128~132)・蓋 (133)、土師器甕 (135~137) がある。131 の須恵器坏は墨書を持つが内容は不明である。133 の須恵器蓋は、墨痕があり、硯として転用されたものと考えられる。土師器甕の底部には木葉痕が残る。137、135 は長胴甕、136 は小型壷の可能性が高い。

第3次SD 1508 溝跡 (第67 図) 調査区の中央に位置している。本来はSX 298 と一体にな SD 1508 遺構るものと思われるが、調査区の中央をながれる水路によって二分されている。出土遺物としては、須恵器甕 (144)・坏 (138 ~ 141、143)・蓋 (142) がある。

第3次S X 1289 遺構 (第68~71 図、第52・53 図) 調査区の北側に位置する、平面形は S X 1289 遺構 不整形を呈する遺構である。出土遺物としては、須恵器甕 (167、168、169、171~176)・坏 (145~150、152~157、159、161、162)・鉢 (164、165)・円面硯 (166)、横瓶 (170)、土師器甕 (177、178、180)、坏 (181) などがある。一部には須恵器坏に墨書を施した墨書土器 (147、159、161)も出土している。161の墨書は「足山」と判読することができる。166の円面硯は、脚部に重層する山形の線刻を持ち、脚部の上面には横位に連続した山形線刻を施している。透かしが6単位程度巡るものであろう。170は横瓶であるが、石田遺跡である程度復元が可能であったのは、この個体だけである。

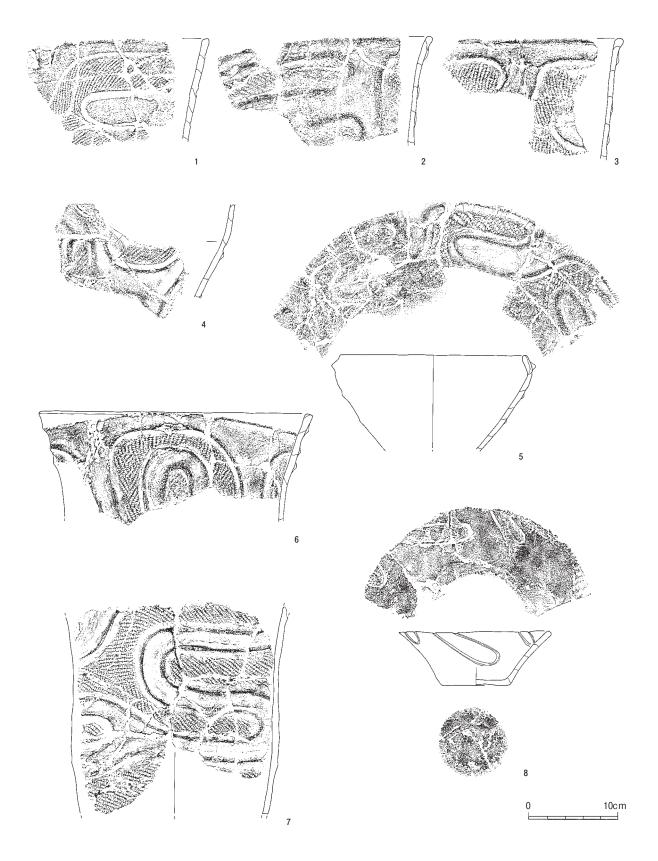
遺物は遺構全体から出土しているが、とくに敷物遺構の周囲には多かった。周囲からは、須 恵器甕・坏、横瓶、円面硯、土師器甕・坏などが集中して出土している。

第3次SD 1295 溝跡(第68・71 図) 調査区の西側にある溝跡である。出土遺物としては、 SD 1295 溝跡 須恵器坏(151、158、160)、土師器甕(179)がある。

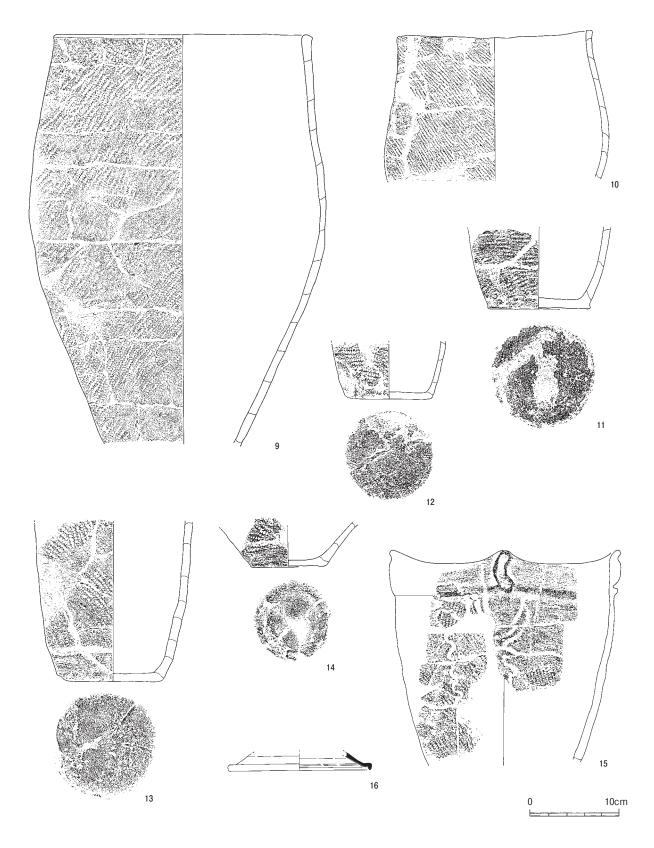
第3次SX 1364 遺構(第69 図) 調査区の西側にある土坑状の遺構である。SD 1295 と近 SX 1364 遺構接している。出土遺物としては、須恵器甕 (163) がある。

第3次S X 1558 遺構 (第71 図) 調査区の東側にある土坑状の遺構である。S B 10 と近接 S X 1558 遺構 している。出土遺物としては、須恵器坏 (182、183)・耳杯 (184)、土師器坏 (181)・堝 (185) がある。

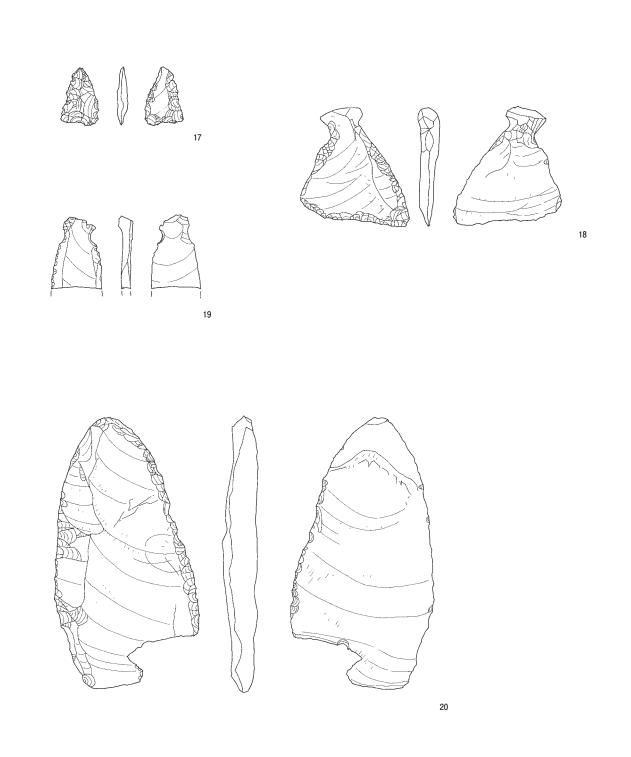
第3次その他のS X 遺構(第72 図) 正確不明遺構から、少量のみの出土しかない遺構の遺 そ の 他 の 物を一括して提示した。出土遺物としては、須恵器甕 (201)・坏 (186 ~ 194)・耳坏 (196)・ s x 遺 構 蓋 (195、197、198)・長頸瓶 (199)、土師器甕 (202、203)・堝 (200)・小型壷 (204、205)・ 坏 (206、207) がある。191 の須恵器坏と 198 の須恵器蓋には墨書がある。蓋の墨書は「卅万」



第55図 第2次出土遺物(1)

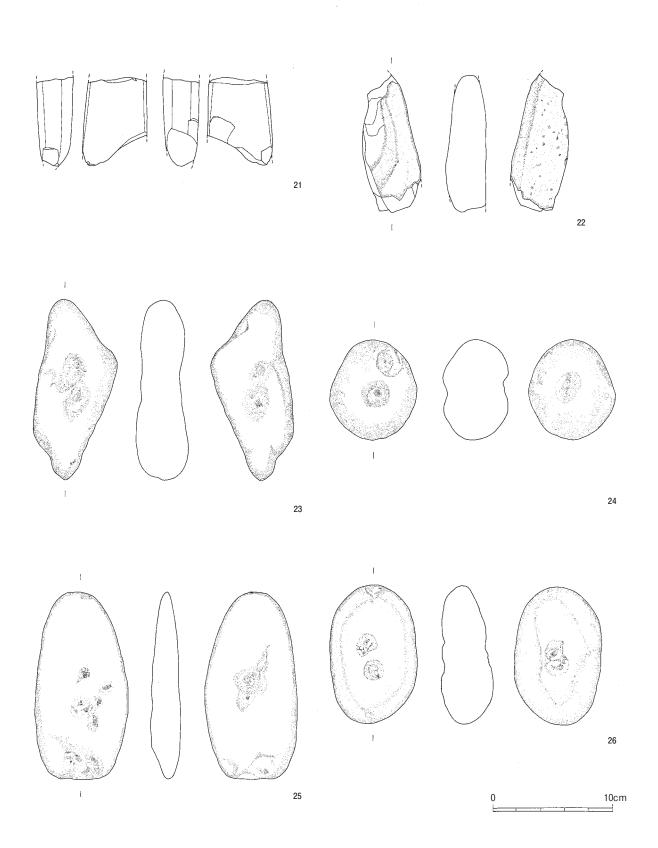


第56図 第2次出土遺物(2)

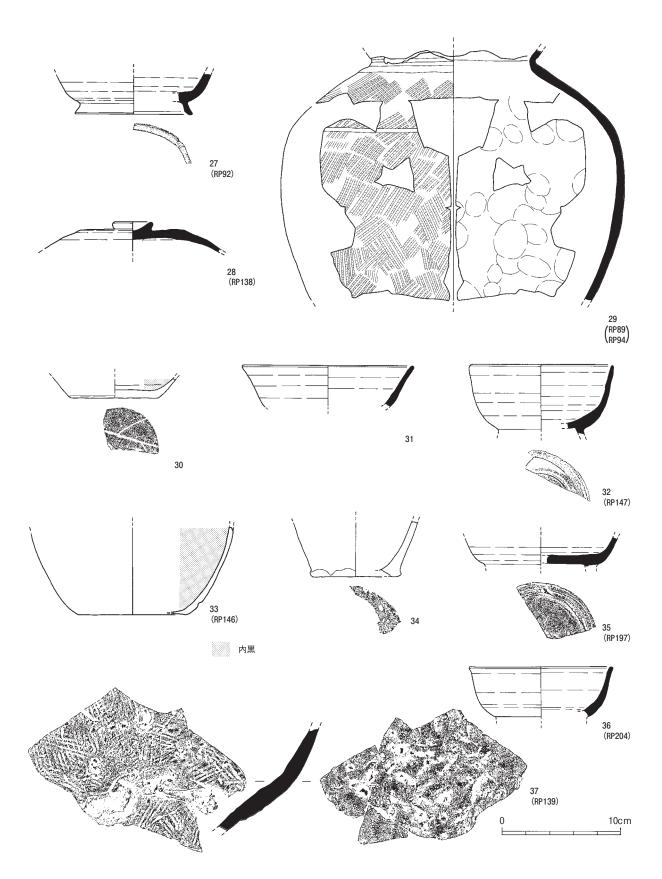


第57図 第2次出土遺物(3)

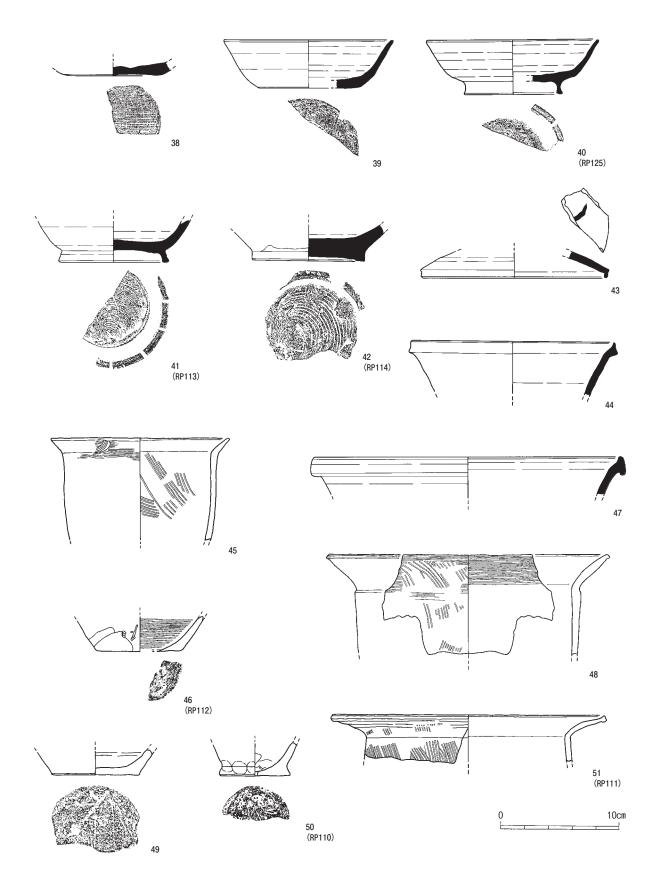
5cm



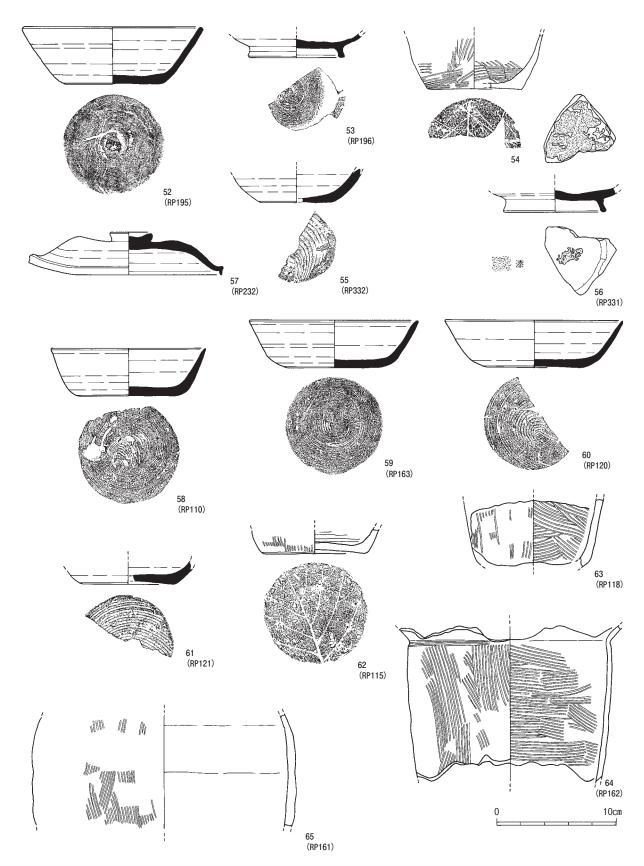
第58図 第2次出土遺物(4)



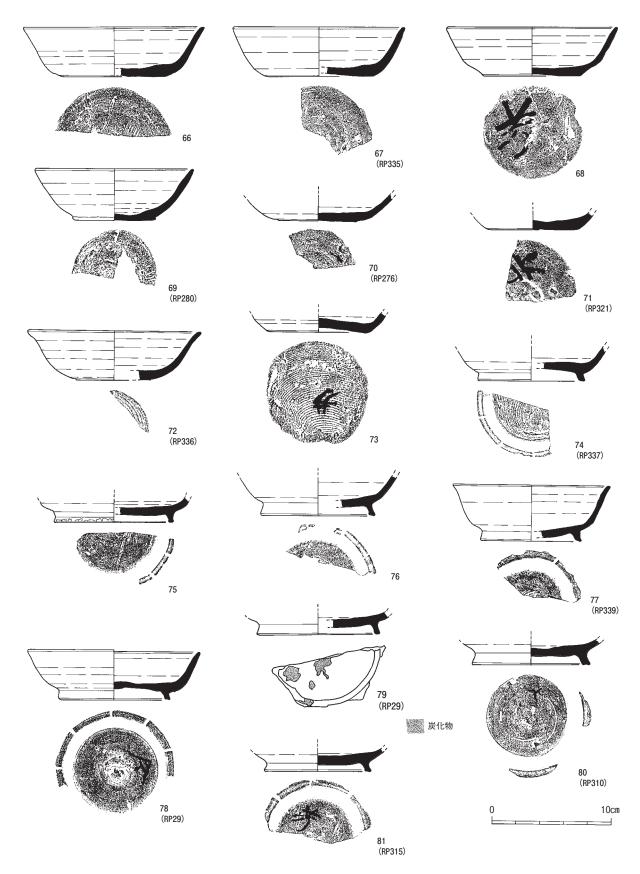
第59図 第3次SB5(30)、SB9(27·29)、SB14(28)、SB15(33)、SB16(31)、SB22(32·34·37)、SB23(35·36)出土遺物



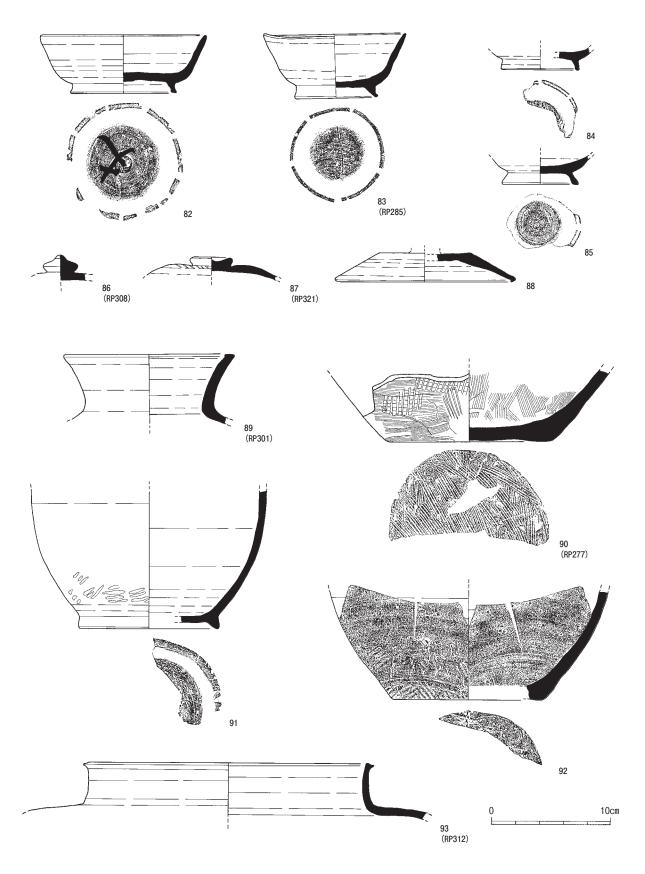
第60図 第3次SB17出土遺物(1)



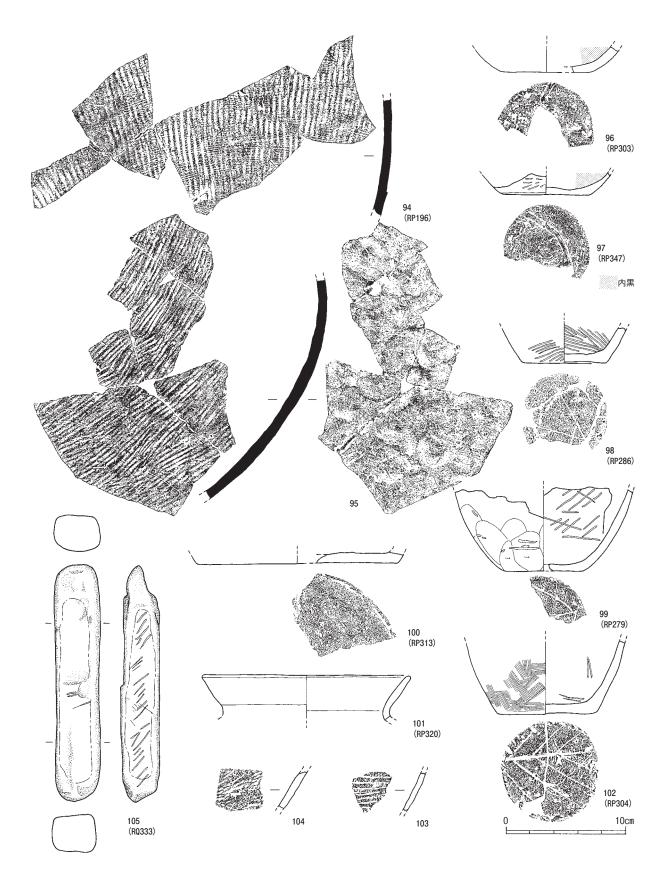
第61図 第3次SB17(2)(58~65)、SB25(52~54·57)、SB26(55·56)出土遺物



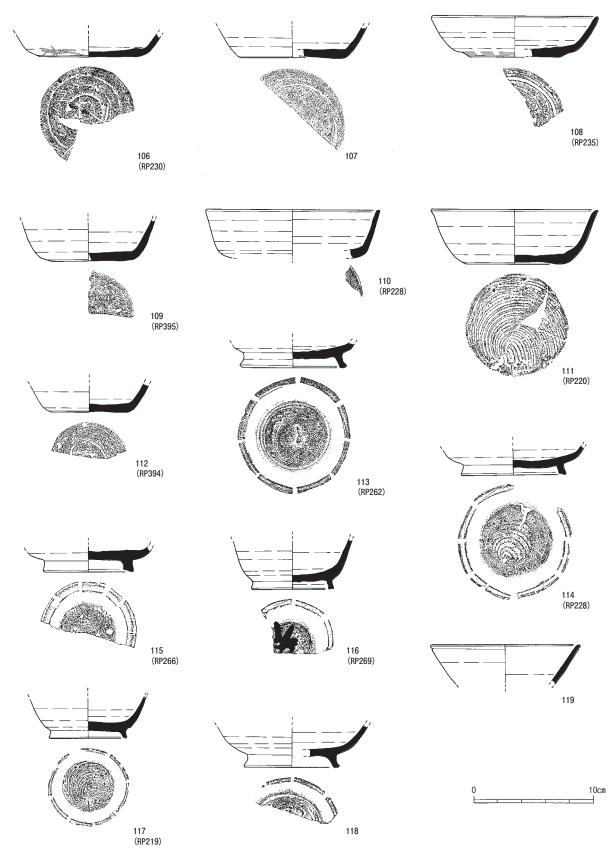
第62図 第3次SD522出土遺物(1)



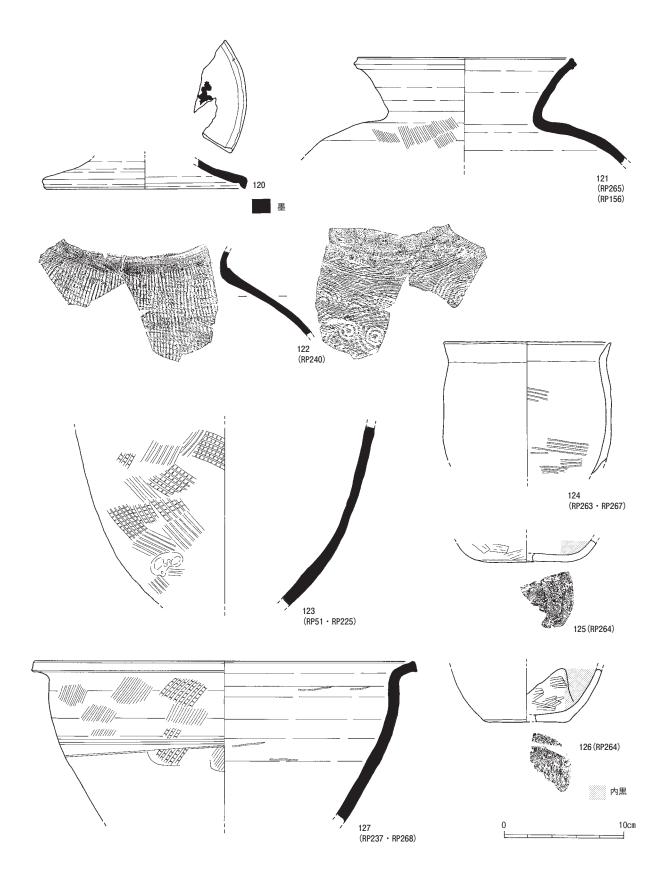
第63図 第3次SD522出土遺物(2)



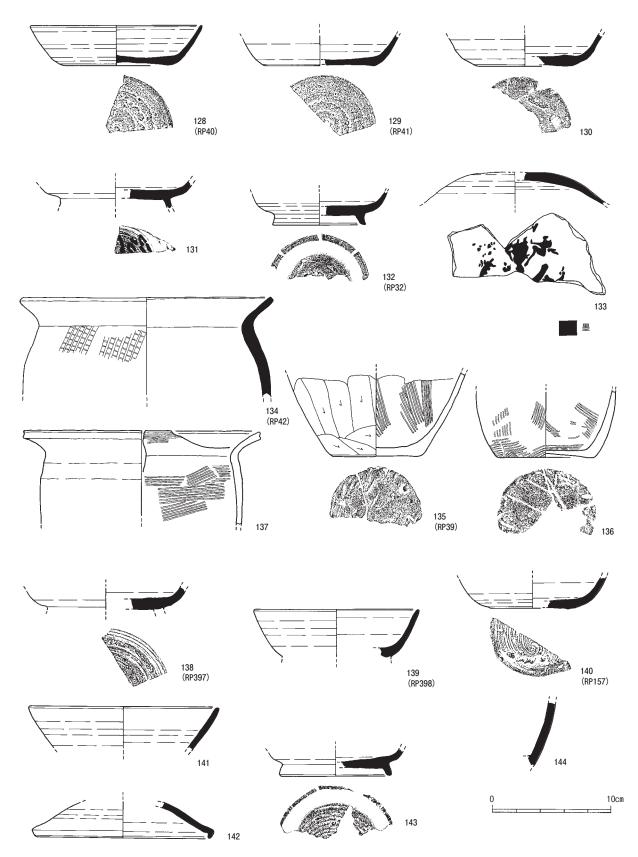
第64図 第3次SD522出土遺物(3)



第65図 第3次SD1700出土遺物(1)



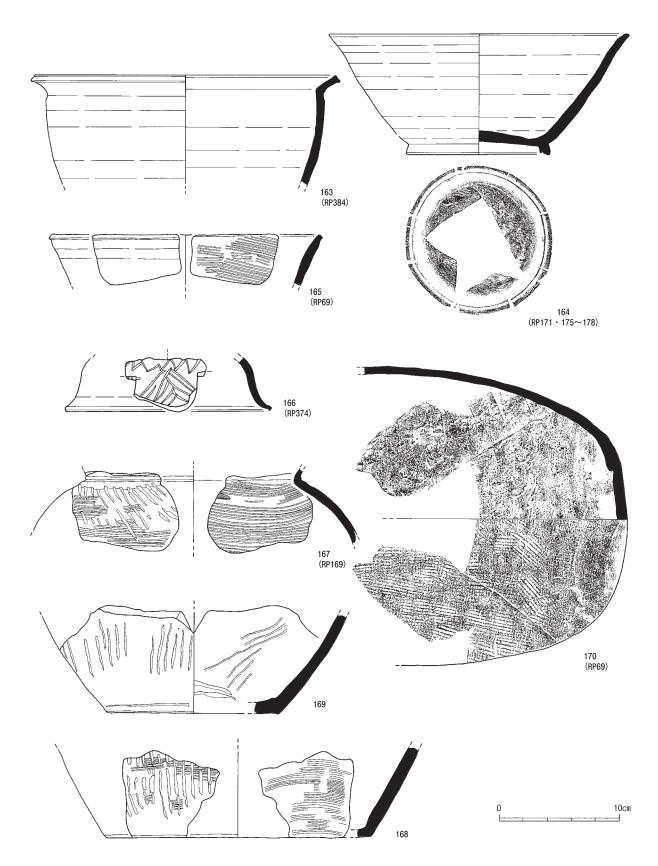
第66図 第3次SD1700出土遺物(2)



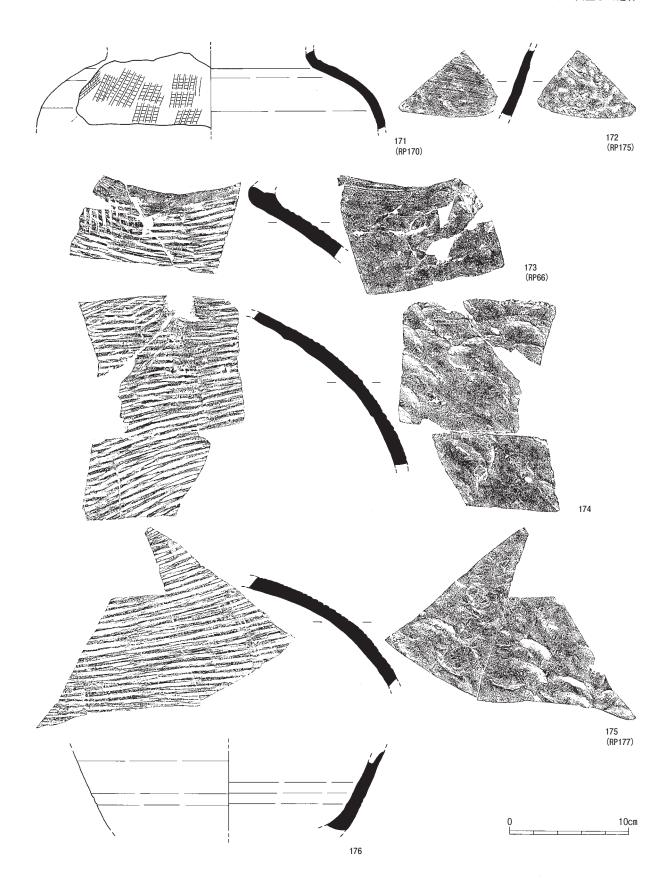
第67図 第3次SX298(128~137)、SD1508(138~144)出土遺物



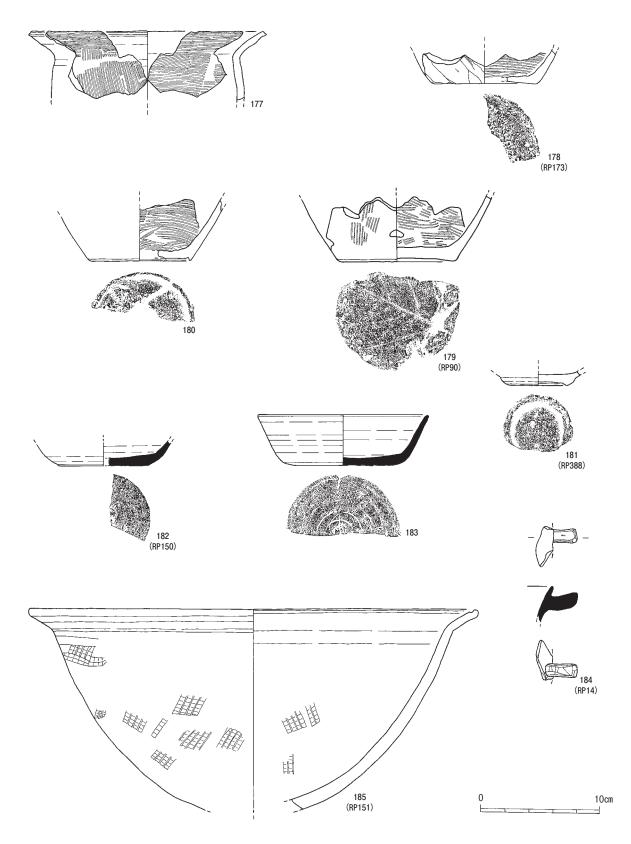
第68図 第3次SX1289(1)(145~150·152~157·159·161·162)、SD1295(1)(151·158·160)出土遺物



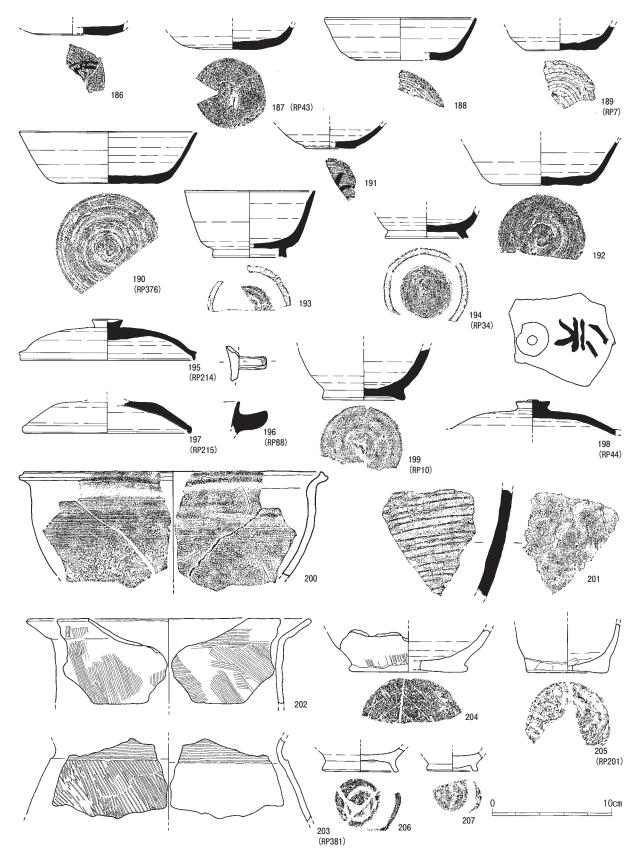
第69図 第3次SX1289(2)(164~170)、SX1364(163)出土遺物



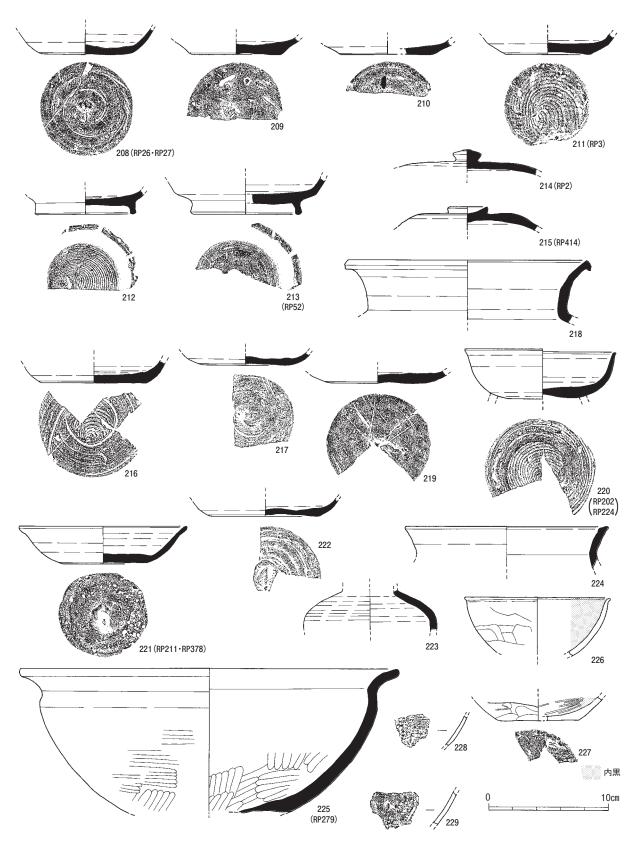
第70図 第3次SX1289出土遺物(3)



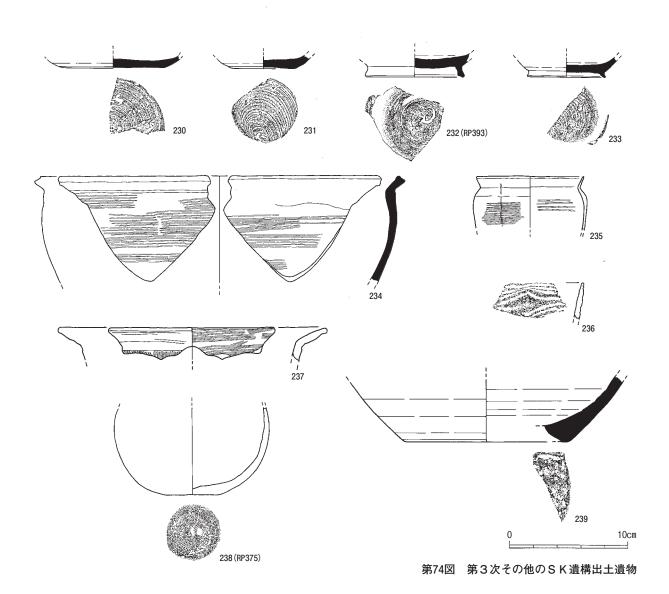
第71図 第3次S X 1289(4)(177·178·180·181)、S D 1295(2)(179)、S X 1558(182~185)出土遺物



第72図 第3次その他のSX遺構出土遺物



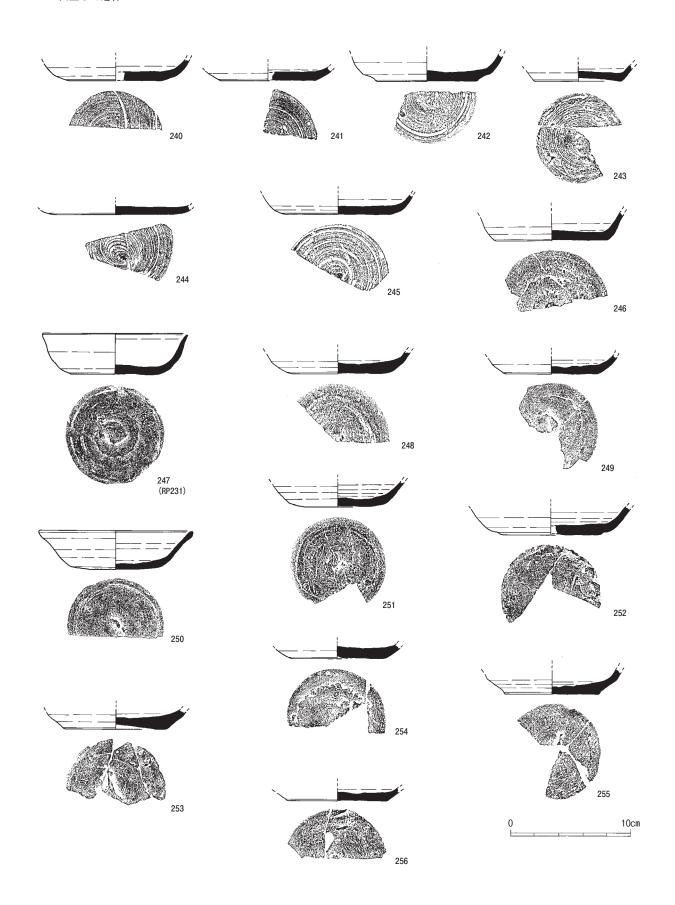
第73図 第3次その他のSD・SP遺構出土遺物



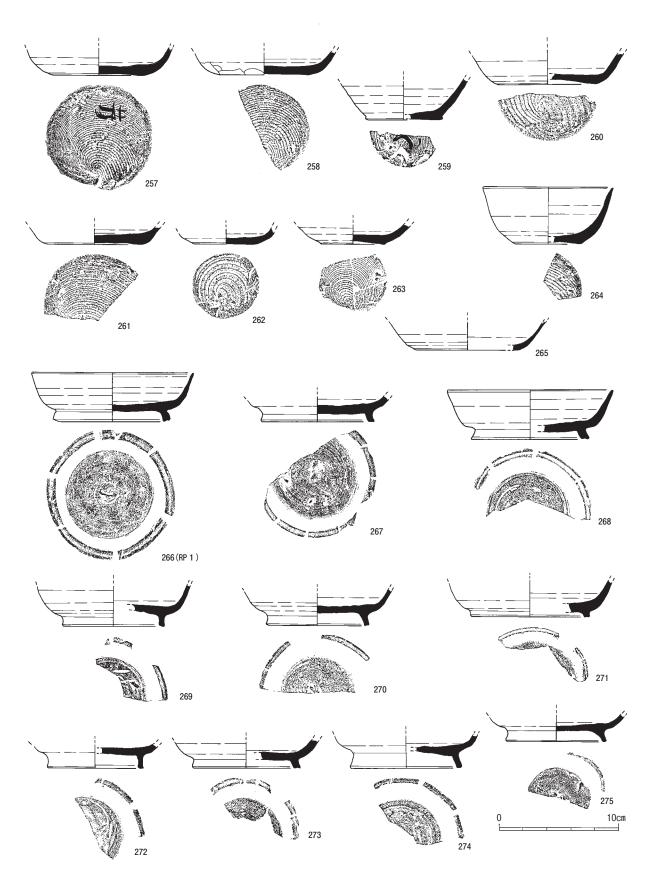
と読める。

第3次その他のSD・SP(第73・74図) 溝や柱穴遺構から、少量のみの出土しかない遺 そ の 他 の 構の遺物を一括して提示した。出土遺物としては、須恵器甕 (218、224、234、239)・坏 (208 SD・SP 213、216、217、219~222、230~233)・蓋 (214、215)・瓶 (223)、土師器甕 (237)・堝 (225)・小型壷 (227、235、238)・内黒坏 (226) がある。このほかに弥生式土器 (228、229、236) がある。弥生式土器は、表面に斜行縄文を施したものであり、おそらく天王山式に併行する土器であろうと思われる。

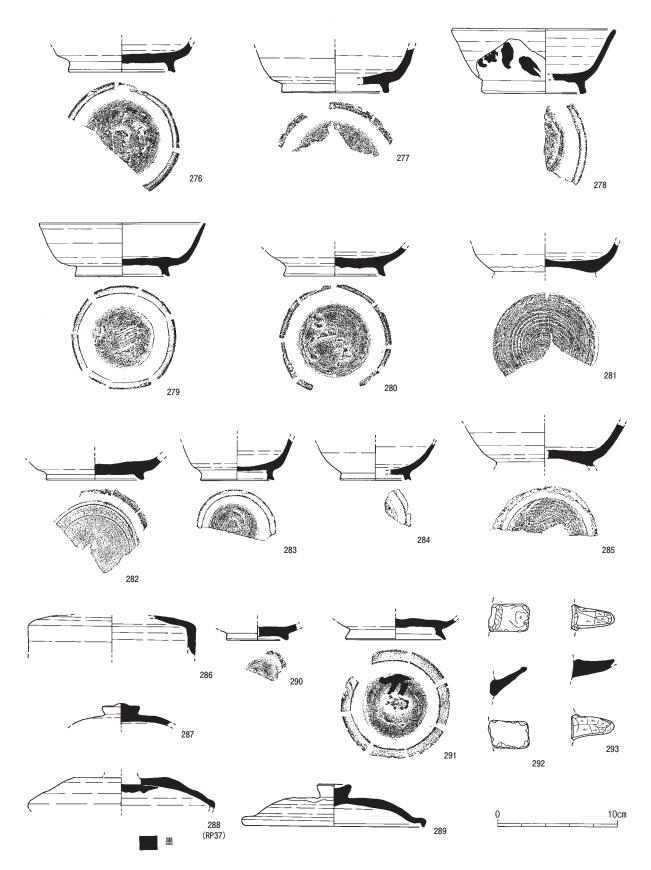
・遺構外出土遺物 (第75~78 図) 調査に伴って、遺構以外から出土した遺物がある。これ 遺構外出土遺物 らを遺構外出土遺物として、一括して次に報告する。大半は、重機による表土除去にともなって出土したものである。出土した遺物は、奈良・平安時代の遺物としては、須恵器坏 (240~283、290)・蓋 (286~289)・耳坏 (292、293)・長頸瓶 (284、285、294~297)、横瓶 (302)、



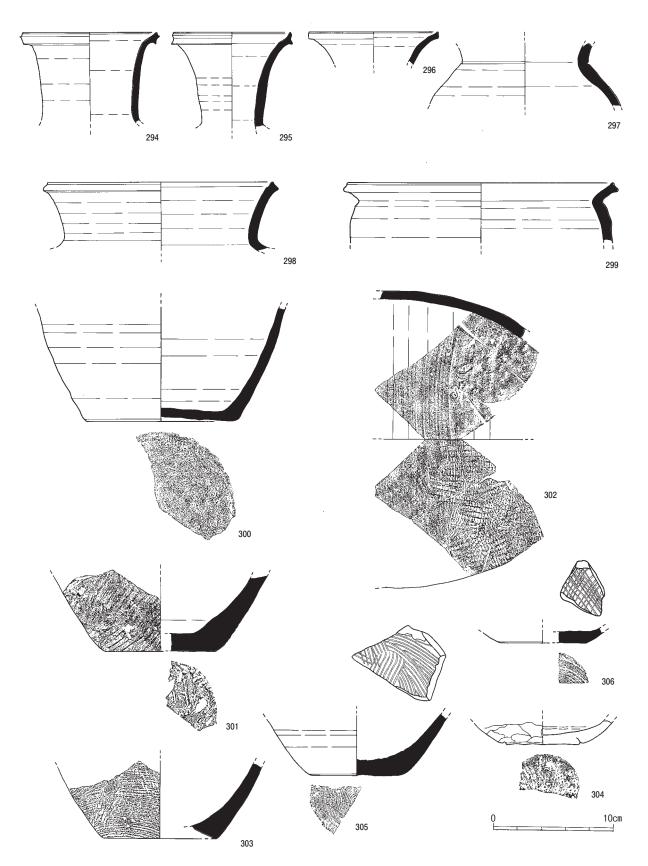
第75図 第3次遺構外出土遺物(1)



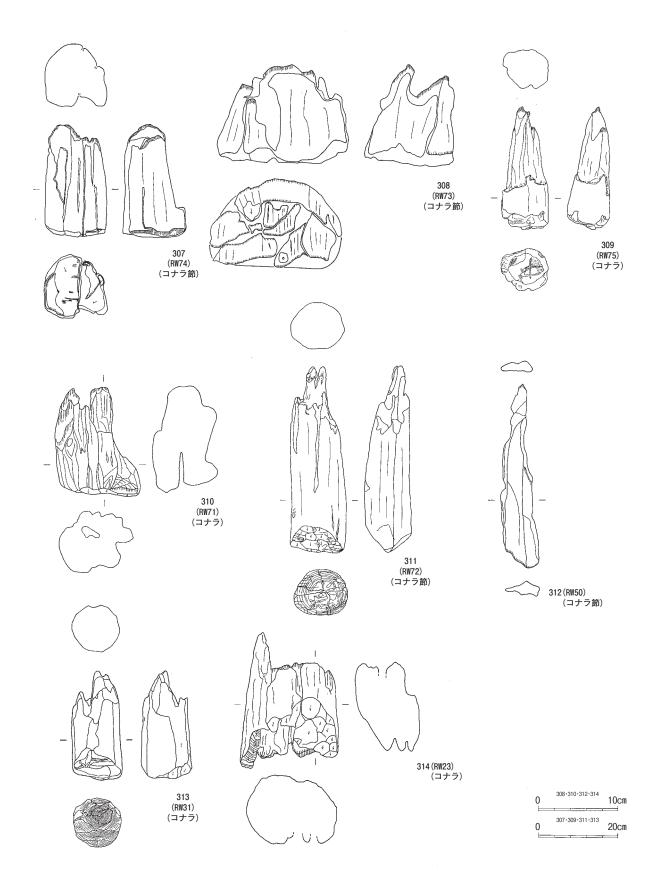
第76図 第3次遺構外出土遺物(2)



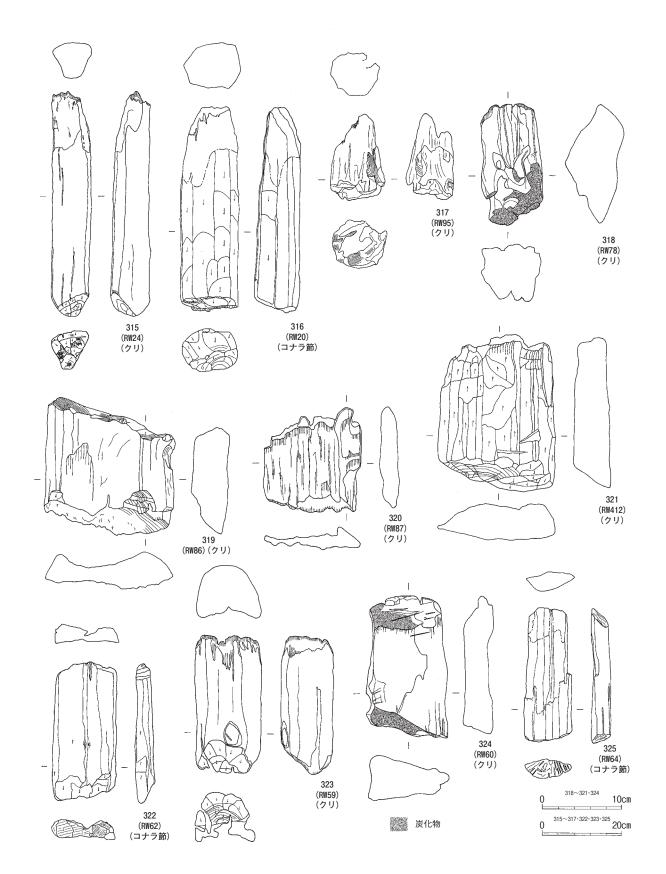
第77図 第3次遺構外出土遺物(3)



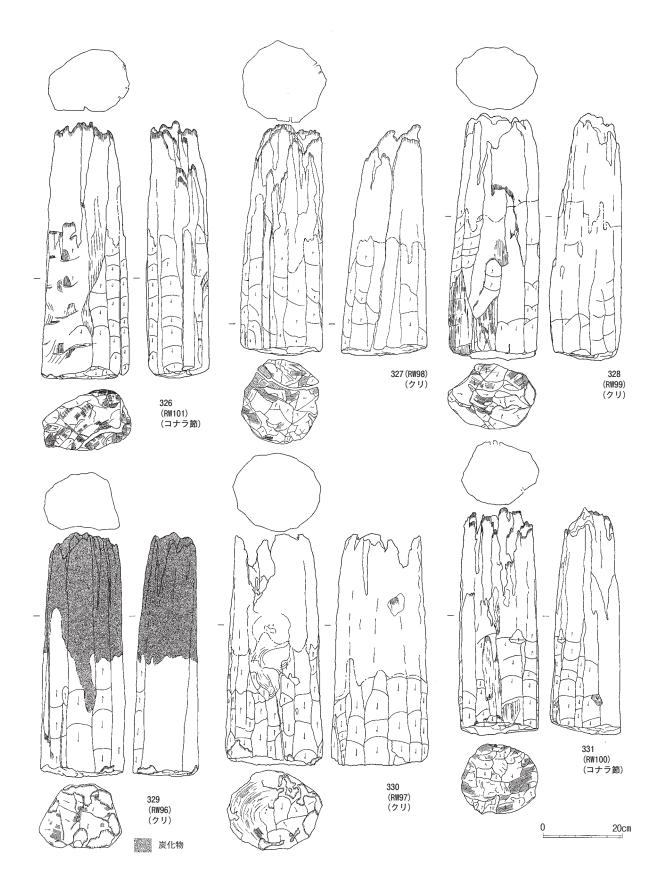
第78図 第3次遺構外出土遺物(4)



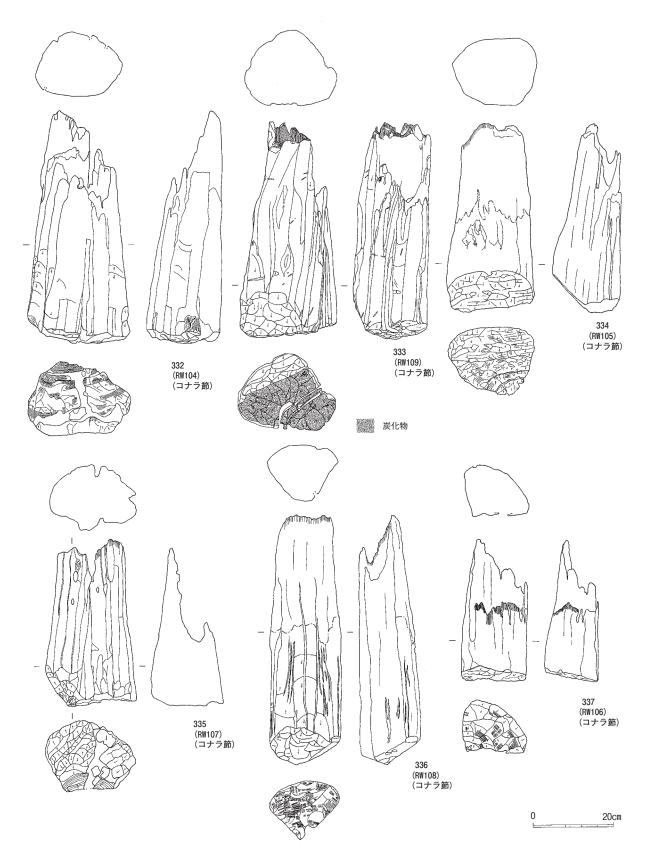
第79図 第3次SB1 (307~309)、SB3 (310·311)、SB4 (312)、SB6 (313·314)出土木柱他



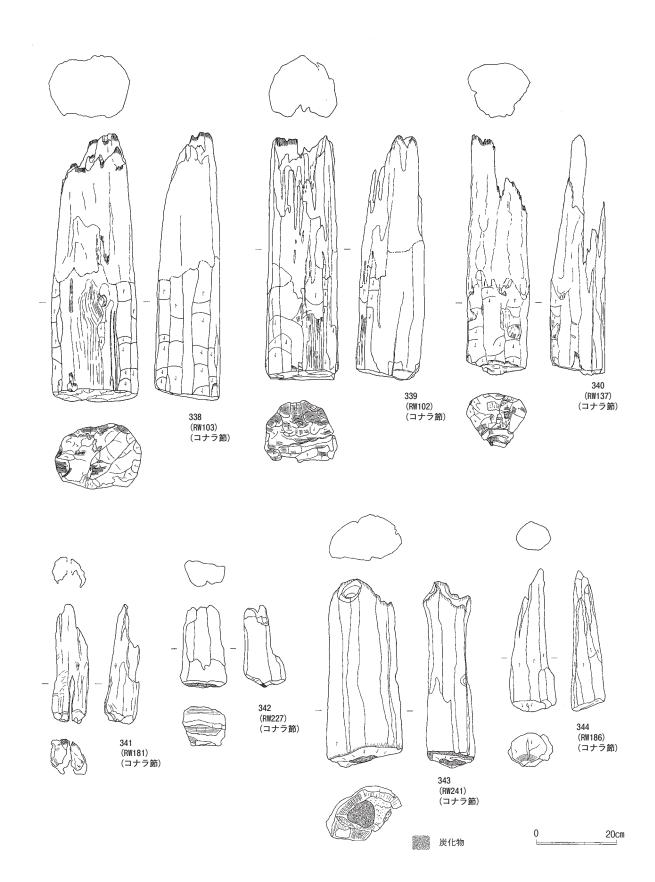
第80図 第3次SB7(315·316)、SB8(317·318)、SB9(319~325)出土木柱他



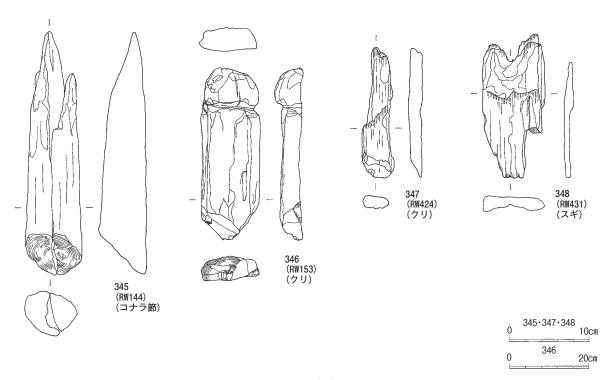
第81図 第3次SB11出土木柱他(1)



第82図 第3次SB13出土木柱他(1)



第83図 第3次SB11(2)(338·339)、SB13(2)(340)、SB20(341~343)、SB21(342)、SB25(344)出土木柱他



第84図 第3次SB16(345)、SB17(1)(346)、SB18(347)、SB19(1)(348)出土木柱他

甕 (298~301、303)、土師器壷(304)がある。このほかに、中世に属する遺物としては瀬戸 灰釉卸皿(306)が存在する。近世に属する遺物として、擂鉢(305)も少量ながら出土している。

須恵器坏には、高台を持つものと、高台を持たないものとがある。高台を持つものには、須恵器坏の底部切り離しが、糸切とヘラ切り離しの両者がある。240~245の須恵器坏は底部を糸切で切り離した後、周囲をヘラで調整し、糸切痕が坏底部の中央部に丸く残る。246~256はヘラ切り、257~265は糸切の底部切り離しを持つ。266~282は高台をもつ須恵器坏である。高台を持つものには、底部切り離しがヘラ切りによるものが多い。

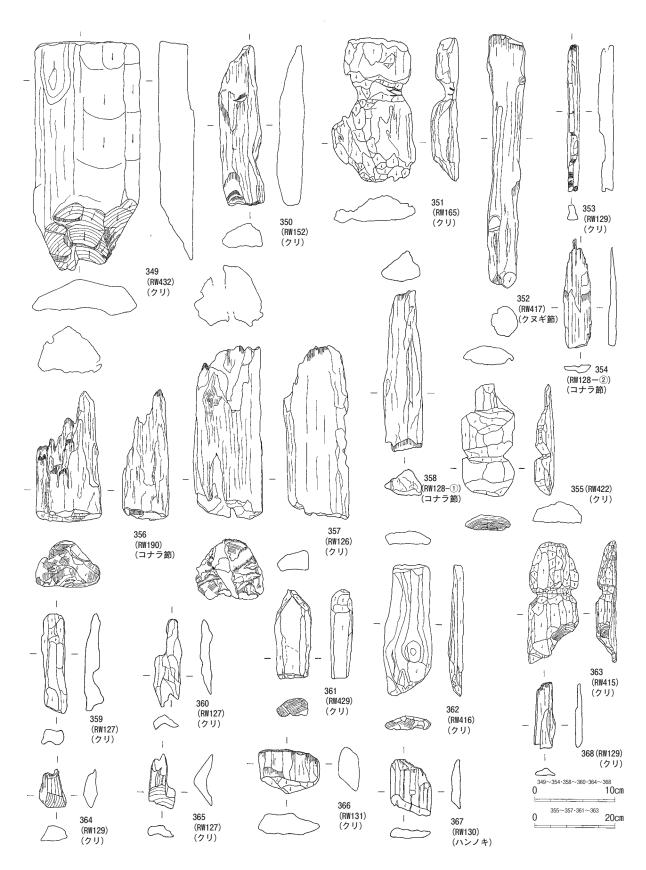
墨書は257、278、291に見ることができる。257は「卅万」、278は体部外面に墨書を持つが、判読はできない。291は底部に墨書を持つものであり、「万」と読むことができる。須恵器蓋は坏の蓋が多いが、286は薬壷型の壷の蓋である可能性がある。

中世に属する遺物として上げた、瀬戸灰釉卸皿は、皿状の器形の内底に縦横に卸目を施したものであり、古瀬戸中期段階のものであろう。

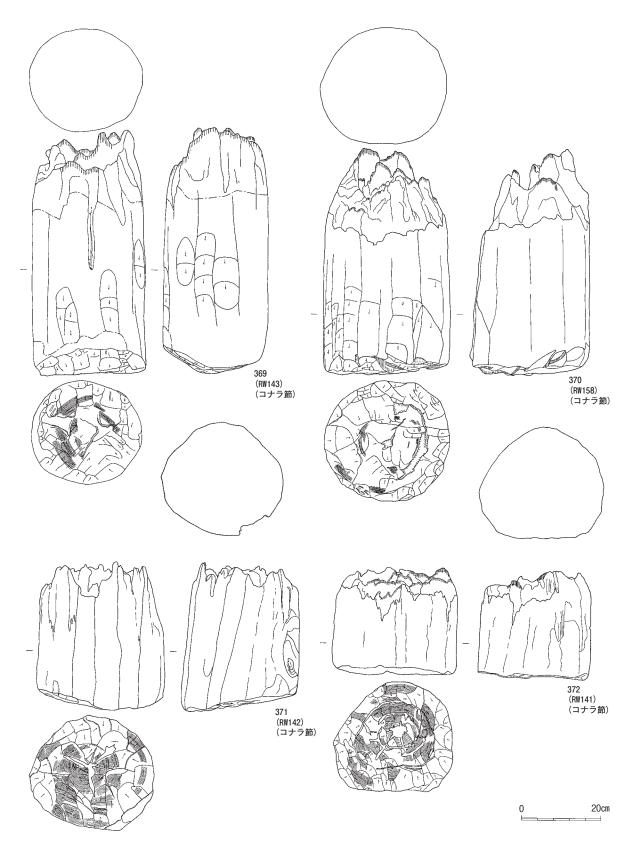
### ・出土した柱材他

第3次SB1建物跡(第5、8、79図) 調査区の北側に位置する、3間×2間の掘立柱建物 SB1建物跡 跡である。1間の間尺は約1.3m、約1.8m。全体プランの長軸は約3.8m、短軸は約3.5m、お そらく建て替えが行われたものであろうと思われる。出土遺物としては柱材( $307\sim309$ )が 出土している。樹種同定の結果からすれば、いずれもコナラ節であるという。

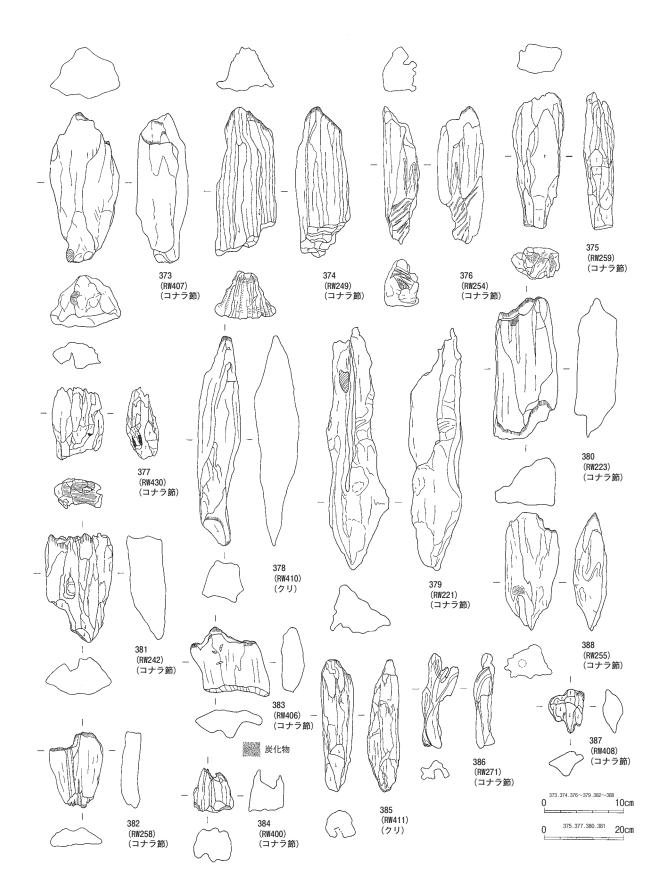
第3次SB3建物跡(第5、10、79図) 調査区の北側に位置する、おそらく3間×3間の掘



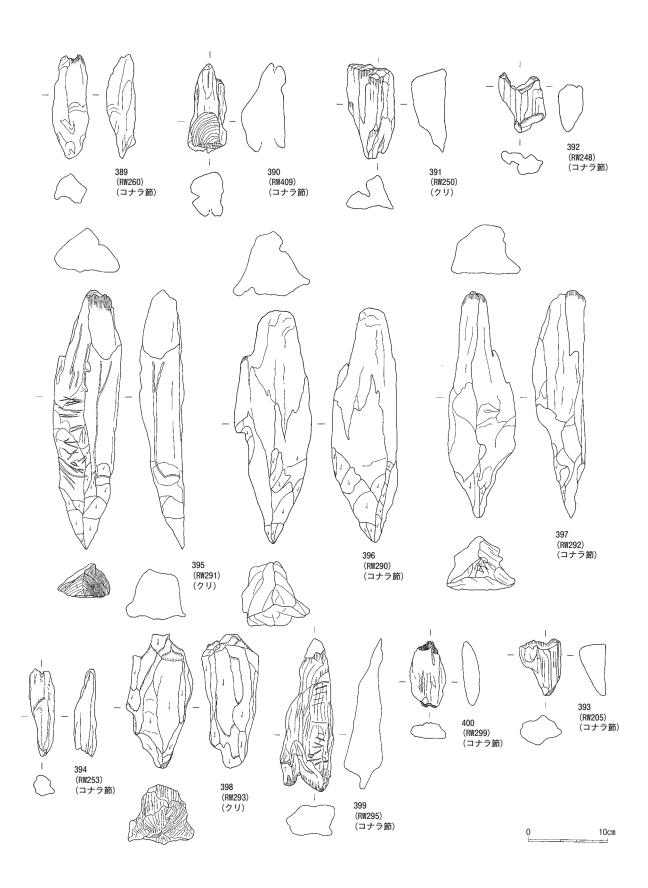
第85図 第3次SB17出土木柱他(2)



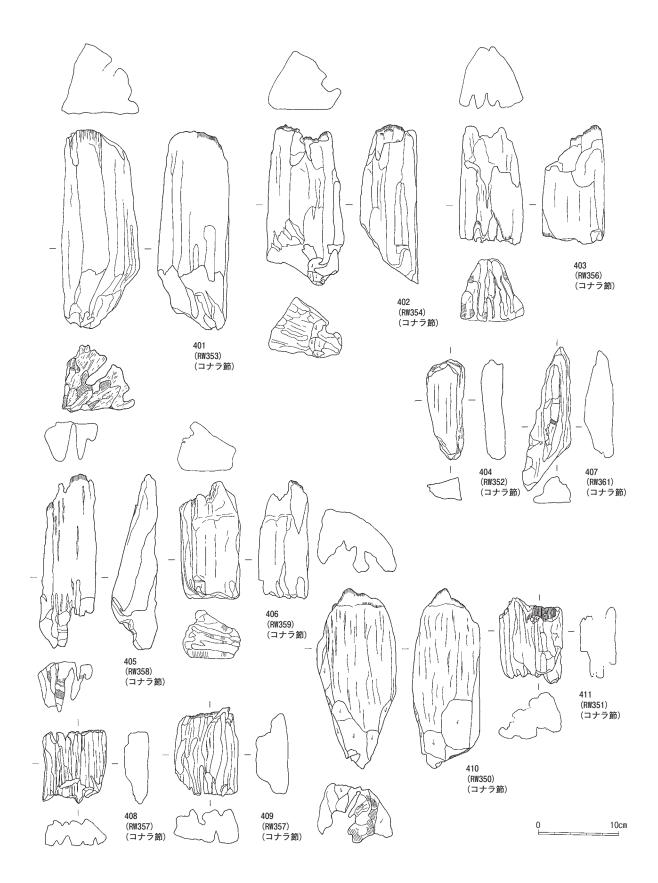
第86図 第3次SB19出土木柱他(2)



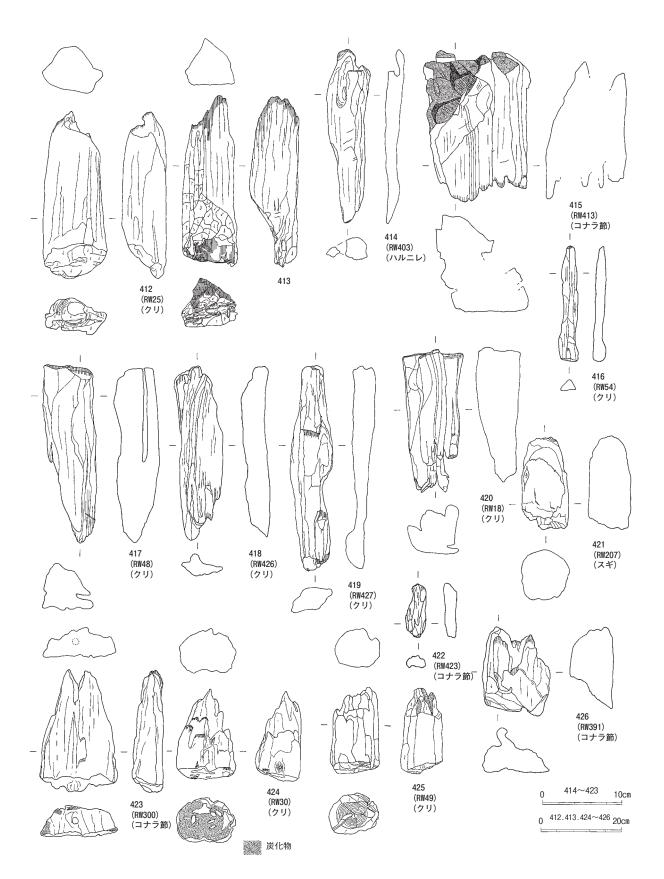
第87図 第3次SD588出土木柱他(1)



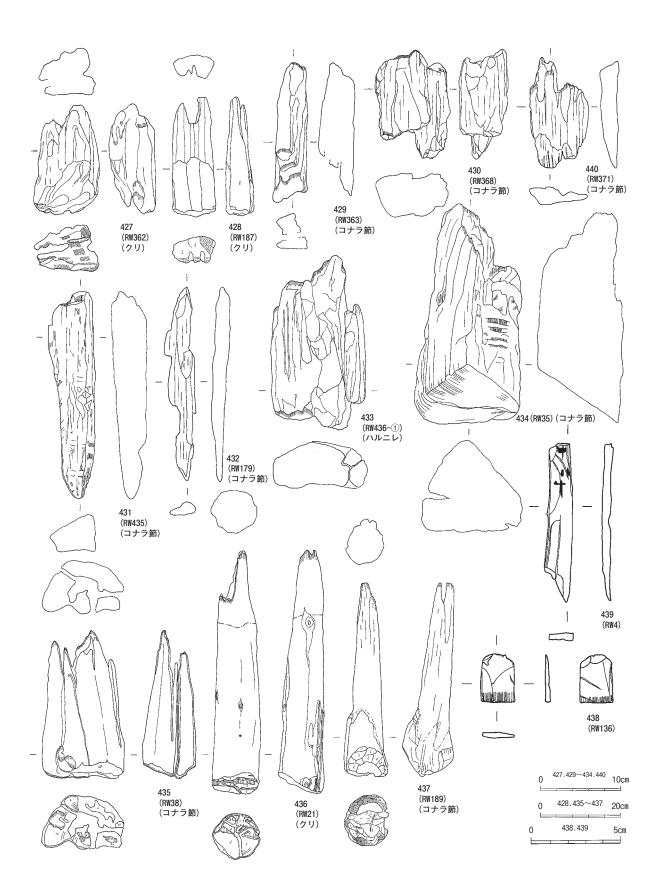
第88図 第3次SD588(2)(389~394)、SD597(395~400)出土木柱他



第89図 第3次SD723(401~409)、SD704(410·411)出土木柱他



第90図 第3次その他のSD・SP遺構出土木柱他



第91図 第3次その他のSD・SP・SX遺構出土木柱他

立柱建物跡である。1 間の間尺は約 1.3m、約 1.8m。全体プランの長軸は約 3.8m、短軸は約 3.5m、 S B 3 建物跡 出土遺物としては柱材 (310、311) が出土している。樹種同定の結果からすれば、いずれもコナラ属であるという。

第3次SB4建物跡(第5、11、79図) 調査区の北側に位置する、4間×2間の掘立柱建物 跡である。1 間の間尺は約1.8m、約1.5m、約1.2mである。全体プランの長軸は約4.2m、短 SB4建物跡 軸は約4.0m。出土遺物としては、柱材(312)が出土している。樹種同定の結果からすれば、 コナラ節であるという。

第3次SB6建物跡(第5、13、79図) 調査区の北側に位置する、3間×2間の掘立柱建物 跡である。1 間の間尺は約2.2m、約2.5m、約1.8m、約2.0mであり、それぞれが組み合わさ SB6建物跡 れている。全体プランの長軸は約6.8m、短軸は約4.5mである。出土遺物としては、柱材(313、 314)が出土している。樹種同定の結果からすれば、いずれもコナラ属であるという。

第3次SB7建物跡(第5、14、80図) 調査区の北側に位置する、2間×2間の掘立柱建物 跡である。1間の間尺は約2.4m、約3.0m、約1.5m、約2.3m。全体プランの軸は約4.5mである。 SB7建物跡 出土遺物としては、柱材(315、316)が出土している。樹種同定の結果からすれば、315はクリ、 316はコナラ節であり、異なる樹種が建築部材として使用されていることがわかる。

第3次SB8建物跡(第5、15、80図) 調査区の南区に位置する、3間×2間の掘立柱建物 跡であると考えられる。1間の間尺は約1.8m、約3.0mであり、それぞれが組み合わされてい SB8建物跡 る。出土遺物としては、柱材(317、318)が出土している。樹種同定の結果からすれば、いず れもクリであるという。

第3次SB9建物跡(第5、16、17、80図) 調査区の西側に位置する、3間×2間の掘立 柱建物跡である。1間の間尺は約2.8m、約1.8m、約1.5m。全体プランの長軸は約5.4m、短軸 SB9建物跡 は約4.2m、礎板と考えられる板(319~325)が、柱穴の底面に残されていた。樹種同定の結 果からすれば、322、325 はコナラ節、その他の礎板はクリを使用しているという。324 には一 部炭化した部分がある。

第3次SB11建物跡(第5、19、20、81、83図) 調査区の東側に位置する、2間×2間 の総柱の掘立柱建物跡である。1間の間尺は1.8m、全体は約3.5m四方。出土遺物としては、SB11建物跡柱材(326~331、338、339)が出土している。樹種同定の結果からすれば、326、331、338、339はコナラ節、その他の木材についてはクリとの結果が得られている。329の上部には炭化した部分が残っている。

第3次SB13建物跡(第5、22、23、82、83図) 調査区の東側に位置する、3間×2間の 掘立柱建物跡である。1間の間尺は約2.0m、約2.3mである。全体プランの長軸は約6.0m、短 SB13建物跡軸は約5.0m。出土遺物としては、柱材(332~337、340)が出土している。樹種同定の結果からすれば、すべてがコナラ節との結果が得られている。

第3次SB 16 建物跡 (第5、26、84 図) 調査区の西側に位置する、2 間×2 間の総柱の掘立柱建物跡である。1 間の間尺は約1.8m、約1.5m である。全体プランの長軸は約3.5m、短 SB 16 建物跡軸は約3.7m。出土遺物としては柱材 (345 ~ 346) がある。樹種同定の結果からすれば、345はコナラ節、346はクリとの結果が得られている。

第3次SB 17 建物跡(第5、27 ~ 29、85 図) 調査区の中央に位置する、やや不明確なが

SB17建物跡 らも、5間×3間の掘立柱建物跡である。石田遺跡で確認された建物のうち最大の規模を持つ 建物である。1間の間尺は約2.5m、約2.0mであり、それぞれが組み合わされている。出土遺 物としては、柱穴の掘り方底面から礎板が出土している。礎板は何らかの建物の部材を転用し ている可能性がある。いずれも礎板と考えられるが、中には掘り方に混入しているようなもの もあったため、礎板ばかりであるとは言い切れないところがある。出土遺物としては(349~ 368)がある。349 は丸い柱材を分割したようなものであり、351、363 などはくびれ部分があ るため、なんらかの部材の転用の可能性があろう。樹種同定の結果からすれば、352 がクヌギ 節、354、356、358 がコナラ節、367 がハンノキ、その他の木材はクリとの結果が得られている。 ここでは、クリ、クヌギ節、ハンノキ、コナラなどの複数にわたる樹種の使用が見られる。

第3次SB18建物跡(第5、30、84図) 調査区のほぼ中央部に位置する、1間×1間の掘SB18建物跡 立柱建物跡である。1間の間尺は約4.2mである。SB19掘立柱建物跡と建て替えの関係にある。SB18→SB19の建て替え順序であろうと考えられる。出土遺物としては柱材(347)がある。樹種同定の結果からすれば、347はクリとの結果が得られている。

第3次SB19建物跡(第5、31、32、86図) 調査区のほぼ中央部に位置する、1間×1間 SB19建物跡 の掘立柱建物跡である。1間の間尺は約4.2mである。柱材は直径30cmの巨大なものである。 SB18掘立柱建物跡と建て替えの関係にある。出土遺物としては柱材(369~372)がある。 樹種同定の結果からすれば、すべての樹種はコナラ節であるとの結果が得られている。

第3次SB20建物跡(第5、31、32、83図) 調査区の中央部に位置する、2間×2間の総SB20建物跡 柱の掘立柱建物跡であると考えておきた。1間の間尺は約2.0mである。出土遺物としては柱材(341~344)がある。樹種同定の結果からすれば、すべてがコナラ節との結果が得られている。第3次SD588溝跡(第5、47、87、88図) 調査区のほぼ中央に所在する、木柵列の布掘SD588溝跡 りである。連続的に柵木の柱材が存在した(373~394)。木柵列の間隔は20cmから30cmであり、間隔は短い。密集して林立するといった様相ではない。また、柵木の底部までの深さも浅く、地上部はあまり高くなかったであろうことも想定できる。出土した木柱は、すべて柵木であると考えられる。地上部分は喪失し、地下部分がわずかに残っているのであろう。樹種同定の結果からすれば、378、385、391はクリ、その他はすべてコナラ節であるとの結果が得られている。柱材として、選択的にコナラ節が選ばれているのであろうか。柱材は、割材が多く使用され、太さは一定しない。先端を尖らせ、おそらく打ち込みによって、地中に突き刺して

第3次SD 597 溝跡(第5、48、88 図) 調査区の中央にあり、SA1の南辺を構成する柵 
SD 597 溝跡 
木列である。連続的に柵木の柱材が存在した(395~400)。SD 588 と同様に木柵列の間隔は 
20cm から 30cm であり、間隔は短い。密集して林立するといった様相ではない。また、柵木 
の底部までの深さも浅く、地上部はあまり高くなかったであろうことも想定できる。樹種同定 
の結果からすれば 395、398 はクリ、その他の木材はコナラ節であるとの結果が得られている。 
おそらく打ち込みによって、地中に突き刺しているものと思われる。

に心掛けたが検出することはできなかった。

いるものと思われる。補助材に太い材がある程度の間隔をおいて存在するかとも考えて、精査

第3次SD704溝跡(第5、48、89図) 調査区の東側にあり、SA2柵列を構成する遺 SD704溝跡 構である。方形の囲繞施設の南辺をなすものである。連続的に柵木の柱材が存在した(410、 411)。SD588 と同様に木柵列の間隔は 20cm から 30cm であり、間隔は短い。密集して林立するといった様相ではない。柱材は、割材が多く使用され、太さは一定しない。先端を尖らせ、おそらく打ち込みによって、地中に突き刺しているものと思われる。樹種同定の結果からすれば、木材はコナラ節であるとの結果が得られている。

第3次SD723 溝跡(第5、48、89 図) 調査区の東側にあり、SA2の南辺を構成する柵木列である。連続的に柵木の柱材が存在した(401~409)。SD588 と同様に木柵列の間隔は SD723 溝跡20cmから30cmであり、間隔は短い。密集して林立するといった様相ではない。柱材は、割材が多く使用され、太さは一定しない。先端を尖らせ、おそらく打ち込みによって、地中に突き刺しているものと思われる。樹種同定の結果からすれば、すべて木材はコナラ節であるとの結果が得られている。

第3次その他の遺構出土の柱材(第90、91図) 出土したのは、大半が柱材である。樹種同 定の結果からすれば、414、433 はハルニレ、421 はスギである。はかの材はクリまたはコナラ その他の遺構 節である。一部には炭化したものがある。

木簡 (第5・91 図、図版 40) 木簡が 2 点出土している (438、439)。 439 は調査区北側の S D 231 溝跡から出土したものである。 438 は調査区西側の S X 1289 遺構から出土したもので 木 簡 ある。

439の木簡については、三上喜孝氏(山形大学)により次のご教示を賜った。

## 『山形市石田遺跡出土木簡

釈文

[十カ]

 $\bigcirc$  $\rightarrow$  $\uparrow$ 1

上端はキリ・オリ痕を残し調整している。両側面はもとの幅をとどめている。下端は斜めに 折損している。

肉眼および赤外線テレビカメラによる観察の結果、上端部から三文字分の墨痕が確認できる ものの墨の遺存状況はきわめて悪いため、現状では釈文の確定に至らない。』

とのことである。なお現存長は 90mm、幅 15mm、厚さ 5 mm である。438 の木簡は現存長は 2.8mm、幅 20mm、厚さ 3 mm であり、墨痕の遺存は見られず、詳細は不明である。

## VI まとめ

石田遺跡の調査を通して得られた成果について次にまとめることとしたい。

- ・石田遺跡は山形市街の南西方約4km、山形盆地の南、山形市大字谷柏字石田に所在する。本 沢川左岸の扇状地と自然堤防上の微高地に立地し、縄文時代中期から後期、弥生時代、中世ま で営まれた、複合遺跡であることがわかった。遺跡の範囲は東西約140m、南北約150mに広が り、面積が約12,500㎡と推定される。標高はおよそ127mを測る。
- ・遺跡は、本沢川扇状地の自然湧水の豊富な扇端部付近や自然堤防上の微高地であり、縄文時 代から各時代にわたる遺跡が集中して立地している
- ・石田遺跡の2次調査と3次調査とで、検出された遺構は、掘立柱建物跡・埋設土器・土坑・柱穴・性格不明土坑・その他の遺構・溝跡などであり、時期的には縄文時代から弥生時代、奈良・平安時代、中世、一部近世に及ぶ。このうち、弥生時代と中世・近世の遺構は明確ではなく、遺物も少ない。
- ・縄文時代の遺構は発掘区の北側、2次調査区に集中している。この時期の遺構群は、2次調査区の南側に設定された3次調査区にも存在することが予想された。このため3次調査区では、いくつかの地点で深掘を実施したが、下層の縄文時代遺構を検出することはできなかった。
- ・検出された遺構・遺物としてもっとも多いのは、奈良・平安時代の遺構・遺物である。 2次調査区と3次調査区の全体から出土し、量ももっとも多い。注目すべきは、第3次調査区で検出された、掘立柱建物跡群とそれを囲繞するように検出された柵列である。遺跡は、ほぼ軸を同じくして営まれる、倉庫群としての建物跡と、木柵をもつ柵列とからなる。注目すべきことに、隣接した「谷柏」遺跡」「萩原遺跡」では竪穴住居跡が検出されているが、ここでは掘立柱建物跡のみの構成を取り、相違を見せている。
- ・遺構には、柱材が遺存していた。柱材の遺存は多数の建物に及び、奈良・平安時代における 建築材料の素材の利用の仕方を知ることができる好資料となった。
- ・縄文時代の遺構は、2次調査区の南区に位置する、 $E \sim I 25 \sim 38$ グリッドの下層で検出された。遺構としては、埋設土器遺構である。埋設土器は5 固体検出された。こうした遺構は、山形市熊ノ前遺跡でも検出され、縄文時代の墓壙として考えられている。
- ・奈良・平安時代の遺構は、大量に柱材が残されていたため、柱材の樹種について分析を行うことができた。172点のサンプルを分析することができ、その中には、広葉樹 6 種類、針葉樹 2 種類、合計 8 種類の樹種を同定することができた。得られた樹種は「クリ」「コナラ節」「クヌギ節」「ハルニレ」「ハンノキ」「トネリコ」「スギ」「マツ」である。利用されているのはコナラ節が最大であった。また、クリは耐水性に優れており丈夫であるため、建築部材として石田遺跡では多用されており、柱材、礎板、木柵と全てに使用されていた。
- ・本遺跡では最低3カ所の囲繞施設の存在が確認される。規模がある程度確認されるのは、一つの囲み施設だけであるが、囲繞施設の遺構の共通性からすれば、3つとも一辺を約50mとす

る、同形同大であると考えておきたい。

石田遺跡からは、縄文時代中期後半から後期初頭、奈良・平安時代の各時期の遺物が出土した。次に出土した各遺物について述べていきたい。

- ・縄文時代中期後半から後期前半の石器が出土している。茎の無い石鏃が1点、つまみを作り出した石匙が2点、刃部に沿って2次加工を施した石器1点(20)、磨製によって成型した石斧が1点、石皿が1点、凹みを施した凹石が数点出土している。
- ・弥生時代の土器が少量出土している。表面に斜行縄文を施したものと、撚糸圧痕により、幾何学的な文様を構成するものがあり、おそらく天王山式に併行する土器であろうと思われる。 個体数はおそらく2ないし3個体であると考えられ少ない。いずれも深鉢型の器形をなすものであろうと思われる。
- ・奈良・平安時代の遺物は、主として3次調査区から出土した。出土遺物は、須恵器甕・横 瓶・坏・円面硯、土師器甕・坏、木簡、木柱、礎板などがある。この中で注目すべきことは、 2次調査区には柱材を中心として、木材が大量に遺存していたことである。この木材について も分析をおこなった。
- ・須恵器坏、蓋などには墨書がある。「卅万」「足山」「万」などが存在している。また、墨 書土器は、東側の囲繞施設の南側出入り口のそばの溝跡から大量に見つかっている。
- ・柵列の柱材は、割材が多く使用され、太さは一定しない。先端を尖らせ、おそらく打ち込み によって、地中に突き刺しているものと思われる。柵木の底部までの深さも浅く、地上部はあ まり高くなかったであろうことも想定できる。
- ・木簡が2点出土している(438、439)。438は調査区西側のS X 1289遺構から出土したものである。439は調査区北側のS D 231溝跡から出土したものである。439の木簡については、三上喜孝氏(山形大学)により〔十カ〕とのご教示を得たが、上端部から三文字分の墨痕が確認できるものの確定に至らなかった。なおこの木簡については『木簡研究』第23号(2002)に掲載してある。
- ・遺跡は、複数の方形の囲繞施設からなることが明らかとなった。同様の遺跡の姿は、遺跡のすぐ東側を流れる河川の先、山形市吉原遺跡でも見ることができる。こうした遺跡が、交通の要所に存在する姿に注目しておきたい。
- ・この地域は、周囲に窯跡などの生産遺跡を抱えている。こうした生産遺跡と、この倉庫群は 密接に関係する可能性が高い。
- ・遺跡の中で、SB17・18・19建物が、主軸方向を違えている。この軸で西側を見たときには、ちょうど正面に谷柏古墳群を見ることができる。これらの建物群は、谷柏古墳群を意識して建てられたと見ることはできないだろうか。谷柏古墳群はこの地域の代表的な終末古墳である。この遺跡を営んだ者達が、谷柏古墳群に葬られた者達と関係をもつ可能性がある。3回の建て直しの可能性がこの建物にあることも、同一場所での選地の重要性を示しているものと考えることもできる。

次に石田遺跡の分析成果を整理しながら、年代と石田遺跡の様相について分析してゆきたい。

・石田遺跡の樹種の同定については、柱材の分析の中で触れた。

- ・漆塗膜の分析を通して、石田遺跡では漆作業が行われていることが明確となった。地方の官 衙遺跡では、漆の集荷とともに漆器の生産を行っていたことは広く知られているが、石田遺跡 の中でも漆器の生産を行っていたことが明確となり、官衙遺跡との関連性あるいは、在地勢力 との関連が注目されることとなった。
- ・石田遺跡の花粉分析からは、周辺の丘陵部には落葉広葉樹林が形成されていたことがわかった。さらにはこの森林の一部は破壊され、ニヨウマツなどが育成する2次林を形成していたことがわかった。こうしたことは、遺跡内で検出された建物群の建築部材として周囲の山林が利用され、植生が変化した可能性があるという。
- ・敷物と考えた植物製品については、草本植物からなる編み物の可能性が高いことがわかった。これは、S X 1289 (図75) の底面から出土したものであるが、出土状態からすれば、水たまりの水を取水するときに雑物が入らないようにするために置いた、水溜の敷物の可能性があるう。

最後にこの遺跡の年代について整理しておきたい。

- ・遺跡から出土した遺物を検討すれば、器高が低く、底径口径ともに大きい、糸切り離しの底部の周囲にヘラ調整を加える須恵器坏や、静止糸切りの須恵器坏などが注目することができる。これらの年代は8世紀半ばからやや早い時期におくことができよう。また底部ヘラ切りや底部糸切りの須恵器坏も見受けられ、これは8世紀後半から9世紀の前葉までの時期に置くことができよう。
- こうしたことからすれば、石田遺跡の年代は8世紀半ば以前から9世紀前葉ということが出来 よう。その中心的な時期としては、遺物量からすれば8世紀後半から9世紀の前半であり、囲 み施設を持つ倉庫群の年代もこの時期におくことができることになろう。

## 写真図版



2 次調査区(A - B区)全景 ↑ N



2次調査区(C区)全景↑ NW



2次調査区全景↑S



作業状況↑S



調査区設定状況↑NE



トレンチ粗掘状況 ↑ S



重機表土除去状況↑ W



面整理状況↑SW



グリッド設定状況↑ S



遺構マーキング↑S



D 区河川跡粗掘状況↑ W



D区作業状況↑E



D 区下層面検出作業状況↑ NW



D 区縄文時代包含層精査状況↑ SW



D区縄文面作業状況↑S



記録作業状況



EU 1 発掘作業状況↑ NE



A 区作業状況↑ N



石田遺跡 2 次発掘調査説明会



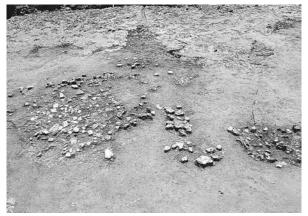
石田遺跡 2 次発掘調査説明会



検出作業状況↑ NW



D区縄文面検出状況↑S



縄文土器集中出土状況↑N



SK672 遺物出土状況↑ N



縄文土器集中出土状況↑S



SK643 遺物出土状況↑ W



SK654 遺物出土状況↑S



EU1(RP1)出土状況↑S



SK662 遺物出土状況↑ S



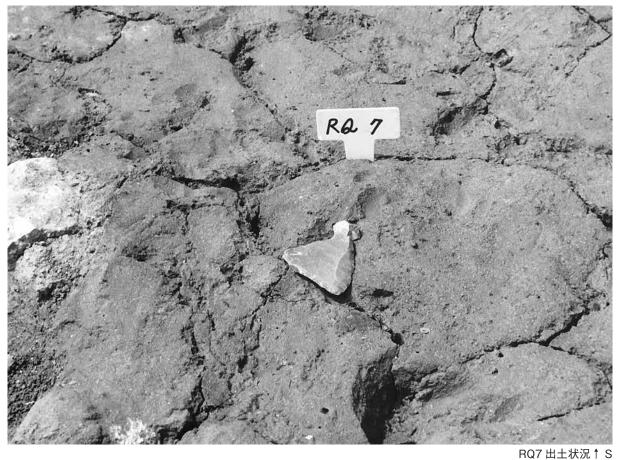
出土遺物 RP1(EU1)



EU3(RP3)出土状況↑S

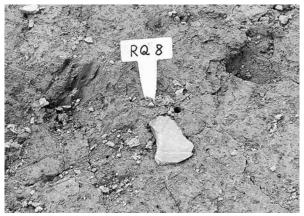


EU4·EU5 出土状況↑S





RQ6 出土状況↑ S



RQ8 出土状況↑ S



RQ9 出土状況↑ S



SK643 下層遺物出土状況



3次調査区全景↑S(空撮)



遺構完掘状況(SB17・18・19付近)



遺構完掘状況(SB23 付近)



遺構完掘状況(SB17・18・19付近)



3次調査区全景 (↑N)



3次調査区全景 (↑W)



2・3次調査区全景(↑S)



3次調査区全景 (↑ E)



調査区設定作業状況↑ E



重機表土除去状況↑E



面整理作業状況↑E



平板実測作業状況↑E



断面図作成作業状況↑ E



石田遺跡 3 次発掘調査説明会



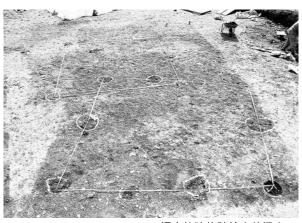
石田遺跡 3 次発掘調査説明会



敷物状遺物(RW189)取上げ状況↑ N



SB1 掘立柱建物跡検出状況↑ S



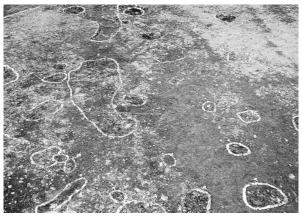
SB2・4 掘立柱建物跡検出状況↑ W



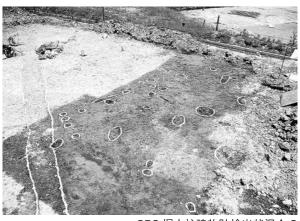
SB3 掘立柱建物跡検出状況↑ E



SB5 掘立柱建物跡検出状況↑W



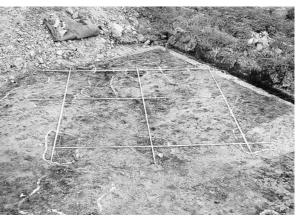
SB6 掘立柱建物跡検出状況↑ E



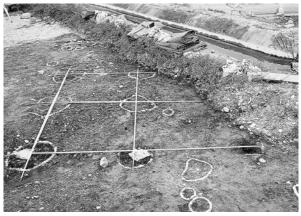
SB8 掘立柱建物跡検出状況↑S



SB9 掘立柱建物跡検出状況↑ S



SB10 掘立柱建物跡検出状況↑ W



SB11 掘立柱建物跡検出状況↑ E



SB12 掘立柱建物跡検出状況↑ W



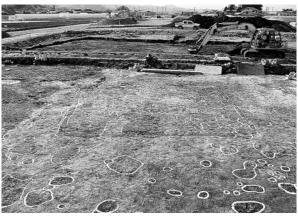
SB13 掘立柱建物跡検出状況↑ S



SB14·15 掘立柱建物跡検出状況↑S



SB16·17·18·19 掘立柱建物跡検出状況↑ S



SB17 掘立柱建物跡検出状況↑ S



SB20 掘立柱建物跡検出状況↑ S



SB23 掘立柱建物跡検出状況↑ W



SD219 溝跡検出状況↑ N



SD522 溝跡検出状況↑ E



SD588 溝跡検出状況↑N



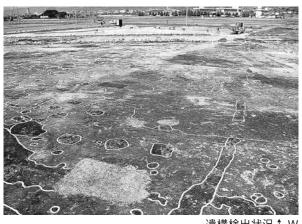
木柵列検出状況↑E



木柵列角部分検出状況↑S



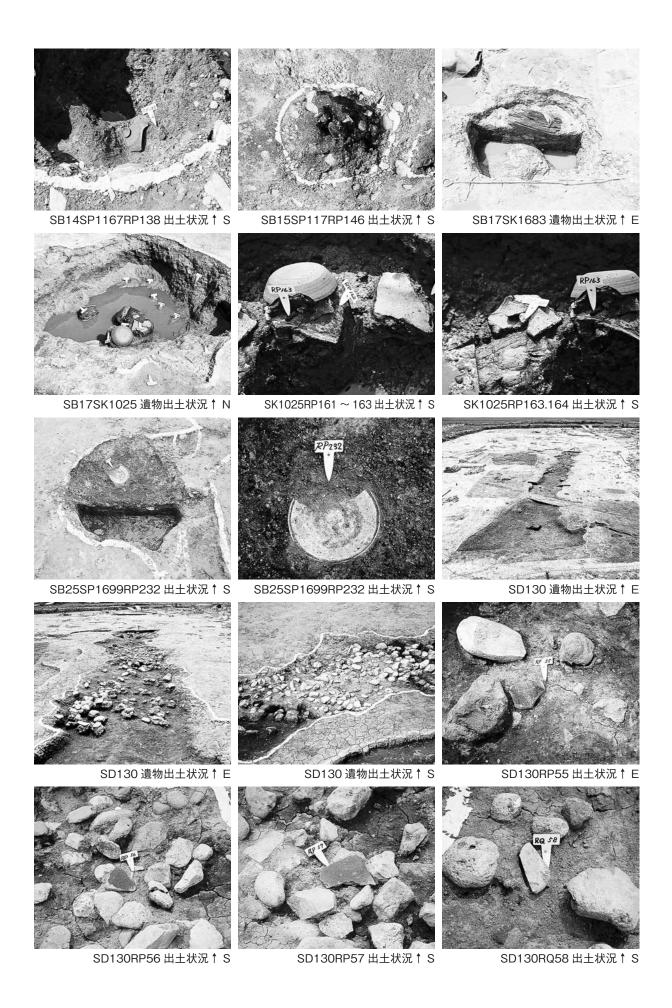
木柵列角部分検出状況↑N



遺構検出状況↑ W

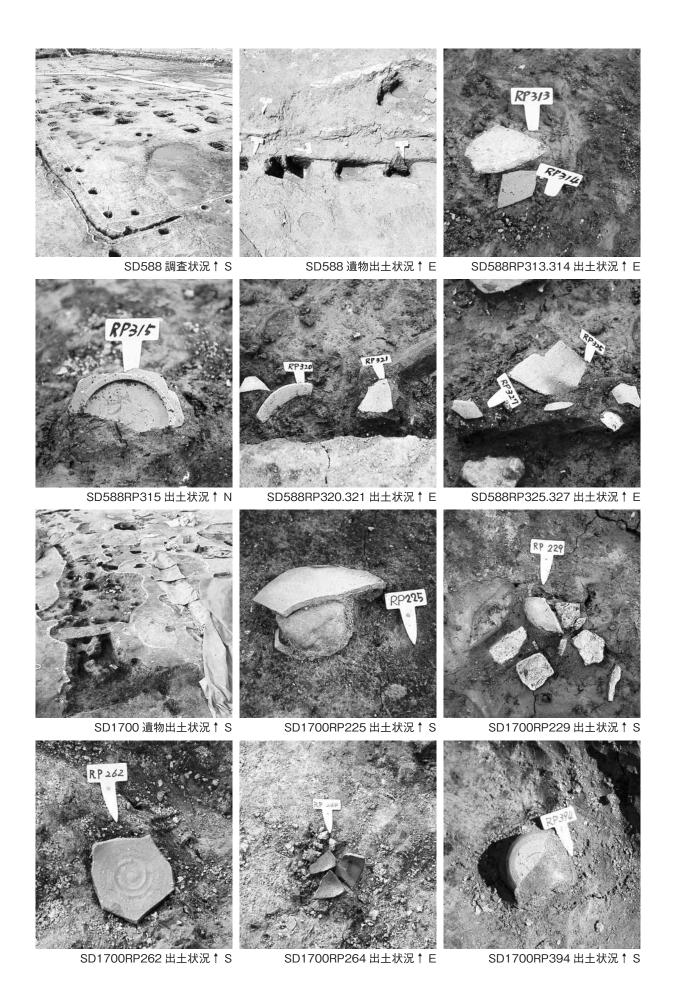


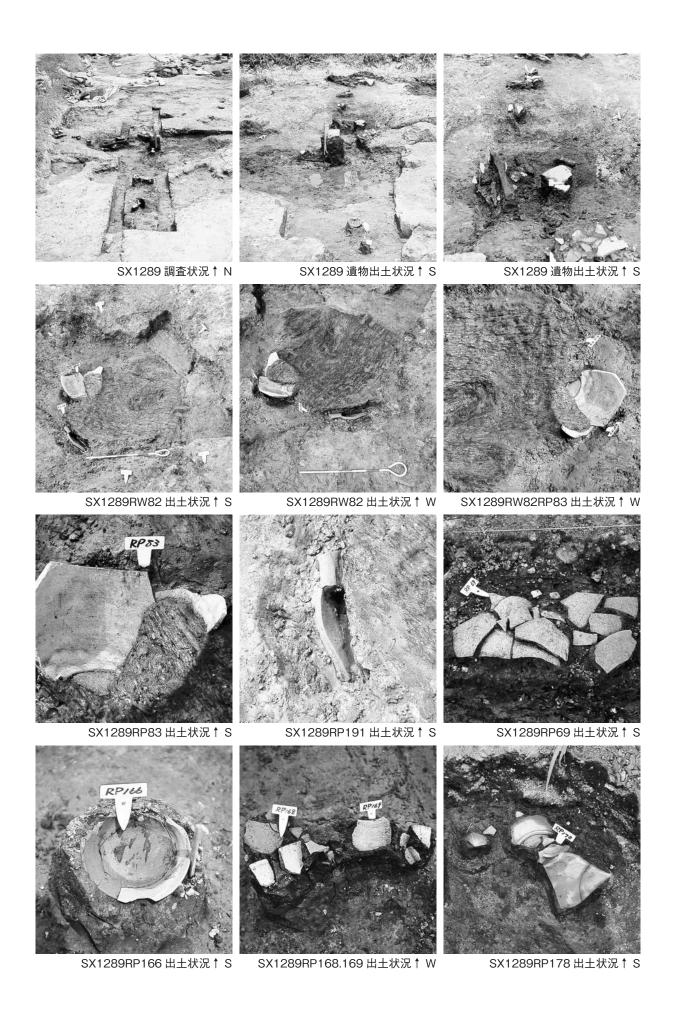
遺構検出状況↑ W

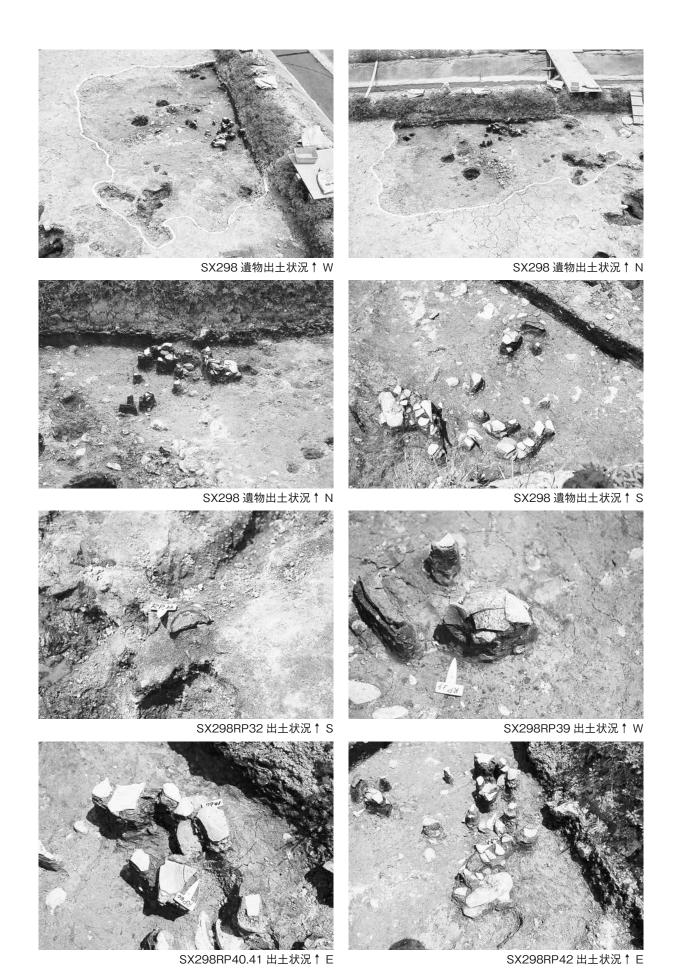




SD522RP310 出土状況↑E SD522 (No.7) RQ333RP336.337 出土状況↑S SD522 (No.7) RP334.335.339 出土状況↑S

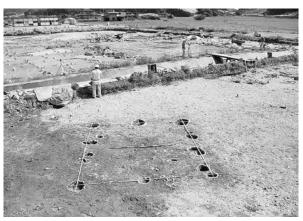






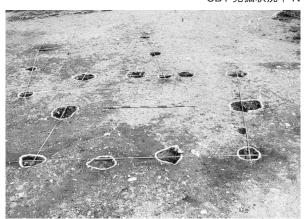


SB2·3·4·5·6 完掘状況↑ N



SB1 完掘状況↑ N





SB2・4 完掘状況↑ W



SB4 · 5 · 6 完掘状況 ↑ N



SB5 完掘状況↑ W



SB6 完掘状況↑ N



SB7 完掘状況↑ N



SB8 完掘状況↑ W



SB9 完掘状況↑ N



SB10 完掘状況↑ S



SB11 完掘状況↑ S



SB12 完掘状況



SB13 完掘状況↑ N



SB13·14·15 完掘状況↑ N



SB14·15 完掘状況↑ N



SB16·17·18·19 完掘状況↑ N



SB17·18·19 完掘状況↑ E



SB16·17·18·19 完掘状況↑ S



SB16·17·18·19 完掘状況↑ W



SB20·24 完掘状況↑ N



SB20 完掘状況↑ N



SB21 完掘状況↑ N



SB22 完掘状況 ↑ N



SB23 完掘状況↑ E



SB23 完掘状況 ↑ N



SB23 完掘状況↑ S



SB20・22・24 完掘状況↑ S



SB20・22・24 完掘状況↑ W



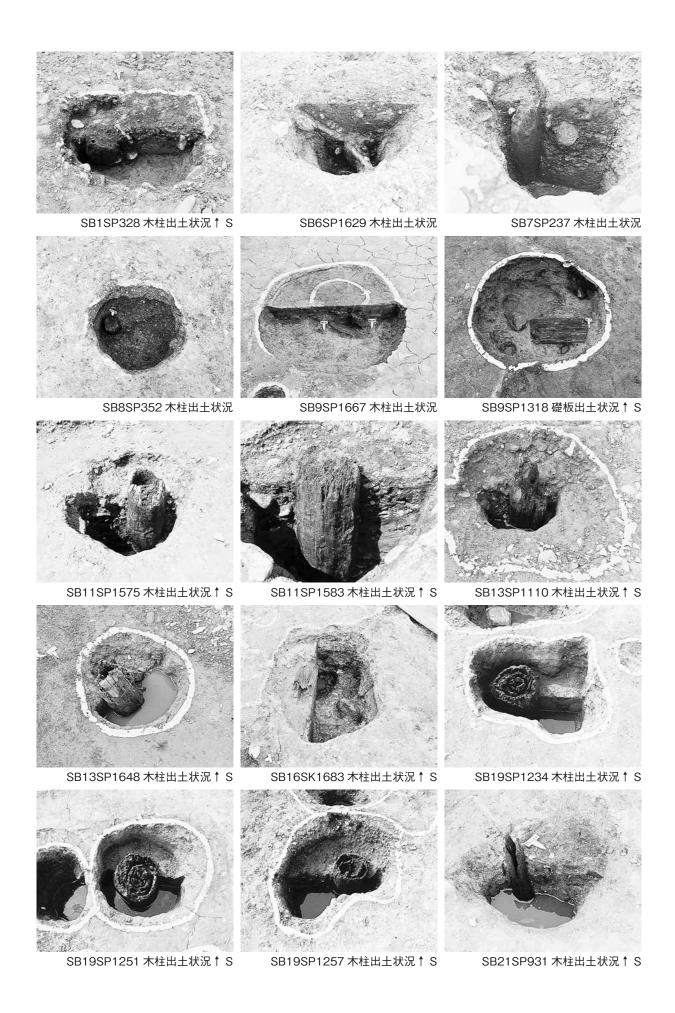
SB24 完掘状況↑ N



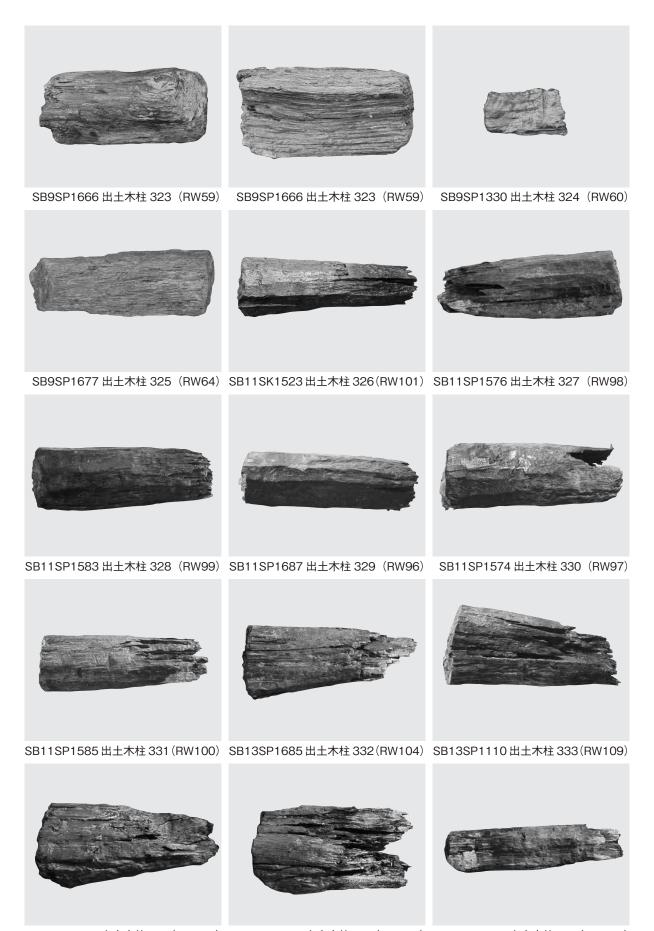
SB26 完掘状況↑ W



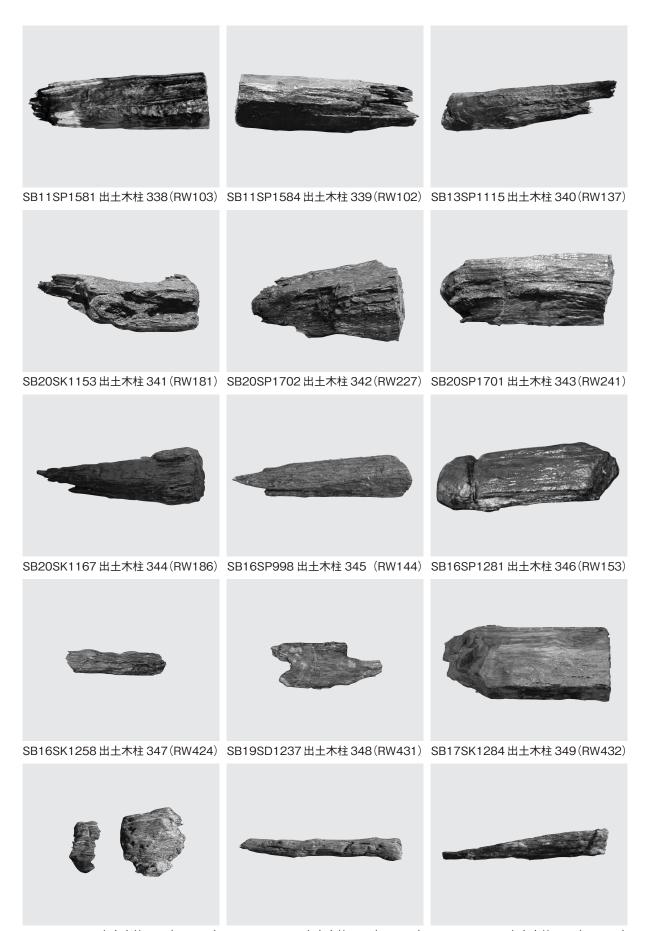
SB26 完掘状況↑ S







SB13SP1535 出土木柱 334(RW105) SB13SP1684 出土木柱 335(RW107) SB13SP1541 出土木柱 336(RW108)



SB17SX1012 出土木柱 351 (RW165) SB17SX1012 出土木柱 352 (RW417) SB17SK1683 出土木柱 358 (RW128)





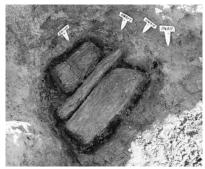


SB17SP1281 出土木柱 355 (RW422) SB17SX995 出土木柱 356 (RW190) SB17SK1683 出土木柱 357 (RW126)





SB17SK1284 出土木柱 361 (RW429) SB17SX1012 出土木柱 362 (RW416) SB17SX1012 出土木柱 363 (RW415)

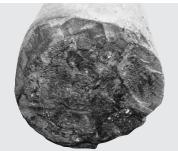






SB17SK1284RW428.429 出土状況 SB19SP1257 出土木柱 369(RW143) SB17SX1012RW165.415~417出土状況

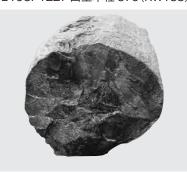






SB19SP1227 出土木柱 370 (RW158) SB19SP1227 出土木柱 370 (RW158) SB19SP1251 出土木柱 371 (RW142)

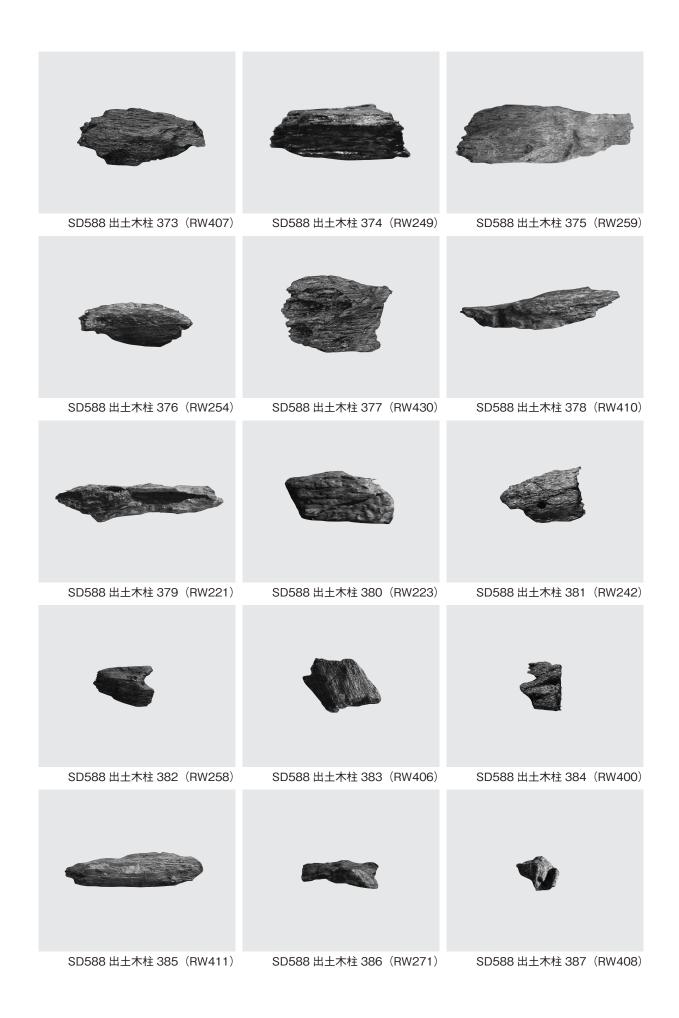


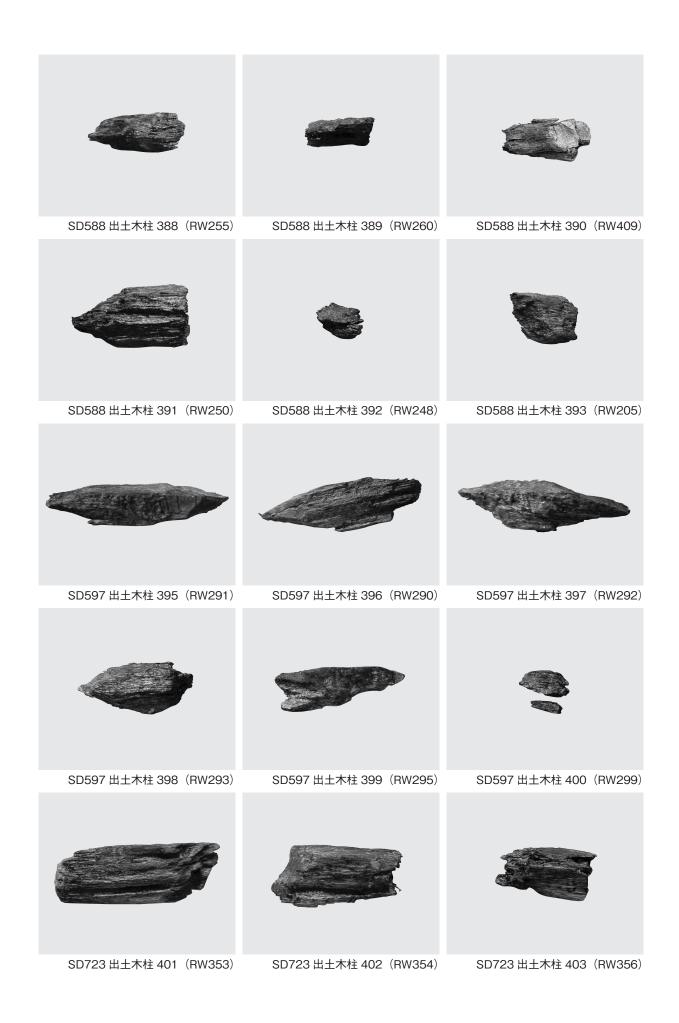




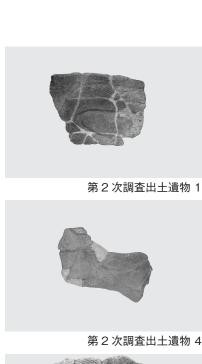


SB19SP1251 出土木柱 371 (RW142) SB19SP1234 出土木柱 372 (RW141) SB19SP1234 出土木柱 372 (RW141)













第2次調査出土遺物2

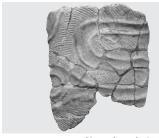




第2次調査出土遺物4

第2次調査出土遺物5

第2次調査出土遺物6







第2次調査出土遺物7

第2次調査出土遺物8

第2次調査出土遺物9







第2次調査出土遺物 10

第2次調査出土遺物 11

第2次調査出土遺物 12







第2次調査出土遺物 13

第2次調査出土遺物 15

第2次調査出土遺物 16



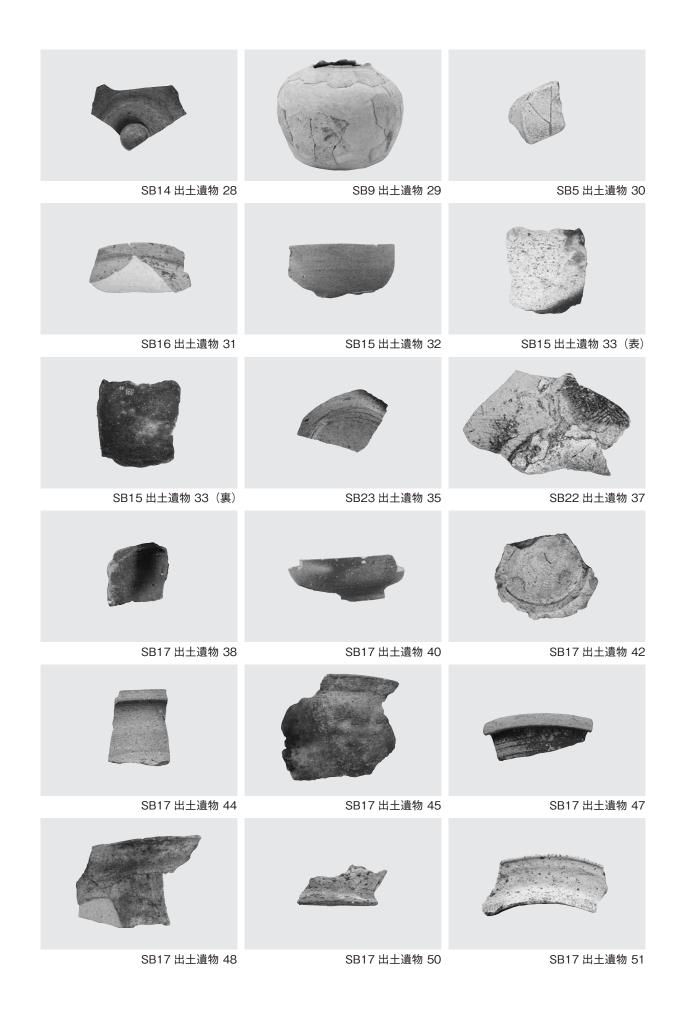


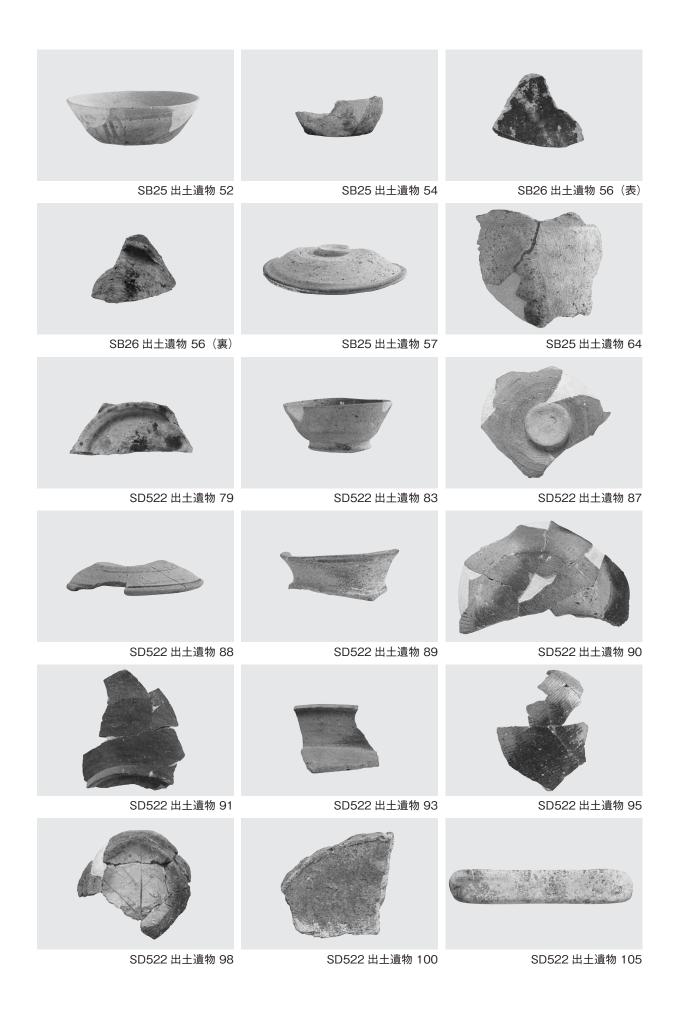


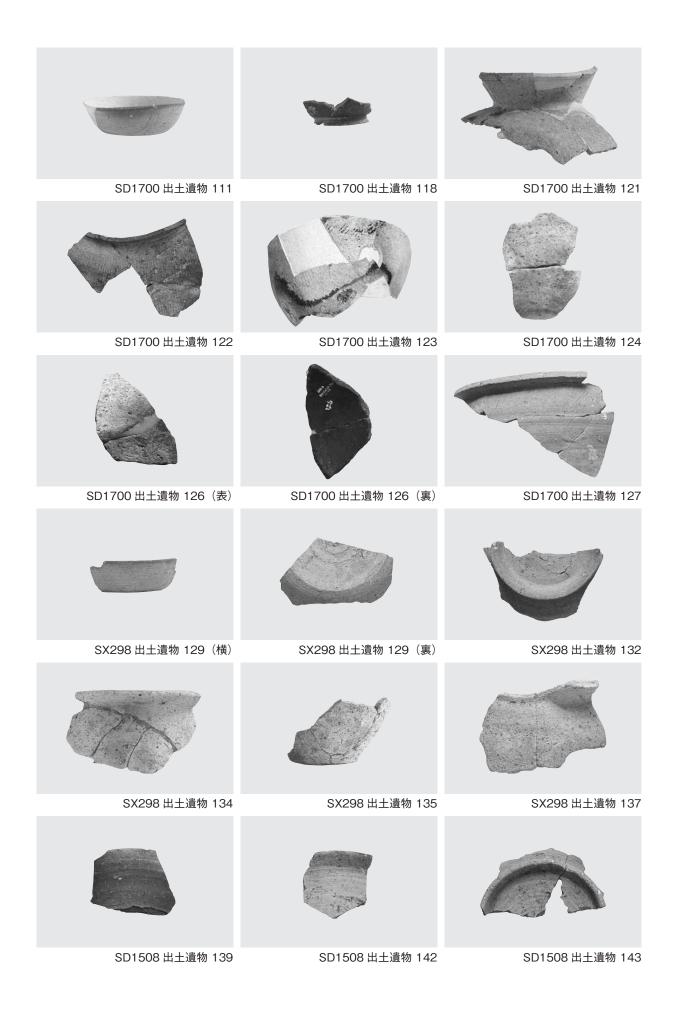
第 2 次調査出土遺物 17 ~ 20

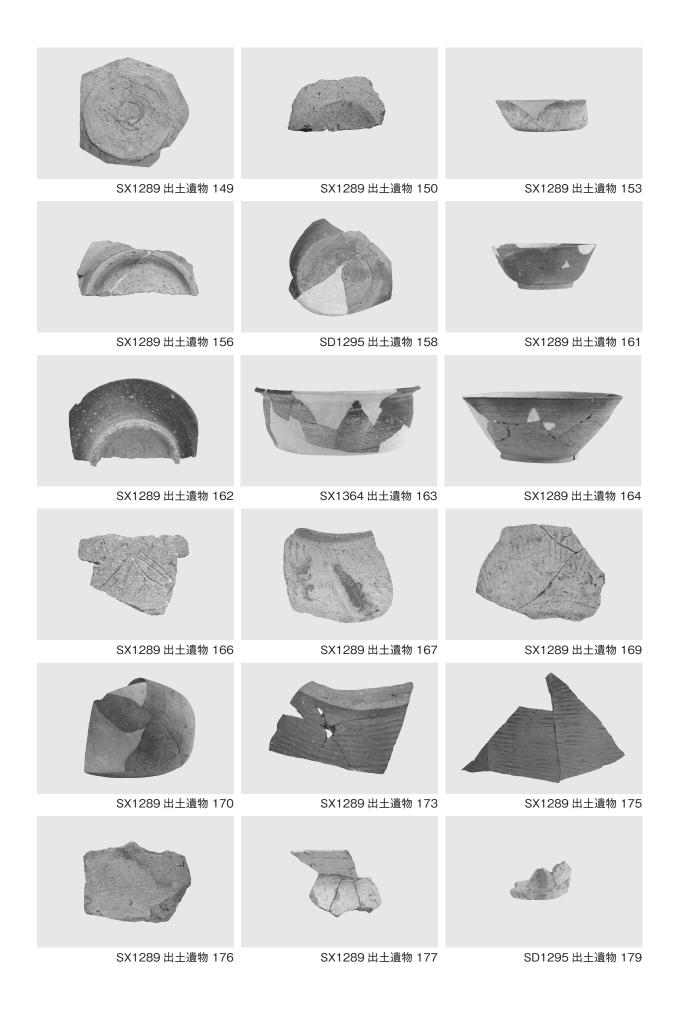
第 2 次調査出土遺物 21

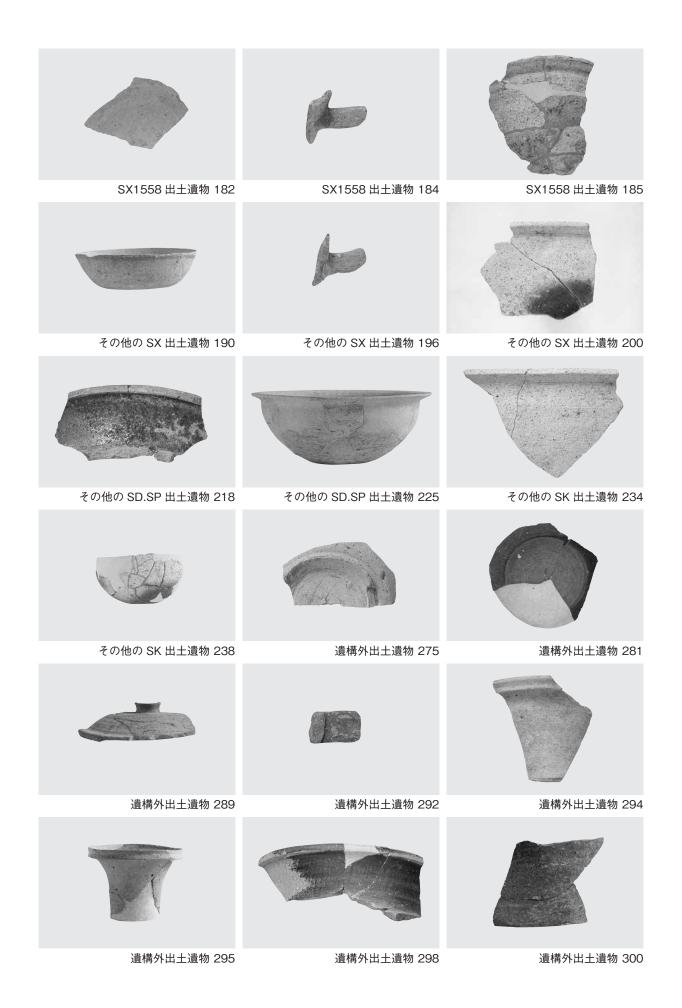
第2次調査出土遺物22~26













SD522 出土遺物 103 (弥生土器)



SD522 出土遺物 104 (弥生土器)



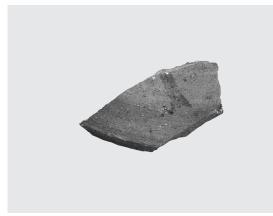
その他の SD.SP 出土遺物 228 (弥生土器)



その他の SD.SP 出土遺物 229 (弥生土器)



その他の SK 出土遺物 236 (弥生土器)



SB17 出土遺物 43 (墨書土器)



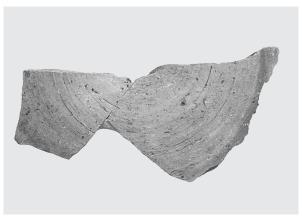
SD522 出土遺物 71 (墨書土器)



SD522 出土遺物 73 (墨書土器)



SD522 出土遺物 81 (墨書土器)



SX298 出土遺物 133 (墨書土器)



SX1289 出土遺物 147 (墨書土器)



SX1289 出土遺物 159 (墨書土器)



その他の SX 出土遺物 186 (墨書土器)



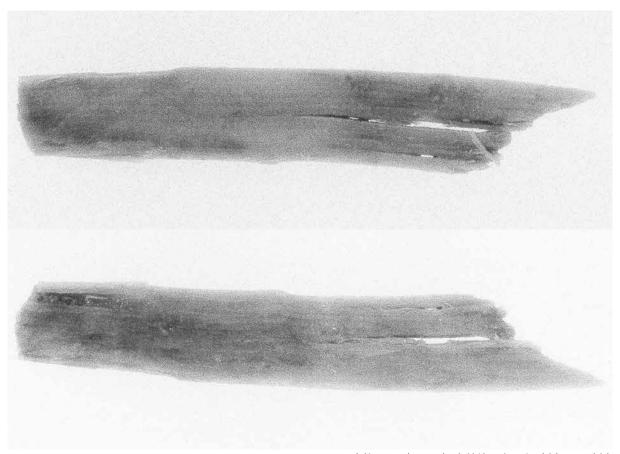
その他の SX 出土遺物 191 (墨書土器)



その他の SX 出土遺物 198 (墨書土器)



その他の SD.SP 出土遺物 210 (墨書土器)



木簡 439(RW 4)赤外線写真 上(表)・下(裏)



SD231RW4 木簡 439 出土状況↑ E



SD231RW4 出土状況↑ E



SX1289RW136 木簡 438 出土状況↑ E



SX1289RW136 出土状況↑ E

## 石田遺跡出土木質遺物の樹種

東北芸術工科大学 北野 博司·松井 敏也 小林 啓

山形県山形市谷柏の石田遺跡から出土した木質遺物 172 点の樹種を同定した。同遺跡は8世紀末から9世紀中頃までの掘立柱建物跡と方形に区画された木柵跡が主な遺構で、出土した木質遺物は柱根、礎板、木柵などこれらの遺構に伴うものと、自然木と思われる数点の木片がある。これらの試料からカミソリを用いて横断・接線・放射の各断面の切片を採取し、光学顕微鏡で観察同定した。その結果、172 点中から広葉樹 6 樹種、針葉樹 2 樹種の合計 8 樹種が同定された。以下に同定された樹種の材形質を略記し、その顕微鏡写真を Photo. 1 ~ 24 に示した。同定した組織プレパラートは山形県埋蔵文化センターに保管されている。

## 1. クリ Photo: 1~3

環孔材。年輪の始めに円形のきわめて大きい道管が1~3列にならび、そこから次第に径を減じ、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に多数配列する。道管は単穿孔を有し、内部にはチロースの存在が著しい。道管径は日本産材の中で最大級である。放射組織は同性で、通常単列であるが、まれに部分的に2列になる場合がある。

水質性に対する保存性のよさから建築材、土木用材として広く用いられるクリ材だが、当遺跡でも柱根、礎板、木柵とすべての建築材に使用されている。

## 2. コナラ節 Photo: 4~6

環孔材。孔圏道管は1~3列で、直径は非常に大きく300~350 μmに達する。孔圏外の小道管は薄壁で角張っており、放射状ないしは火炎状に集団をなして分布する。道管は単穿孔で、内部にはチロースが存在する。軸方向柔細胞は接線状ないしは網状となり、内部には結晶が見られることがある。道管放射組織間壁孔は大型で円形ないし楕円形を呈する。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織とがみられる。

### 3. クヌギ節 Photo: 7~9

環孔材。孔圏道管は直径 300 μ m以上で 1 ~数列となり、内部にはチロースを含む。孔圏外の小道管は単独で壁が厚く円形で、放射方向に配列する。道管は単穿孔で、軸方向柔細胞は 1 ~3 列で接線状にならぶ。道管放射組織間壁孔は柵状を呈する。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織とがみられる。クヌギ節には、クヌギおよびアベマキがそれに属するが、木材の顕微鏡観察からはクヌギとアベマキの区別はきわめて困難である。

### 4. 二レ属 Photo: 10~12

環孔材。孔圏道管はきわめて大きく  $400~\mu$  mとなり、 $1\sim3$ 列となる。孔圏外では小道管が多数集合して接線状ないし斜線状に配列する。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。軸方向柔細胞は周囲状およびターミナル状に配列し、縦に鎖状につながった結晶細胞を持つ。道管放射組織間壁孔はやや大形でまばらなふるい状となる。放射組織は同性で $1\sim6$ 列、高さは1 mm以下となる。

## 5. ハンノキ属 photo: 13 ~ 15

散孔材。道管の直径は70~80 μ mで、単独ないし2~8 個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有し、階段の数は多く20本以上となる。木繊維はしばしば隔壁を有する。軸方向柔細胞は短接線状ないし散在状となる。道管放射組織間壁孔はふるい状で小さく多い。放射組織は単列同性で、高さはおおむね0.5 mm以下となり、顕著な集合放射組織がみられる。木口面では集合放射組織のあるところで年輪界が内側にへこむ。

### 6. トネリコ属 Photo: 16~18

環孔材。孔圏道管は直径 300  $\mu$  m以下となり、 $1\sim5$  列で孔圏を形成する。孔圏外の小道管は単独ないし2~4 個が放射方向に複合して散在する。小道管の壁は非常に厚く、小道管相互壁は特に厚い。道管は単穿孔を有し、内部にはチロースが存在する。道管側壁には相互壁孔があり、軸方向柔細胞は周囲状およびターミナル状に配列し、周囲状のものは年輪の外境に近づくにつれて翼状ないし連合翼状となる。ターミナル柔組織は $4\sim5$  列できわめて顕著である。道管放射組織間壁孔はきわめて小さく多い。放射組織は同性で $1\sim2(4)$  列となり、高さは1 m以下。ピスフレックスがみられることがある。

### 7. スギ Photo: 19 ~ 21

早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅が比較的広く、また年輪界が明瞭で早材と晩材との硬さの差が大きい。樹脂細胞は早材部にはまれにしか見られず、晩材部で接線方向に点々と並ぶ傾向がある。放射組織は単列で、多くは10細胞高以下であり、すべて放射柔細胞からできている。分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に1~3個(通常2個)存在する。

### 8. マツ属複維管束亜属 Photo: 22 ~ 24

早材から晩材への移行は急で、晩材幅も広い。早材から晩材にかけての移行部分には垂直樹脂道が見られる。マツ属一般にいえる事であるが、樹脂道は大型でチロソイドを含むことが多い。放射組織の上下両端の細胞は放射仮道管、その内側の細胞は放射柔細胞である。放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に不規則に突出している。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列で多くは10細胞高以下である。水平樹道がある。

樹種	点数
ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	110
ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	1
ブナ科クリ亜科クリ属クリ	49
ニレ科ニレ属	2
カバノキ科ハンノキ属	1
モクセイ科トネリコ属	1
マツ科マツ属複維管束亜属	4
スギ科スギ属スギ	3
樹皮	1
合計	172

## 《参考文献》

- 1) 島地謙・伊藤隆夫 (1982) 『図説 木材組織』、地球社
- 2) 伊藤隆夫 (1995) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I ~ V』

※顕微鏡写真は上が樹皮方向、下が樹幹方向とする。尚、顕微鏡写真の配置は報告書の形態上、 単一樹種ごとの掲載が可能だったため、このような掲載方法とする。

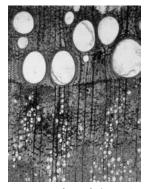


photo 1 [クリ]木口面



photo 2 〔クリ〕まさ目面



photo 3 〔クリ〕板目面

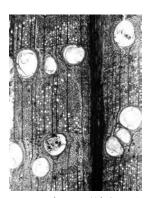


photo 4 [コナラ節]木口面



photo 5 [コナラ節]まさ目面

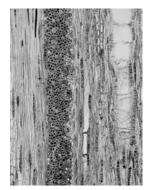


photo 6 [コナラ節]板目面

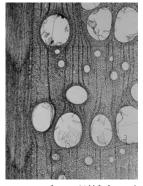


photo 7 [クヌギ節]木口面

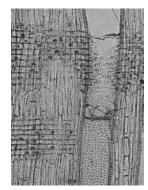
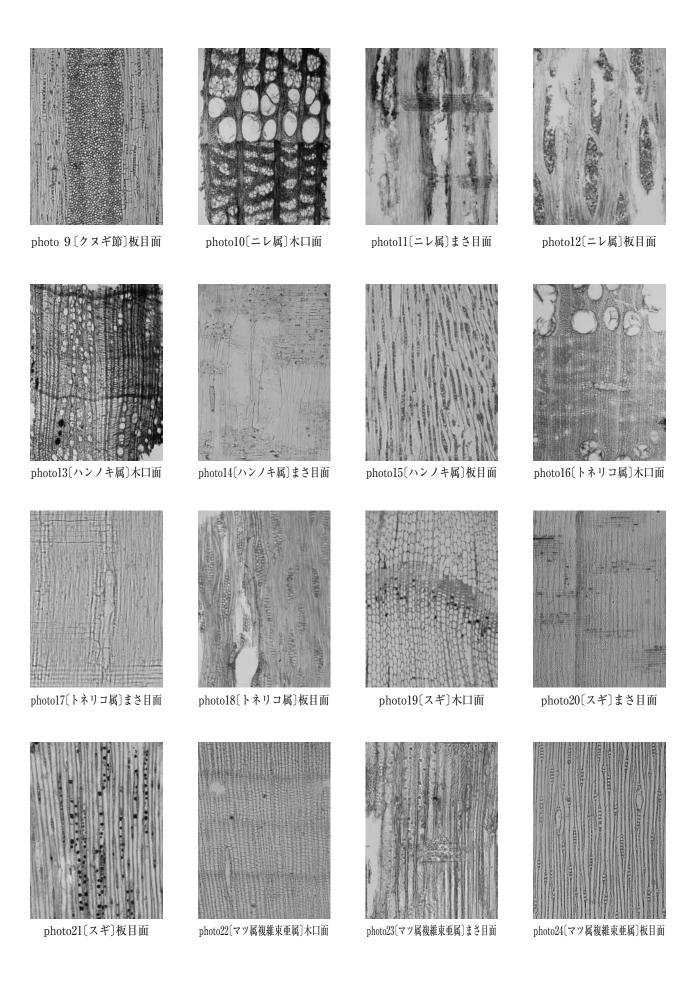
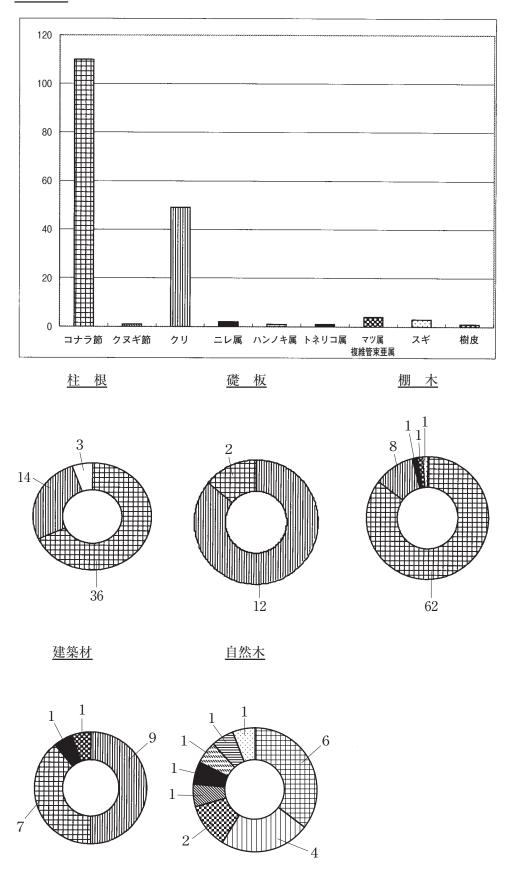


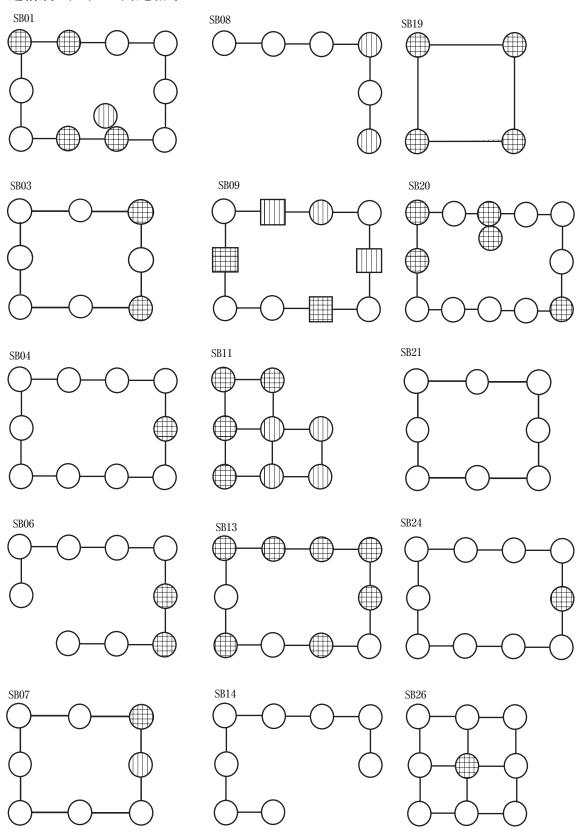
photo 8〔クヌギ節〕まさ目面



# 同定結果



遺構別 (SB) の同定結果



※⊕□はコナラ節, □□はクリ, ○□はその他, ○は柱根, □は礎板

遺物 No. 樹 種	遺物 No. 樹 種
RW 11 プナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 106 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 12 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 107 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW13 プナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 108 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 14 プナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 109 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 15 プナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 126 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 16 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 127 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 17 プナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 128 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW18 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 129 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 20 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 130 カバノキ科ハンノキ属
RW21 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 131 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 23 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 133 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 24 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 135 モクセイ科トネリコ属
RW 25 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 137 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW30 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 141 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW31 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 142 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW35 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 143 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW38 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 144 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 48 ブナ科クリ亜かクリ属クリ	RW 147 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 49 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 152 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 50 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 153 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 54 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 154 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 59 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 158 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW60 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 165 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 62 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 179 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 64 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 181 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 70 マツ科マツ属複維管東亜属	RW 183 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW71 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 185 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW72 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 186 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW73 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 187 ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW74 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 188 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 75 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 189 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 76 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 190 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 77 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 205 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 78 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 206 樹皮
RW82 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 207 スギ科スギ属スギ
RW86 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 208 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW87 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 213 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 95 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 221 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 96 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 222 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 97 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 223 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW98 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 227 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 99 ブナ科クリ亜科クリ属クリ	RW 241 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 100 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 RW 101 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 242 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 RW 248 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 101 フケ件コケク亜件コケク属コケク亜属コケク即 RW 102 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 248 フケ科コケラ亜科コケラ属コケラ亜属コケラ節 RW 249 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 102 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 250 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 103 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 250 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 105 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 252 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
	・

遺物 No.	樹種	遺物 No.	樹種
R W 253	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 373	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 254	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 385	スギ科スギ属スギ
R W 255	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 386	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 256	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 387	マツ科マツ属複維管束亜属
R W 257	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 391	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 258	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 399	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 259	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 400	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 260	ブナ科クリ亜科クリ属クリ	R W 403	ニレ科ニレ属
R W 261	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 404	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 271	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 406	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
$R\le 273$	マツ科マツ属複維管束亜属	R W 407	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 282	マツ科マツ属複維管東亜属	R W 408	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 287	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 409	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
RW 288	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 410	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 289	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	RW 411	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
$R\le 290$	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 412	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 291	ブナ科クリ亜科クリ属クリ	R W 413	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 292	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 415	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 293	ブナ科クリ亜科クリ属クリ	R W 416	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
RW 294	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 417	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
R W 295	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 422	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 296	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 423	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 297	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 424	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 298	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 425	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 299	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 426	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 300	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 427	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 349	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 428	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 350	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 429	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 351	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 430	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 352	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 431	スギ科スギ属スギ
R W 353	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 432	ブナ科クリ亜科クリ属クリ
R W 354	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 356	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節	R W 435	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節
R W 357		K W 436	ニレ科ニレ属ハルニレ
R W 358 R W 359	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 360	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 361	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 361	ブナ科クリ亜科クリ属クリ		
R W 362	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 364	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 365	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
R W 366	ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節		
V M 200	ノノイロノノ里作コノノ属コノフ里属コノブ即		

RW 367 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ節 RW 368 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 RW 369 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 RW 371 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節 RW 372 ブナ科コナラ亜科コナラ属コナラ亜属コナラ節

# 石田遺跡出土古代漆塗膜の科学的分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

### I. はじめに

山形市の南西部、JR奥羽線蔵王駅から西へ約2km に位置する石田遺跡<sup>1)</sup> は、本沢川扇状地の扇央に営まれ、奈良・平安時代の倉庫群が整然と並ぶ官衙的遺跡として注目されている。

石田遺跡からは漆塗りされた土師器や漆液容器とみられる遺物が出土し、その分析を行ったので報告する。後述のように官衙と漆は不可分の関係にあり、その確定は遺跡の性格にせまる重要な手がかりとなる。

### Ⅱ. 分析方法と結果

漆器の同定は通有偏光や金属顕微鏡による塗膜分析を行うが、石田遺跡の場合は土師器内面の付着に限定されるので、実体顕微鏡で表面観察した後、フーリエ変換赤外分光法(FT-IR)により、塗膜そのものの分析を行った(後述)。

以下、分析を行った資料の表面観察状況と赤外分光分析の同定結果を報告する。

◇No.1 (SD522-4, 図版 1)

漆液容器(パレット)

### 表面観察

内面黒色土師器(坏か)の底部内面全体に、茶褐色の塗膜が確認できる。大きな縮み皺が各所に形成され、厚いところで5mmほどである。表面の形状からみて貯蔵用の漆液容器から小分けされたパレットで、接着ないし何らかの漆工作業に用いられたものである。

◇No.2 (XO, 図版 1)

漆付着土師器

## 表面観察

内面黒色土師器(坏か)の底部内面全体に、茶褐色の塗膜が確認できる。部分的に小さな縮み皺が認められるが、全体に薄く均一な塗膜が形成されている。

◇No.3 (XO, 図版1)

漆付着土師器

### 表面観察

内面黒色土師器 (?) の底部内面全体に、茶色の塗膜が確認できる。全体に塗膜は薄くNo.2 と同じ状況である。

◇No.4 (XO. 図版 1)

漆付着土師器

### 表面観察

内面黒色土師器 (?) の底部内面全体に、茶色の塗膜が確認できる。全体に塗膜は薄くNo.2 と同じ状況である。

## 赤外分光分析

分光学(Spectroscopy)は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」<sup>2)</sup> と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法(Infrared Absorption Spectroscopy)という<sup>3)</sup>。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法(Fourier Transform Infrared Spectroscopy FT-IR)を用いた。赤外光は近赤外(波数  $14000 \sim 4000 \text{cm} - 1$ 、波長  $700 \text{nm} \sim 2.5 \ \mu \text{ m}$ )、普通赤外(波数  $4000 \sim 400 \text{cm} - 1$ 、波長  $2.5 \sim 25 \ \mu \text{ m}$ )、遠赤外(波数  $400 \sim 10 \text{cm} - 1$ 、波長  $25 \ \mu \text{ m} \sim 1 \text{ nm}$ )に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は 1 cm 当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である。

FT-IRは普通赤外の場合は波数  $4000 \sim 400 \, \mathrm{cm} - 1$  の光を 2つの光束に分割し、1 つは固定し(固定鏡、ミラーA)、他方の光路長は可動ミラー(可動鏡、ミラーB)を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光東間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節し、光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる $^4$ )。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

No.1~4は1~2 mgを試料として採取し、KBr(臭化カリウム)100 mgとともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた(錠剤法)。条件は分解能  $4 \, \text{cm} - 1$ 、積算回数 16、アポダイゼーション関数 Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図  $1 \sim 5$  に掲載した(図 5 以外はノーマライズ)。縦軸は吸光度(Abs)、横軸は波数(カイザー)である(測定機器は日本分光製 F T T R 420)。

図 1 はNo. 1 (①) とこれに類似した新潟県神林村城田遺跡 $^5$ )の土師器漆パレット(10 世紀初頭)の吸収(②)を重ねたものである。①は漆同定要素である 3435 cm  $-1 \sim 3400$  cm -1 (フェノール性 - OH)、2928 cm  $-1 \sim 2920$  cm  $-1 \cdot 2857$  cm  $-1 \sim 2850$  cm -1 (アルキル基)、1450 cm -1 (糖タンパク)、1280 cm  $-1 \sim 1272$  cm -1 (フェノール)、 $1080 \sim 1030$  cm -1 (多糖/ゴム質)の吸収がシャープである。②と比較した場合ゴム質の増大が著しいが、これは劣

化漆の特徴といえる。

図 2 は  $N_0$  2 (①) とこれに類似した前述の城田遺跡土師器漆パレットの吸収 (②) を重ねたものであるが、 $N_0$  2 は 図 1 の  $N_0$  1 と全く同じ吸収を示している。

図3はNo.3に漆塗膜の基準データとして、岩手県浄法寺産生漆塗膜(1990年作製)の吸収を重ねたものであるが、No.3は近似した吸収を示し、極めて劣化が少ない。

図 4 は No. 4 に前述の岩手県浄法寺産生漆塗膜の吸収を重ねたものである。2928 cm  $-1 \sim 2920$  cm  $-1 \cdot 2857$  cm  $-1 \sim 2850$  cm -1 の減少は酸化劣化を示し、全体にブロードな吸収となっているため同定が幾分困難である。しかし石川県穴水町西川島遺跡群白山橋遺跡 <sup>6)</sup> 出土の須恵器内面付着漆(7世紀)を介することによって、漆と同定して大過ない。

図5は全体の比較のために、No.1~4と基準データである新潟県神林村城田遺跡の土師器漆パレットと、岩手県浄法寺産生漆塗膜の吸収を重ねたものである。

## Ⅲ.小 結

本沢川扇状地の扇央に営まれた石田遺跡(8世紀末~9世紀中葉)は、20棟あまりの倉庫群が整然と並び、木簡や墨書土器の出土から官衙的遺跡と考えられるが、その性格を補強する遺物が漆である。

石田遺跡出土の漆工品の内容は、明らかに漆パレットであるNo.1と、土師器内面付着漆のNo.2~4に分けられる。後者については内面の塗りがわりと均一であることから漆塗りとみるか、あるいはうまく掻き取られた場合は同様の状態になることも不可能ではないが、現状では漆塗りの可能性が強い(図版1参照)。漆を塗ることで耐水性が向上し、土師器内面の黒色がよりつややかとなり光沢が増す。木製漆器の代用品としての性格も考えられよう。とまれ、これらは石田遺跡において何らかの漆作業が行われたことを示す証拠品として、重要な意義を有している。

古代においては平城京や国・郡衙をはじめとして、寺院建立や調度品製作など漆の需要は急増し、生産量に限りある貴重な漆は、中男作物・交易雑物・諸国年料として漆を貢納させた<sup>7)</sup>。能登の珠洲郡衙と推定されている珠洲市北方E遺跡(7世紀後半)<sup>8)</sup> では、「宮」の漆書土器とともに漆液運搬容器、漆パレットなど漆工用具が多数出土しており、大宝令以前から漆の集荷が行われていた可能性が指摘されている。金沢市戸水C遺跡<sup>9)</sup> では漆液を貯蔵した容器(漆桶・曲物)とその蓋紙(9世紀後、漆紙文書)が完全な形で残されていた。ここからは「官」「依」などの墨書土器や漆パレット、漆塗り土師器長胴甕も出土している。また、近刊の新潟県神林村樋渡・堀下遺跡<sup>10)</sup> からも良好な曲物漆液容器が出土している。

地方の官衙では単に漆の集荷<sup>11)</sup> だけでなく漆器の生産を行っており、寺院、富豪層の私的工房においても同様のことが行われていた。たとえば新潟県三島郡和島村八幡林遺跡(8~9世紀)では、壷・蓋など各種漆器のほか鏡箱のような漆塗円形容器(大型合子蓋)とともに漆刷毛も出土した。漆器には地方色がありここで製作されたと考えられる<sup>12)</sup>。八幡林遺跡からは「沼

垂城」「郡司符」木簡などが出土しているので、北陸の官衙関連遺跡における漆工生産事例として重要である。新潟県中条町船戸桜田遺跡<sup>13)</sup> は塩津潟に注ぐ船戸川右岸に営まれた古代集落(8世紀後半~9世紀)で、川跡から木簡(「合籾五石五斗」「麻続マ宿奈麻呂」)、墨書土師器(木・王)・須恵器(村・廣・古)と多くの木製品が出土している。漆器としては盤・椀・蓋とローカル色の強い鉢などが出土している。同じく近接する官衙関連遺跡と推定される中条町船戸川崎遺跡<sup>14)</sup> (8世紀後半~9世紀代)からは、「井家」「守部」「安麻呂」などの墨書土器とともに、木地盤、木地椀、椀・盤・高坏など在地的な漆器が出土している。注目されるのは炭粉と地の粉混合の漆下地漆器の存在で、古代の類例は少なく長岡京<sup>15)</sup> や石川県宇ノ気町指江 B遺跡<sup>16)</sup> で確認している程度である。

富山県入善町じょうべのま遺跡<sup>17)</sup> でも漆篦や漆刷毛が出土しているし、漆工作業を示す須恵器・土師器を転用したパレット類の出土は松任市横江荘家遺跡<sup>18)</sup>、輪島市釜屋谷B遺跡<sup>19)</sup>、金沢市畝田ナベタ遺跡<sup>20)</sup>、石川県宇ノ気町指江B遺跡をはじめとして類例が増えつつある。また加賀では、弘仁 13 年(823)の木簡が出土し加賀立国直前の官衙関連遺跡として注目された金沢市戸水大西遺跡<sup>21)</sup> からも、高杯・稜椀・皿・合子、そして漆革箱と思われる漆器が出土している。これも地方ではまれにみる多種の出土例であり、地方色のある漆器が出土しているので、在地産の可能性が高い。

以上、在地で漆作業や漆器生産を行っていた遺跡の例を紹介したが、漆樹の植栽(延喜式・桑漆帳)と漆液の集荷や木地・漆器生産は基本的には国家の管理下に置かれた。しかし、9世紀以降は大同3年(808)の官司整理統合にみられるように中央の生産体制の縮小化にともない、国・郡衙、寺社富豪層による在地の生産体制が整備されていった<sup>22)</sup>。在地での実態が具体的にどのようなものであったのかは発掘事例が証明してくれるが、さまざまな展開が予想される<sup>23)</sup>。石田遺跡からは漆桶や工具、漆器などは未発見であるが、前述の傾向を参考に漆利用の視点から遺跡の性格が明らかになることを期待している。

末筆ながら本稿作成に当たっては、山形県埋蔵文化財センター山口博之氏から何かとご便宜 をはかっていただいた。記して御礼申し上げる。

#### 註

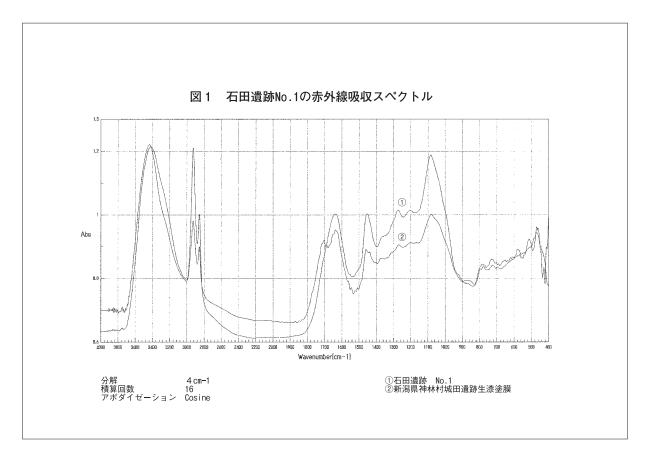
- 1) 山口博之・吉田江美子『石田遺跡 第3次調査説明資料』山形県埋蔵文化財センター,2000
- 2) 尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書. 1997
- 3) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 4) SILVERSTEIN・WEBSTER, 荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法— MS. IR. NMR の併用第6版』東京化学同人. 1999
- 5) 四柳嘉章「城田遺跡出土漆塗膜分析の科学的分析」『城田遺跡・引地遺跡』新潟県神林村 教育委員会・山武考古学研究所, 2001
- 6) 四柳嘉章編『西川島―能登における中世村落の調査』石川県穴水町教育委員会. 1987
- 7) 四柳嘉章「古代~近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第 34 号,1991

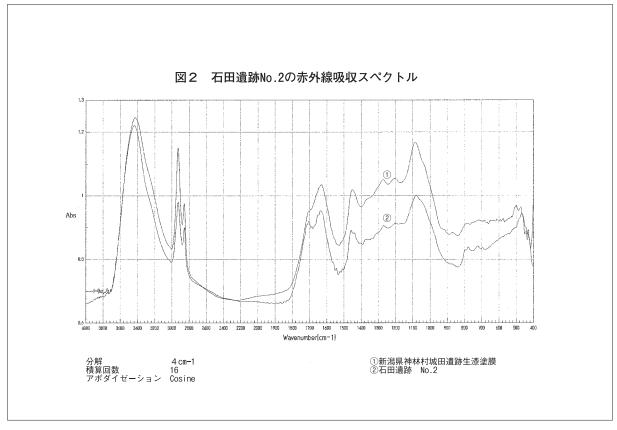
四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々 誌』第35号,1992

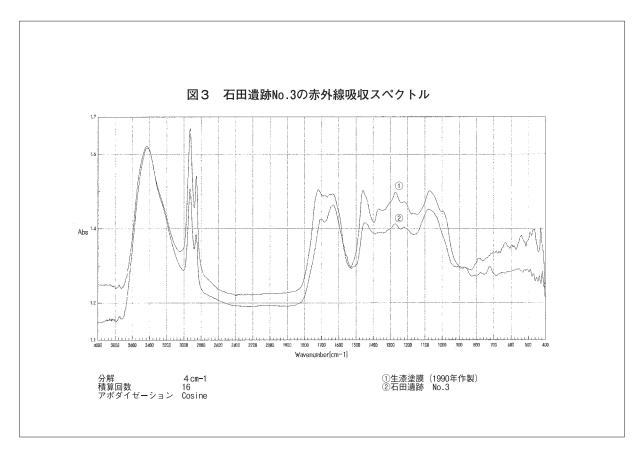
8) 1998年石川県珠洲市教育委員会調査

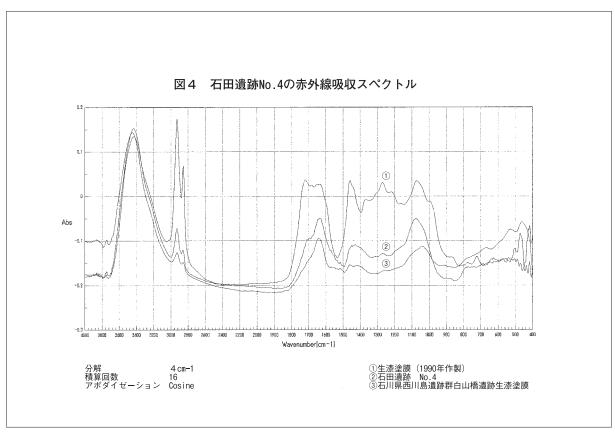
島県府中市教育委員会

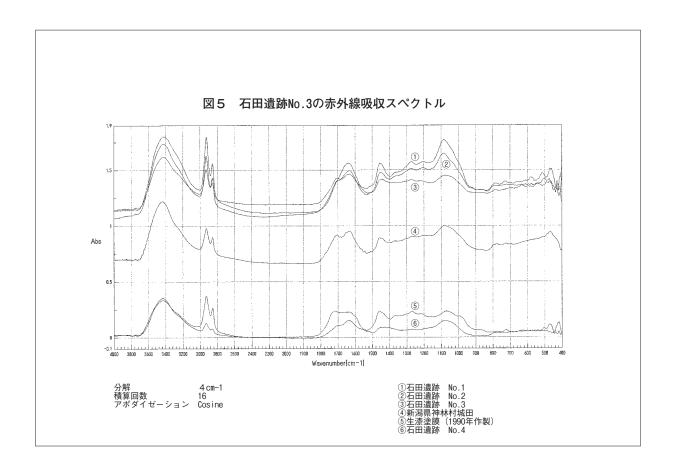
- 9) 平川 南「戸水C遺跡漆紙文書」『拓影』第35号,石川埋蔵文化財センター,1991 北野博司・久田正弘ほか『戸水C遺跡―平成2・3年度発掘調査報告書』石川埋蔵文化 財センター,1993
- 10) 新潟県神林村教育委員会·山武考古学研究所,調査報告書近刊
- 11) 玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版,1995 四柳嘉章「備後国府関連遺跡出土漆の科学的分析」『府中市内遺跡 4』広島県府中市教育 委員会,1999 四柳嘉章「府中市金龍寺東遺跡出土の須恵器壷内面付着物について」『金龍寺東遺跡』広
- 12) 坂井秀弥・田中 靖「新潟県八幡林遺跡と出土木簡」『日本歴史』521 号, 1991 「八幡林遺跡現地説明会資料」新潟県教育委員会, 和島村教育委員会, 1992 和島村教育委員会『八幡林遺跡』1992 ~ 1994 年 四柳嘉章「北陸出土の古代~中世漆器の塗膜分析報告」『北陸の漆器考古学―中世とその 前後』北陸中世土器研究会, 1997
- 13) 水澤幸一「船戸桜田遺跡」『木簡研究』第22号, 2000 報告書近刊
- 14) 水澤幸一「船戸川崎遺跡」『木簡研究』第21号 木簡学会, 1999 報告書近刊
- 15) 岡田文男『古代出土漆器の研究』京都書院, 1995
- 16) 久田正弘「指江遺跡群」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 石川県埋蔵文化財センター, 1999 大西 顕「指江遺跡・指江B遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号 石川県埋蔵文化財 センター, 2000 報告書近刊
- 17) 阿部義平・高島忠平ほか『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』 富山県教育委員会、1974
- 18) 吉岡康暢・浅香年木ほか『東大寺領横江庄遺跡』石川県松任市教育委員会・石川考古学研究会,1983
  - 木田 清・前田清彦ほか『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』石川県松任市教育委員会. 1996
- 19) 四柳嘉章「輪島市釜屋谷B遺跡出土の古代漆器―古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷B遺跡』石川県輪島市教育委員会, 1997
- 20) 布尾幸恵「畝田ナベタ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号,石川県埋蔵文化財センター,2001
- 21) 出越茂和「石川県金沢市戸水大西遺跡」『日本考古学年報』第46号, 1995
- 22) 四柳嘉章「古代〜近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第 34 号,1991
- 23) 四柳嘉章「漆器考古学の方法と中世漆器」『考古学ジャーナル』第 401 号, 1996 四柳嘉章「概説・北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学―中世とその前後』北陸中世土 器研究会, 1997

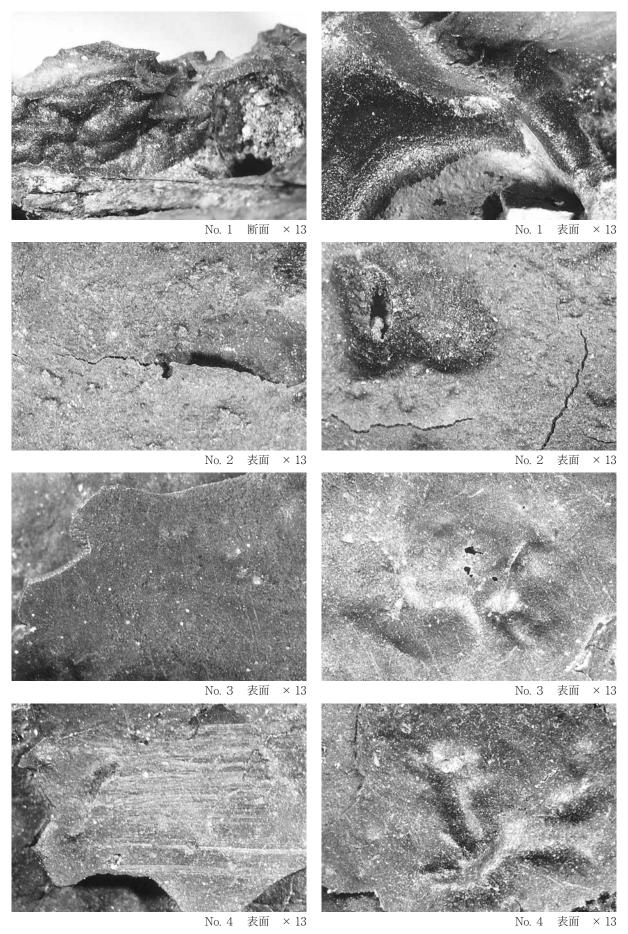












# 石田遺跡の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

山形県山形市大字谷柏字石田に所在する石田遺跡において古代の役所とみられる建物跡が検 出されている。こうした居住空間地において花粉分析から復元される植生が、水田などの生産 の場で復元される植生とどのような関係あるいは相違があるのかを検討する目的で土壌試料が 採取され花粉分析が実施された。以下に花粉分析結果を示し、石田遺跡周辺の古植生について 検討した。また、生産地との比較についても若干記した。

### 1. 試料と分析方法

試料は溝あるいは池状の湿地(SX1289)より採取された1試料である。土層は黒色の泥炭質粘土で、植物遺体が点在している。時代は出土遺物などから8~9世紀頃と考えられている。 花粉分析はこの1試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料(湿重約3g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

#### 2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉 23、草本花粉 20、形態分類で示したシダ植物 胞子 2 の計 45 である。これら花粉・胞子の一覧を表 1 に、また花粉・胞子の分布を図 1 に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、樹木類で最も多く検出されたのは20%弱の出現率を示しているコナラ属コナラ亜属で、ブナ,ハンノキ属が10%をわずかに越えてコナラ亜属に次いでいる。また、マツ属複維管東亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)、スギ、イチイ科 – イヌガヤ科 – ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)、ヤナギ属、ニレ属 – ケヤキ属が5~10%を示し、その他クルミ属、ウルシ属、カエデ属、トチノキ属、ブドウ属などが1%を越えて検出されている。草本類ではイネ科が最も多く、出現率は20%強を示している。次いでカヤツリグサ科、ヨモギ属、クワ科が多く、10%前後検出されている。その他アカザ科 – ヒユ科、ナデシコ科、

マメ科が1%を越え、水生植物(抽水植物)のガマ属、イボクサ属、ミツガシワ属などが若干検出されている。

### 3. 遺跡周辺の古植生

先に記したが、分析試料の時代は8~9世紀頃と考えられており、この頃の石田遺跡周辺山地・丘陵部ではコナラ亜属、ブナが優勢であり、これらに混じるようにクマシデ属-アサダ属、 ニレ属-ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属などが生育し、林縁部を中心にウルシ属もみられた。 またこれら樹木に絡まるようにブドウ属が生育しており、石田遺跡周辺山地・丘陵部ではこれら落葉広葉樹林が広く成立していた。

これらに加えニョウマツ類もやや多く検出されており、スギやヒノキ類とともに人為的要素の高い二次林を一部に形成していたとみられる。これは遺跡で検出された建物の建築材として周辺山地・丘陵部に成立していた落葉広葉樹林を利用した結果、森林は一部破壊され、その跡地にニョウマツ類などが侵入し二次林を形成したのであろう。

一方試料を採取した低地部(溝や沼沢地)では土手などに湿地林を形成するハンノキ属が生育しており、一部にヤナギ属やクルミ属、クワ科なども分布していた。また草本類のイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科 – ヒユ科、ナデシコ科、ヨモギ属などが生育しており、溝や沼沢地などの湿地にはガマ属、イボクサ属、ミツガシワ属などの抽水植物がみられた。

#### 4. 館跡周辺の古植生について

東京都板橋区の舟戸遺跡(平安期の館跡の溝内堆積物)においては全花粉・胞子のうちの約80%を草本類が占め、トップはヨモギ属で、次いでヘクソカズラ属、イネ科と続いている(辻1988)。その他ノブドウ、ブドウ属などヘクソカズラ属を合わせ、つる性の植物が種類・量ともに目立ち、土手や屋敷周辺の植生が雑草一色に変貌していたかが窺われる結果が示されている。石田遺跡においても草本類が最も多く約65%を占め、屋敷地の特徴を示しているようにも思われる。しかしながら、上記のような屋敷地周辺雑草としてはヨモギ属の他はツユクサ属がわずかに検出されているにすぎず、人間の干渉を推測させるような分類群はあまり検出されていない。また樹木類もブナの出現率は10%を越え、コナラ亜属は20%近い値を示しているなど比較的多く得られている。

一方生産地として低湿地と水環境が類似する水田稲作地についてみると、当然ながらイネ科花粉が多産し、水田雑草を含む分類群(オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属など)もいくつか検出されることが多い。宮城県仙台市富沢遺跡の水田層からは水田雑草のサジオモダカ属 (Alisma),オモダカ属 (Sagittaria),ミズユキノシタ属 (Ludwigia) が検出されている (守田 1991)。石田遺跡においては水田雑草を含む分類群はほとんど検出されておらず、溝や沼沢地に見られような分類群 (イボクサ属,ツリフネソウ属,ミツガシワ属など) が得られている。このように今回の花粉分析から推測される植生は人間の干渉を強く示すものではないと考え

られる。すなわち周辺山地・丘陵部にはコナラ亜属やブナを主体とした落葉広葉樹林が成立し

ており、この落葉広葉樹林が建築材や燃料材など人間の干渉をうけ、その跡地に一部ニョウマツ類やスギの二次林が形成されていたと推測される。一方低湿地には抽水植物のガマ属、イボクサ属、ミツガシワ属などが、また土手などには湿地林や河畔林を構成するハンノキ属、ヤナギ属、クワ科や草本類のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが生育していた。

なお参考までに花粉粒の散布について少し記すと、日比野・安田 (1973) は宮城県内における空中花粉と植生について述べている。それによると、ブナ属は母樹生育地帯から遠ざかるにつれて割合は低くなるものの、10km 以上離れる場合は遠距離まで均一に運ばれるようである(母樹地帯の3割程度の個数)。またナラ属 (コナラ亜属) は採集地点にあまり差異がなく得られており、母樹の近くといってもそれほど多くはならないようである。

### 引用文献

日比野紘一郎・安田喜憲(1973) 宮城県内における空中花粉と植生との関係. 東北地理, 25, p.224-230.

- 守田益宗(1991) 富沢遺跡(第 30 次調査)の花粉分析. 仙台市文化財調査報告書第 149 集 富沢遺跡 - 第 30 次調査報告書第 I 分冊 - 縄文~近世編, 仙台市教育委員会, p.405-424.
- 辻誠一郎(1988) 花粉分析に見る人間と自然. 週刊朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み 方3 考古学への招待, 朝日新聞社, p.51 52.

和名	学名		
樹木			
99.7v モミ属	Abies	1	
マツ属複維管東亜属	Pinus subgen. Diploxylon	10	
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	7	
コウヤマキ属	Sciadopitys	1	
スギ	Cryptomeria japonica D. Don	10	
イチイ科=イヌガヤ科-ヒノキ科	T C.	11	
ヤナギ属	Salix	11	
クルミ属	Juglans	- 5	
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	5	
カバノキ属	Betula	3	
ハンノキ属	Alnus	16	
ブナ	Fagus crenata Blume	18	
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	27	
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	2	
クリ属	Castanea	1	
ニレ属ーケヤキ属	Ulmus - Zelkova	11	
エノキ属ームクノキ属	Celtis-Aphananthe	1	
ウルシ属	Rhus	2	
ニシキギ科	Celastraceae	1	
カエデ属	Acer	4	
トチノキ属	Aesculus	2	
ブドウ属	Vitis	2	
ニワトコ属近似種	cf. Sambucus	3	
草本 ガマ属	Typha	1	
イネ科	Gramineae	124	
カヤツリグサ科	Cyperaceae	73	
ツユクサ属	Commelina	1	
イボクサ展	Aneilema	1	
クワ科	Moraceae	51	
	Olygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	3	
アカザ科ーヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	13	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	6	
カラマツソウ属	Thalictrum	1	
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	î	
アプラナ科	Cruciferae	4	
バラ科	Rosaceae	2	
マメ科	Leguminosae	7	
ツリフネソウ属	Impatiens	4	
セリ科	Umbelliferae	2	
ミツガシワ属	Menvanthes	1	
コモギ属	Artemisia	58	
他のキク亜科	other Tubuliflorae	5	
タンポポ亜科	Liguliflorae	ĭ	
シダ植物 単条型胞子	Monolete spore	39	
三条型胞子 三条型胞子	Trilete spore	2	
	Arboreal pollen	154	
t# -1- 1t #4	Aiborest policii		
	Negaphanaal nallan		
草木花粉	Nonarboreal pollen		
草木花粉 シダ植物胞子	Spores	359 41	
樹木花粉 草本花粉 シダ植物胞子 花粉・胞子総数			

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

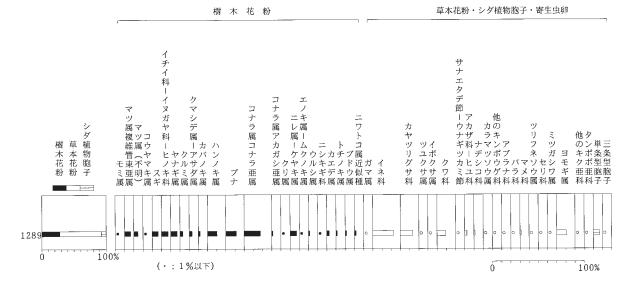
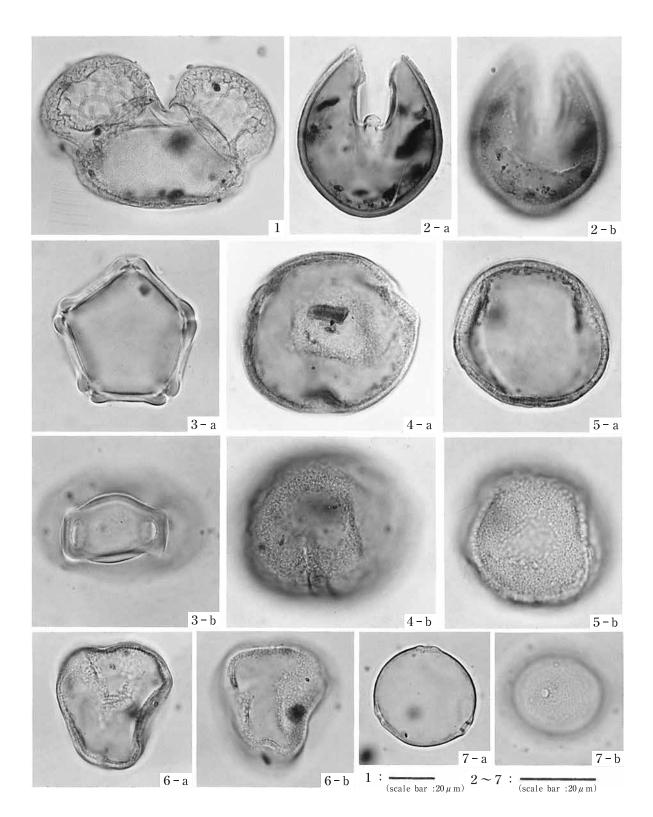


図1 石田遺跡低湿地堆積物(SX1289)の花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)



図版 石田遺跡の花粉化石

1:マツ属複維管束亜属 PLC.SS 2969 5:コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 2966 2:スギ PLC.SS 2971 6:カヤツリグサ科 PLC.SS 2967 3:ハンノキ属 PLC.SS 2965 7:クワ科 PLC.SS 2968 4:ブナ PLC.SS 2970

# 石田遺跡出土有機物遺物の同定

東北芸術工科大学

### 【はじめに】

山形県石田遺跡出土の敷物遺物の解析を試みたので報告する。

この遺物は、肉眼観察から樹皮もしくは草本植物からなる編物状の製品と考えられた



写真1 遺物【矢印】の出土状態写真

(写真1)。

木本植物は形成層が活発に細胞分裂することから幹が太り、その結果、放射組織などが確認できることになる。したがって、樹木の場合は3方向(木口面、柾目面、板目面)の薄片を採取することにより樹種の鑑定が可能である。しかし、樹皮の場合は樹種の組織細胞学による同定が困難であるといわれている。木本植物に対し草本植物の場合は形成層が発達せず、茎を毎年太らせることがないので、放射組織が発達しないことから判断できる。

### 【結果】

軸方向の切片の写真を写真 2、3に示す。写真からは木材には見られる放射組織を確認することができなかった。木材を同定するために必要な 3 方向(木口面、柾目面、板目面)の切片を作成することができなかったので断定はできないが、本試料は草本植物と思われる。イネ科の植物の薄片を作成したところ、類似性が見られず、イネ科ではない可能性が高い。





写真2 軸方向に相当する組織の実体顕微鏡写真





写真3 光学顕微鏡写真

# 報告書抄録

ふりがな	いしだいせきはっくつちょうさほうこくしょ										
書 名	石田遺跡発掘調査報告書										
副書名											
卷次											
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書										
シリーズ番号	第122集										
編著者名	山口博之										
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター										
所 在 地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301										
発行年月日	2004年3月26日										
所収遺跡名	所在地	コ- 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因			
nl だ n tè 石田遺跡	山形県 山形市 大字谷柏 字石田	6201	82	38度 12分 36秒	140度 17分 32秒	第2次 19990511 「19990806 第3次	4,850	東北中央 道相花沢山 (上間) 東東			
						20000418  \$\frac{1}{5}\$ 20000825	4,500	建設工事			
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項					
集落跡	縄文時代 中期・後 期	埋設土器 掘立柱建物 囲繞施設 柵列		土師器 須恵器 柱材 木簡		古代の囲繞施設を持つ倉庫群 であろう (総出土箱数99)					
官衙関連遺跡	奈良・ 平安時代	土坑柱穴									

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 122 集

## 石田遺跡発掘調査報告書

2004年3月26日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター 〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目 15番1号 電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社 〒990-0821 山形市北町1丁目3-1 電話 023-684-5555 (代)